弘前大学医学部保健学科・心理支援科学科

大学院保健学研究科

2020 年度

自己点検・評価報告書

令和３年１２月

はしがき

本報告書は，弘前大学大学院保健学研究科自己評価委員会（以下「自己評価委員会」）が，自己評価委員会要項に基づき，2020 年度の保健学研究科及び保健学科としての活動等を自己点検評価し，その結果をまとめたものである。

近年，大学の教育研究の質保証においては，大学自らの自己点検・評価とそれに基づく自己改善，それらの改善に向けた組織的な活動である「内部質保証」の考え方が重視されてきている。こうした流れのなかで，弘前大学においては新たな組織評価の創設，外部評価の受審，2019 年度（平成 31 年度）には７年に一度の機関別認証評価の受審を受け，自己評価委員会においても，多くの方の協力を得て，また相応の時間と労力をかけてこれに対応してきた。特に機関別認証評価の受審により，大学全体としての自己評価体制が見直され，規程上の整備が進んだが，効果的・効率的な自己評価の実施はこれからの課題と言える。各部局においては，上記評価のための基礎資料作成，調査，集計等の業務に追われている。教育・研究水準向上に活かす目的で評価を受け，結果的に教育・研究等の時間を無駄に割くのでは本末転倒でありながら，やはり各データ収集等にあたり各教員に依頼せざるを得ない心苦しい状況が続いている。

そこで，昨年度の自己評価では，自己評価体制の実質化と効率化の２つの観点から，一つの試みを行った。大学全体での自己評価の PDCA サイクル及び部局内 PDCA サイクルを連結させるため，毎年行われている調査や組織評価の業績等を使用して，大学本部に提出する資料と同一の資料を部局自身でも評価した。これが定例になれば，改めて教育・研究業績に関して教員に問合せをする等の無駄が省けることとなる。また大学本部の自己評価と部局内自己評価が繋がることで，教育・研究業績がどのように評価され，結果的に部局の評価となるのか可視化されることで，自らの教育・研究への取り組みに反映され，自己評価体制がより実質化されることを望むものであった。

昨年度の自己点検評価報告書発行後，部局内の様々な場面において，これらの自己点検評価結果を基にした活動の展開がみられ，自己改善に向けた部局内の意識醸成が促進されてきたことを感じている。そこで今回の自己評価においても，前回報告書作成時の考えを踏襲した。自己評価委員会要項において点検評価される項目のうち，教育，研究，社会貢献活動の評価においては，前述の組織評価や研究業績数調査等のデータを用い，項目Ⅱ～Ⅳに，自己評価委員による評価とともに纏めた。その他の項目，自己評価体制等については，項目Ⅰでお示しすることで，自らの点検とともにご覧頂いた方の評価に委ねることする。

現在，大学全体で共通の評価指標が検討されているところであり，来年度の評価項目には変更がある可能性があるが，部局の特性に応じ，本報告書の発行が今後の保健学研究科の発展につながるよう，内容については今後も継続して検討していきたい。

最後に，本報告書の作成にあたっては，業務多忙のなか多くの関係者からもご協力をいただき，自己評価委員にも多くの労力を割いていただいた。この場を借りて心から謝意を表したい。

２０２１年１２月

保健学研究科自己評価委員長　伊藤　巧一

目　次

Ⅰ　現況 …… 1
　１．機構図 …… 2
　２．教員一覧 …… 3
　３．目標，ポリシー …… 5
　４．関係規程等 …… 22
　５．管理運営体制 …… 25

Ⅱ　教育 …… 27
　教育活動の状況１ …… 28
　教育活動の状況２ …… 53
　教育活動の自己評価１ …… 55
　教育活動の自己評価２ …… 57

Ⅲ　研究 …… 59
　研究活動の状況１ …… 60
　研究活動の状況２ …… 60
　研究活動の自己評価 …… 63

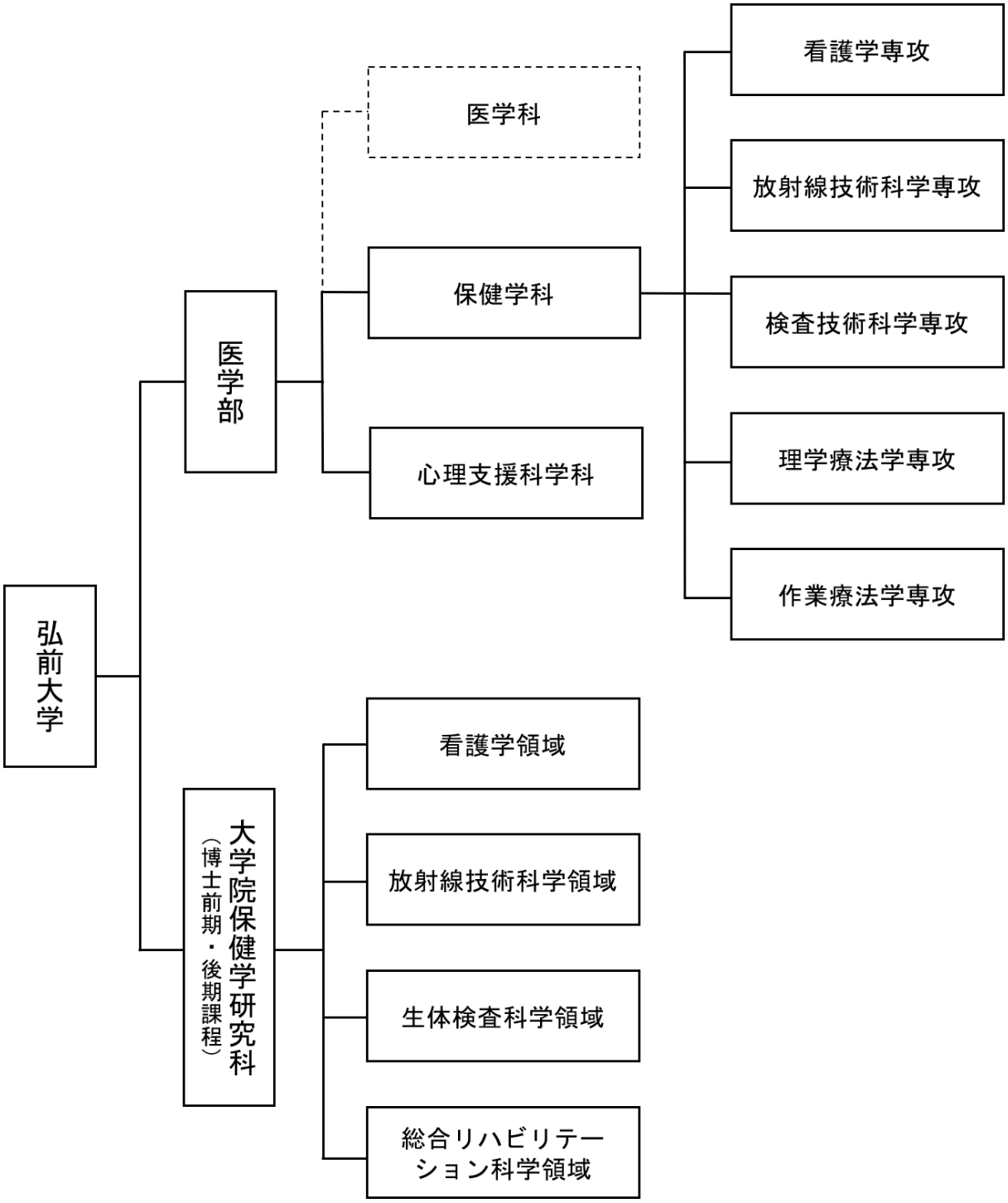
Ⅳ　社会活動等 …… 65
　社会活動等の状況１ …… 66
　社会活動等の状況２ …… 78
　社会活動等の自己評価 …… 81

巻末資料 …… 83

Ⅰ　現況

Ⅰ　現況

１．機構図


弘前大学
医学部
医学科
保健学科
心理支援科学科
看護学専攻
放射線技術科学専攻
検査技術科学専攻
理学療法学専攻
作業療法学専攻
大学院保健学研究科
（博士前期・後期課程）
看護学領域
放射線技術科学領域
生体検査科学領域
総合リハビリテーション科学領域

２．教員一覧

○保健学研究科　教員数　　（2021 年３月末日現在）

	教授	准教授	講師	助教	助手	計
看護学領域	10	6	3	11	5	35
放射線技術科学領域	6	2	3	7	0	18
生体検査科学領域	6	4	3	4	0	17
総合リハビリテーション科学領域	10	7	4	6	0	27
計	32	19	13	28	5	97

○領域別　教員一覧　　（2021 年３月末日現在）

【 看護学領域 】

氏名	職名
長内　智宏	教授
木立　るり子	教授
高橋　徹	教授
樋口　毅	教授
野戸　結花	教授
藤田　あけみ	教授
井瀧　千恵子	教授
小倉　能理子	教授
北宮　千秋	教授
冨澤　登志子	教授
五十嵐　世津子	准教授
三崎　直子	准教授
則包　和也	准教授
佐藤　真由美	准教授
漆坂　真弓	准教授
大津　美香	准教授
山本　美由紀	講師
扇野　綾子	講師

氏名	職名
會津　桂子	講師
北嶋　結	助教
橋本　美亜	助教
高間木　静香	助教
北島　麻衣子	助教
三上　佳澄	助教
工藤　ひろみ	助教
早狩　瑶子	助教
土屋　涼子	助教
山田　基矢	助教
太田　一輝	助教
多喜代　健吾	助教
秋庭　千穂	助手
工藤　麻理奈	助手
鎌田　璃沙	助手
成田　秀貴	助手
因　直也	助手

【 放射線技術科学領域 】

氏名	職名
中川　公一	教授
細川　洋一郎	教授
齋藤　陽子	教授
敦賀　英知	教授
高橋　康幸	教授
工藤　幸清	教授
廣田　淳一	准教授
門前　暁	准教授
對馬　惠	講師
中原　岳久	講師

氏名	職名
細田　正洋	講師
小山内　暢	助教
寺島　真悟	助教
吉野　浩教	助教
細川　翔太	助教
山口　平	助教
辻口　貴清	助教
嵯峨　涼	助教
柏倉　幾郎	特任教授
小倉　巧也	特任助教

【 生体検査科学領域 】

氏名	職名
中村　敏也	教授
渡邉　純	教授
伊藤　巧一	教授
丹藤　雄介	教授
山形　和史	教授
宮崎　航	教授
武尾　照子	准教授
吉岡　治彦	准教授
七島　直樹	准教授

氏名	職名
千葉　満	准教授
藤岡　美幸	講師
野坂　大喜	講師
葛西　宏介	講師
堀江　香代	助教
阿部　由紀子	助教
中野　学	助教
山内　可南子	助教

【 総合リハビリテーション科学領域 】

氏名	職名
石川　玲	教授
小山内　隆生	教授
山田　順子	教授
宮原　資英	教授
尾田　敦	教授
栗林　理人	教授
玉井　康之	教授
和田　一丸	教授
對馬　栄輝	教授
小河　妙子	教授
加藤　拓彦	准教授
髙見　彰淑	准教授
吉田　英樹	准教授

氏名	職名
松田　侑子	准教授
足立　匡基	准教授
髙橋　芳雄	准教授
平川　裕一	講師
上谷　英史	講師
藤田　俊文	講師
小枝　周平	講師
田中　真	助教
牧野　美里	助教
髙橋　純平	助教
石川　大瑛	助教
横田　純一	助教
佐藤　ちひろ	助教

３．目標，ポリシー

医学部保健学科・心理支援科学科及び大学院保健学研究科では，【１．入学者受入れの方針】（アドミッションポリシー＝ＡＰ），【２．教育課程編成・実施の方針】（カリキュラムポリシー＝ＣＰ），【３．卒業認定・学位授与の方針】（ディプロマポリシー＝ＤＰ）を以下のように定めている。

（１）医学部保健学科

アドミッションポリシー（ＡＰ）

１）医学部保健学科が求める学生像

医学部保健学科では，保健医療の高度な知識及び技術を習得し，豊かな人間性と問題解決能力を備え，創造性，独創性と国際的視野を有し，社会で活躍できる人材の育成を目的としています。そのような人材の育成を目指すにあたって，「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマポリシー）と「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラムポリシー）を十分に理解し，以下に掲げる学力・行動力・意欲を有する学生を求めます。

・保健医療専門職となるための学修に必要な基礎的学力
・将来，他の医療職者と協調しながら保健医療活動を実践するための行動力
・向上心と研究心を基に，保健医療の実践者として社会に貢献する強い意欲

また，医学部保健学科の各専攻は，それぞれ次のような学生を求めます。

看護学専攻

・人間や生命，健康に関心を持ち，看護専門職者として知的・人格的に成長しようとする意欲のある人
・人間の尊厳を重んじ，人や社会，文化の多様性を認め，人と良好な関係を築くことができる人

放射線技術科学専攻

・診療放射線技師専門職となるための学修に必要な学力を有し，特に理系の科目をしっかり履修した人
・チーム医療の一員として積極的にコミュニケーションを図り，他の医療技術者と互いに協力し合い，より良い医療を提供するための行動力のある人
・医療を安全に行う能力を有し，生涯にわたり向上心・探究心を持ち続け，知的・人格的に成長しようとする意欲のある人

検査技術科学専攻

・医療従事者としての自覚とチーム医療遂行のための協調性を持ち，鋭い観察力と洞察力ならびに応用力を備えて保健医療の発展のために積極的に行動できる人
・自然科学，保健医療，臨床検査に強い関心を持ち，検査職をとおして人々の健康維持・増進に積極的に取り組む意欲のある人

理学療法学専攻

・他者と適切な関係を築きながら，さまざまな人たちと協働して，障害者等が抱える問題の解決に取り組む行動力を有する人
・理学療法士として向上心・研究心を持って保健医療に取り組み，障害者等のリハビリテーションに貢献したいという強い意欲のある人

作業療法学専攻

・作業療法の対象者の個別の価値観や生活を尊重し，対象者の希望に沿った作業活動を考えつつ実践するための行動力のある人
・チーム医療の一員として，他職種を尊重しながら，作業療法を積極的に実行する意欲のある人

２）入学志願者に求める学習の取組

・医療従事者は，高度な知識や技術が求められますので，高等学校においては履修するすべての教科についての幅広い知識が必要とされます。
・チーム医療の一員として医療に関わることも多いため，課外活動やボランティア活動も含めて積極的な取り組みを行う行動力を持っていることが望まれます。
・研究心や探求心などに基づき，さまざまなことに関わる意欲や他者への思いやりを持つことが必要です。

３）入学者選抜の基本方針

医学部保健学科では学力・行動力・意欲を有する学生を選抜するために，多面的・総合的な評価方法により，別に定められた「入学者選抜方法と重点評価項目」及び「入学者選抜方法の内容と評価要素」（http://www.hirosaki-u.ac.jp/policy/img/2020/03/02APM02.pdf）のとおり入学者を選考します。

カリキュラムポリシー（ＣＰ）

医学部保健学科では，高度の医療技術はもとより，豊かな人間性と倫理性を兼ね備え，国民の健康と福祉に貢献できる保健医療の専門職の育成を目的としたカリキュラムを提供するという観点から，教育課程の編成・実施方針をつぎのように定めます。

看護学専攻

１．教育課程の編成・実施等
・幅広い教養【教養教育：社会・文化，自然・科学，人間・生命】と外国語の運用能力【教養教育：英語，多言語】を身に付け，保健医療分野の国際状況【教養教育：グローバル科目】や地域状況【教養教育：ローカル科目】を的確に見極める力を養います。
・基礎ゼミナール等で培った実践的学習能力をとおして国際社会や地域社会の多様性を認識するとともに，保健医療分野の課題を発見・解決する力を養います。【教養教育：スタディスキル導入・学部越境型地域志向科目群】
・専門共通科目は，各専攻に共通して必要な科目であり，保健医療専門職の立場から他領域を理解するとともに，保健医療への考え方及び保健医療専門職者としての資質を養います。【保健学概論，コミュニケーション論，医療リスクマネジメント，人体形態学，人体機能学，人体病理学など】
・専門基礎科目及び専門科目は，養成する保健医療専門職の国家試験受験資格を満たすために必要な科目であり，１年次から専門科目を組み込んだ楔型の構成とし，講義の後に演習・実習を展開します【母性看護学概論・演習実習，小児看護学概論・演習・実習，成人看護学概論・演習・実習，老年看護学概論・実習・演習，精神看護学概論・演習・実習，在宅看護学概論・演習・実習など】
・看護専門職に必要な知識を体系的に教授することで，人間や社会への洞察を深化させ見通す力を養います。【人間発達論，疾病論，社会福祉学，看護学概論，看護技術学，看護過程論演習など】
・看護学の専門知識を活用し，社会的ニーズの変化に気づき柔軟に対応し，チーム医療の一員として，他職種と連携・協働，調整能力を発揮し問題を解決していく力を培います。【看護学概論，基礎看護学実習など】
・看護専門職の教育や啓発に役立つ基礎的能力を身に付け，創造力と探求の習慣を確立し，生涯にわたって看護学を発展・向上させようと学び続ける力を培います。【看護教育学概論，看護教育方法論，卒業研究など】

２．教育・学習方法
（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。
（２）年次配置に応じて講義，演習，実習を効果的に組み合わせた教育を行います。
（３）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行います。
（４）自ら課題を見出し，その解決に向けて探求を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，学生が主体となる能動的な授業を行います。

３．学習成果の評価
（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。
（２）各科目の学習成果は，定期試験，実技試験，レポート，授業中の小テストや発表などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

放射線技術科学専攻

１．教育課程の編成・実施等

・幅広い教養【教養教育：社会・文化，自然・科学，人間・生命】と外国語の運用能力【教養教育：英語，多言語】を身に付け，保健医療分野の国際状況【教養教育：グローバル科目】や地域状況【教養教育：ローカル科目】を的確に見極める力を養います。
・基礎ゼミナール等で培った実践的学習能力をとおして国際社会や地域社会の多様性を認識するとともに，保健医療分野の課題を発見・解決する力を養います。【教養教育：スタディスキル導入・学部越境型地域志向科目群】
・専門共通科目は，各専攻に共通して必要な科目であり，【人体形態学，人体機能学，等】保健医療専門職の立場から他領域を理解するとともに，保健医療への考え方及び保健医療専門職者としての資質の育成を目指します。【保健学概論等】
・専門基礎科目及び専門科目は，養成する保健医療専門職の国家試験受験資格を満たすために必要な科目であり，１年次から専門基礎科目を組み込んだ楔型の構成とし，講義の後に演習・実習を展開します。【放射線物理学・演習，放射線計測学・演習・実験，等】
・専門知識と技術を統合するよう体系的に教授することで，論理的思考と客観的判断に基づく洞察力を養います。【診療画像技術学Ⅰ・Ⅱ・演習，核医学検査学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ，放射線治療機器工学・放射線治療技術学・演習Ⅰ・演習Ⅱ，等】
・放射線技術の専門知識を最新の医療技術に応用し，高度な専門知識を活かして問題を解決するための学術的問題解決能力を養います。【卒業研究等】
・診療放射線技師として，日々目覚ましく進歩を遂げる医療技術を学び，探求する習慣を獲得します。【臨床実習Ⅰ・Ⅱ等】

２．教育・学習方法

（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。
（２）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行います。
（３）自ら課題を見出し，その解決に向けて探究を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，学生が主体となる能動的な授業を拡充します。

３．学習成果の評価

（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。
（２）各科目の学習成果は，定期試験，レポート，授業中の小テストや発表などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

検査技術科学専攻

１．教育課程の編成・実施等

・幅広い教養【教養教育：社会・文化，自然・科学，人間・生命】と外国語の運用能力【教養教育：英語，多言語】を身に付け，保健医療分野の国際状況【教養教育：グローバル科目】や地域状況【教養教育：ローカル科目】を的確に見極める力を養います。
・基礎ゼミナール等で培った実践的学習能力をとおして国際社会や地域社会の多様性を認識するとともに，保健医療分野の課題を発見・解決する力を養います。【教養教育：スタディスキル導入科目，学部越境型地域志向科目，キャリア教育】
・専門共通科目は，各専攻に共通して必要な科目であり，保健医療専門職の立場から他領域を理解するとともに，保健医療への考え方及び保健医療専門職者としての資質を養います。【保健学概論，コミュニケーション論，医療リスクマネジメント，人体形態学，人体機能学，人体病理学など】
・専門基礎科目及び専門科目は，養成する保健医療専門職の国家試験受験資格を満たすために必要な科目であり，1 年次から専門科目を組み込んだ楔型の構成とし，講義の後に演習・実習を展開します。【医用情報機器工学，臨床生理学，臨床化学検査学，栄養・代謝学，分子生物検査学，尿検査学，病理組織細胞検査学，臨床免疫学，臨床血液学，臨床微生物検査学，内科学Ⅰ，Ⅱ，衛生学・公衆衛生学３など】
・臨床検査技師として必要な実践力を習得するとともに，専門知識と判断力をもって保健医療の一端を担う臨床検査学の諸問題を的確に見極める能力を身に付けます。【検査管理総論，臨床検査総合演習Ⅰ，Ⅱ，臨地実習など】
・チーム医療の一員として地域の保健医療に貢献できる連携能力を身に付け，問題解決能力を高めます。【地域医療検査学，感染制御学など】
・臨床検査技師として，保健医療分野の諸問題を探求し学び続ける力を獲得します。【卒業研究など】

２．教育・学習方法

（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。

（２）臨床検査に関する専門知識と技術の系統的な教育を行う。学習は講義・演習・実習を段階的に実施することで知識・理解・実践力を高め，臨床検査技師として必要な見通す力と解決する力を身に付けさせます。

（３）将来にわたって自ら臨床検査学分野の課題を見出し，その解決に向けた論理的思考力と実行力を養うため，日頃からプレゼンテーション，グループディスカッション，アクティブ・ラーニングを取り入れた学生主体の能動型授業を展開します。

３．学習成果の評価

（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。

（２）各科目の学習成果は，定期試験，レポート，授業中の小テストや発表などから臨床検査に関する専門知識及び技術の修得達成度を客観的に評価する。その評価方法については，授業内容の詳細とともに到達目標と成績評価基準をシラバスにおいて科目ごとに明示します。

理学療法学専攻

１．教育課程の編成・実施等

・幅広い教養【教養教育：社会・文化，自然・科学，人間・生命】と外国語の運用能力【教養教育：英語，多言語】を身に付け，保健医療分野の国際状況【教養教育：グローバル科目】や地域状況【教養教育：ローカル科目】を的確に見極める力を養います。

・基礎ゼミナール等で培った実践的学習能力をとおして国際社会や地域社会の多様性を認識するとともに，保健医療分野の課題を発見・解決する力を養います。【教養教育：スタディスキル導入科目，学部越境型地域志向科目，キャリア教育】

・保健医療専門職に必要な人体に関する基礎知識と健康・保健の知識・考え方を身に付けるとともに，保健医療専門職それぞれの役割と協働・連携について理解し，個人や社会における諸問題や課題を多元的に見通す力を養います。【専門共通科目：人体形態学，人体機能学，人体病理学，保健学概論，医療リスクマネジメント】

・リハビリテーションと理学療法に関する専門的知識・技術と考え方を１年次から体系的に学修し，リハビリテーションの対象者が抱える諸問題や地域の課題を見きわめ，チーム医療の一員として解決していく力を養います。【専門基礎科目：運動学，理学療法学概論，リハビリテーション医学】，【専門科目：理学療法評価学，臨床判断分析学，運動療法学，物理療法学，義肢装具学，筋骨格系障害・神経系障害・脳障害・内部系障害・小児・スポーツ障害理学療法学，地域理学療法学，理学療法管理学，臨床実習Ⅰ～Ⅴ等】

・理学療法学の学術的課題を計画的および論理的に探求・解決するための研究方法を身に付け，理学療法士として社会貢献を意識し，生涯にわたって自己の成長と保健医療分野の問題を探求・解決するために学び続ける力を養います【専門科目：理学療法研究方法論・理学療法研究演習】，【卒業研究】

２．教育・学習方法

（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。

（２）理学療法に関する専門教育をとおして理学療法の専門知識と実践力を習得し，リハビリテーション医療に関わる諸問題を見通す力と解決する力を涵養する教育を行います。

（３）演習，実習，臨床実習，卒業研究をとおして，その課題の解決に向けて探求を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けるため，学生が主体となる能動的な授業を行います。

３．学習成果の評価

（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。

（２）各科目の学習成果は，定期試験，レポート，実技試験，授業中の小テストや発表などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

作業療法学専攻

１．教育課程の編成・実施等

・幅広い教養【教養教育：社会・文化，自然・科学，人間・生命】と外国語の運用能力【教養教育：英語，多言語】を身に付け，保健医療分野の国際状況【教養教育：グローバル科目】や地域状況【教養教育：ローカル科目】を的確に見極める力を養います。

・基礎ゼミナール等で培った実践的学習能力をとおして国際社会や地域社会の多様性を認識するとともに，保健医療分野の課題を発見・解決する力を養います。【教養教育：スタディスキル導入科目，学部越境型地域志向科目，キャリア教育】

・保健医療専門職者として各専攻に共通して必要な基礎知識を修得させます。【専門共通科目：人体形態学，人体機能学等】
・チーム医療の一員である保健医療専門職の立場から他領域を理解するとともに，保健医療への考え方及び保健医療専門職者としての資質を養います。【専門共通科目：保健学概論，医療リスクマネジメント等のコア科目】
・養成する保健医療専門職の国家試験受験資格を満たすために必要な専門基礎科目及び専門科目は，１年次から専門科目を組み込んだ楔型の構成とし，講義の後に演習・実習を展開します。
・チーム医療の一員として地域のリハビリテーション医療に貢献しうる基礎的な力を養います。【専門基礎科目：リハビリテーション医学，言語療法学等】
・作業療法士に必要とされる実践力を涵養し，専門知識と判断力をもってリハビリテーション医療に関わる作業療法学の諸問題を的確に見極める能力を養います。【専門科目：作業療法評価学，作業治療学，臨床実習等】
・作業療法士として，リハビリテーション医療分野の諸問題を探求し学び続ける力を養います。【卒業研究Ⅰ，卒業研究Ⅱ】

２．教育・学習方法
（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。
（２）作業療法に関する専門教育をとおして作業療法の専門知識と実践力を習得し，リハビリテーション医療に関わる諸問題を見通す力と解決する力を涵養する教育を行います。
（３）演習，実習，臨床実習，卒業研究をとおして，その課題の解決に向けて探求を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けるため，学生が主体となる能動的な授業を行います。

３．学習成果の評価
（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。
（２）演習，実習，臨床実習，卒業研究をとおして，課題解決に向けての主体性・自律性およびリハビリテーション医療に関わる諸問題を見通す力と解決する力を評価します。
（３）各科目の学習成果は，定期試験，レポート，授業中の小テストや発表などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

ディプロマポリシー（ＤＰ）

医学部保健学科では，カリキュラムポリシーに基づいて編成された教育課程に沿って保健医療分野における専門知識・技能等を習得するとともに，豊かな人間性と倫理性を兼ね備え，国民の健康と福祉に貢献できる者に対して，看護学専攻は学士（看護学）の学位を，放射線技術科学専攻，検査技術科学専攻，理学療法学専攻，作業療法学専攻は学士（保健学）の学位を授与します。
具体的には，つぎの目標に達していることが学位取得の要件となります。

看護学専攻

・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い知識と各保健医療専門職としての専門的な知識・技術をもとに，保健医療分野の動向を見通す力を身に付けていること。
・修得した専門的知識・技術を保健医療の場で活かすことにより，直面する課題を解決する力をもっていること。
・医療専門職者として保健医療を正しく認識し社会貢献を意識し，生涯にわたり自分自身を成長させていくための探求力を身に付けていること。
・看護専門職に必要な最新の専門知識及び人間や社会への洞察を深化させ見通す力を身に付けていること。
・看護を取り巻く社会的ニーズの変化に柔軟に対応し，チーム医療の一員として，他職種との連携・協働，調整及び問題を解決する実践力を身に付けていること。

放射線技術科学専攻

・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い知識と各保健医療専門職としての専門的な知識・技術をもとに，保健医療分野の動向を見通す力を身に付けていること。
・修得した専門的知識・技術を保健医療の場で活かすことにより，直面する課題を解決する力をもっていること。
・医療専門職者として保健医療を正しく認識し社会貢献を意識し，生涯にわたり自分自身を成長させていくための探求力を身に付けていること。
・最新の専門知識と技術及び論理的思考と客観的判断に基づく洞察力を身に付けていること。
・放射線技術の専門知識を最新の医療技術に応用できる学術的問題解決能力を身に付けていること。

検査技術科学専攻

・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い知識と臨床検査技師としての専門的な知識・技術をもとに，保健医療分野の動向を見通す力を身に付けていること。
・習得した専門的知識・技術を保健医療の場で活かすことにより，直面する課題を解決する力を身に付けていること。
・医療専門職者として保健医療の正しい認識と社会貢献の意識，および生涯にわたり自分自身を成長させていくための探求力を身に付けていること。
・最新の専門知識，判断力，実践力をもって臨床検査学の諸問題を的確に見極める能力を身に付けていること。
・チーム医療の一員として地域の保健医療に貢献できる連携能力を身に付けていること。

理学療法学専攻

・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い知識と保健医療専門職としての専門的な知識・技術をもとに，保健医療分野の動向を見通す力を身に付けていること。
・修得した専門的知識・技術を保健医療の場で活かすことにより，他の専門職と協働・連携して個人や地域社会が直面している保健医療上の問題や課題を解決していく力を身に付けていること。
・理学療法士として社会貢献を意識し，自己の成長と保健医療分野の発展のために生涯にわたって学び続ける力を身に付けていること。

作業療法学専攻

・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い知識と保健医療専門職である作業療法士としての専門的な知識・技術をもとに，保健医療分野の動向を見通す力を身に付けていること。
・修得した専門的知識・技術を保健医療の場で活かすことにより，直面する課題を解決する力をもっていること。
・保健医療専門職者として保健医療を正しく認識し社会貢献を意識し，生涯にわたり自分自身を成長させていくための探求力を身に付けていること。
・最新の専門知識，実践力及び判断力，作業療法学の諸問題を的確に見極める能力を身に付けていること。
・チーム医療の一員として地域のリハビリテーション医療に貢献しうる問題解決能力を身に付けていること。

（２）医学部心理支援科学科

アドミッションポリシー（ＡＰ）

１）医学部心理支援科学科が求める学生像

医学部心理支援科学科では，科学的思考力を有し，こころの問題を感受し，その問題を解決できる能力や生命に対する高い倫理性と豊かな人間性を有し，悩める人に寄り添い，心理支援職としての役割をとおして地域住民の健康と福祉に寄与し，社会に貢献する地域のリーダーとなる人材の育成を目的としています。そのような人材の育成を目指すにあたって，「卒業認定・学位授与の方針」（ディプロマポリシー）と「教育課程編成・実施の方針」（カリキュラムポリシー）を十分に理解し，以下に掲げる学力・行動力・意欲を有する学生を求めます。

・心理支援職としての知識と技術を修得するのに必要な基礎学力
・他職種と連携しチームの一員として心理支援活動を実践するための行動力
・社会問題や地域の動向に関心をもち，心理支援職として社会に貢献する強い意欲

２）入学志願者に求める学習の取組

・心理支援職は，高度な知識や技術が求められますので，高等学校においては履修するすべての教科についての幅広い知識が必要とされます。
・他職種と連携しチームの一員として心理支援業務に関わることも多いため，課外活動やボランティア活動も含めて積極的な取り組みを行う行動力を持っていることが望まれます。
・幅広い研究心や探求心などに基づき，社会問題や地域の動向に関心を持ち，自ら積極的に関わる意欲や他者への思いやりを持つことが必要です。

３）入学者選抜の基本方針

医学部心理支援科学科では学力・行動力・意欲を有する学生を選抜するために，多面的・総合的な評価方法により，別に定められた「入学者選抜方法と重点評価項目」及び「入学者選抜方法の内容と評価要素」（https://gkm.hirosaki-u.ac.jp/kyoikuinfo/wp-content/uploads/sites/2/2020/03/02APM03.pdf）のとおり入学者を選考します。

カリキュラムポリシー（ＣＰ）

１．教育課程の編成・実施等

心理支援科学科では，高度な心理学，医学及び保健医療の知識・技能等はもとより，豊かな人間性と倫理性を兼ね備え，地域の心理支援のリーダーとして地域住民の健康増進と福祉に貢献できる心理支援職の養成（具体的には公認心理師資格の取得）を目的として，教育課程の編成・実施方針をつぎのように定めます。

ア　教養教育科目について
- ●国際状況や地域状況を的確に見極める力
- ●地域の課題を発見・解決する力

イ　専門教育科目について
- ●地域で活躍できる心理支援職としての資質
- ●公認心理師の国家試験受験資格を満たすために必要な科目

ウ　医学部心理支援科学科において修得させる能力等
- ●基本的な医学及び保健医療の知識及び技能
- ●専門的な心理学及び臨床心理学の知識及び技能
- ●地域において適切な心理支援ができる実践力
- ●福祉領域，教育領域，司法・犯罪領域及び産業・労働領域の基本的知識
- ●心理支援職としての責任感と倫理観を身に付けた実践力

２．教育・学習方法

（１）授業科目のナンバリングを定めて年次配置を厳密に行うとともに CAP 制を実施することにより，卒業までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。

（２）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行います。

（３）自ら課題を見出し，その解決に向けて探究を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，学生が主体となる能動的な授業を拡充します。

３．学習成果の評価

（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準を策定し，GPA を用いて教育課程における学習到達度を客観的に評価します。

（２）各科目の学習成果は，定期試験，レポート，授業中の小テストや発表などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

ディプロマポリシー（ＤＰ）

心理支援科学科では，心理学分野における専門的知識・技能等を，医学・保健学分野における基本的知識・技能等を修得するとともに，豊かな人間性と倫理性を兼ね備え，地域の心理支援のリーダーとして地域住民の健康増進と福祉に貢献できる者に対して，学士（心理学）の学位を授与します。

具体的には，つぎの目標に達していることが学位取得の要件となります。

- ・教養教育と専門教育をとおして培った幅広い専門的な知識，心理学的支援の根幹となる心理学及び主要領域である医学・保健医療の基本的な知識・技術をもとに，地域が抱える心理学的課題の動向を見通す力を身に付けていること。
- ・心理学を中心とした専門的知識・技術を，医学・保健医療分野をはじめとする諸分野で活かすことにより，支援を必要とする者及び地域が抱える直面する心理学的課題を解決する力をもっていること。
- ・心理学に基づく支援方法及び医学・保健医療の基本的な知識・技術等を修得し，社会貢献を意識して，生涯にわたり自分自身を成長させていくための探求力を身に付けていること。

（３）大学院

【 博士前期課程 】

アドミッションポリシー（ＡＰ）

１ 概要

（１）基本理念

保健学は，人間を身体的・精神的・社会的に全人的な存在としてとらえ，人々の健康について探求し，健康と福祉の向上に寄与する学問領域です。弘前大学大学院保健学研究科保健学専攻（博士前期課程）では，保健学の領域における教育と研究を通して，その成果を社会に還元することにより，人類の健康と福祉の向上に寄与することを基本理念とします。

（２）教育目標

① 高度専門知識・技術を持つ人材の育成

高度な専門知識と技術を有し，理論の構築とそれに対応した実践，新しい技術開発のできる人材を育成します。

② 管理実践能力を持ち，指導的立場を担える人材の育成

多様な専門職の連携によりチーム医療を実践し，新しい視点と戦略をもってリーダーシップを発揮できる人材を育成します。

③ 地域で活躍している保健医療専門職の能力開発

保健医療専門職の現職者が就学しやすい教育体制を整備し，地域保健医療福祉の充実・向上に貢献できる人材育成を目指します。

④ 教育・研究者の育成

博士前期課程を修了後，博士後期課程へ進学することを視野に入れ，新たな研究分野を自ら開拓しうる資質の高い教育・研究者を育成します。

２ 求める学生像

・人間の健康とその維持・増進に興味を持ち，広く社会に貢献したいという強い意欲のある学生
・保健学領域における学問分野の基礎を修得し，先端的な研究に挑戦する強い目的意識を持っている学生
・旺盛な探究心と学習意欲を持ち，自ら考え，行動することのできる学生
・各専門領域における実務や研究面でリーダーシップを発揮し，国際的な視点から活躍できる学生
・関連領域にも興味を持ち，領域や分野の垣根を越えて協働的に連携できる学生

３ 入学前に身に付けておいてほしいこと

・医療専門職として活躍するために必要な基礎的知識と技術
・保健医療分野で活躍する専門職として求められる，医療チームの中での有機的な連携のあり方
・各専門分野の医療技術に関する知識を統合して問題を解決するための基礎的知識と方法論
・各専門分野の発展に不可欠な研究的視点と基礎的研究方法

４ 入学者選抜の基本方針

総合的学力及び研究に対する探求心，意欲等を評価するために，学力検査（英語）及び口述試験の結果を総合して選抜します。（提出書類は，口述試験の基礎資料として使用します。）

看護学領域

１ 概要

看護学領域は，看護学の教育・倫理・管理学の基本概念となる課題を取り上げるとともに，各ライフステージにおける健康の保持・増進及び在宅療養と看取りを見据えた生活支援のための授業科目を設けています。看護学の専門知識と倫理性を深め，教育・研究者としての能力開発，臨床・地域保健医療活動の場において指導的役割を担う人材の育成を目指しています。

２ 求める学生像

・専門知識と関連する他領域の専門知識を包括的・多角的に理解し，教育・研究できる人
・臨床・地域保健医療活動の場において，問題の本質を倫理的・科学的に分析し解決できる人
・様々な状況において，自己管理，協働，プレゼンテーションができる人
・他領域の専門職者と連携して保健医療分野の発展に寄与できる人

放射線技術科学領域

1　概要
　保健医療分野において求められる必要な知識と技術習得と共に，当該分野でのリーダーの役割を担う人材の育成を目指しています。

2　求める学生像
・自らの目的意識と旺盛な知的好奇心を有する人
・論理的思考力と客観的判断力を有する人
・異分野他職種とコミュニケーションが取れる人

生体検査科学領域

1　概要
　生体検査科学領域において，生体機能科学及び病因・病態解析科学に関する専門的知識と　技術を有し，保健医療の現場で高い倫理観と研究心に基づいたリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指しています。

2　求める学生像
・自らの専門分野のみならず他分野の研究領域にも広く興味を持てる人
・生命の仕組みや病気の原因，検査法，診断法及び治療法について強い探究心を持った人
・国際人として他国の保健医療事情及び保健医療従事者や研究者との交流に意欲のある人

総合リハビリテーション科学領域

1　概要
　理学療法学及び作業療法学を基盤として，運動・精神障害の回復や生活活動の向上を目的とした評価・治療の実証・開発ができる人材を育成します。また，生活環境要因が健康や障害に及ぼす影響や住環境整備などの発展的な範囲まで視野に入れた研究も展開します。新しい医療技術や医療機器を開発でき，保健医療に貢献できる高度な専門技術を有し，実践の場でリーダーシップを発揮できる能力を養います。

2　求める学生像
・リハビリテーション科学領域の専門分野に対して関心のある人
・リハビリテーション科学領域で扱う評価・治療，障害予防における科学的基盤を確立することに意欲を持った人
・保健医療の現状改善を図る実践能力と，地域の保健医療に貢献できる高度専門職としての役割を担う能力を修得しようとする姿勢を持った人

カリキュラムポリシー（ＣＰ）

1．教育課程の編成・実施
（1）共通コア科目
　共通コア科目は，医療チームの中で指導的役割を果たせるコ・メディカルスタッフ養成のための共通した知識の修得及び具体的な修士論文作成に当たっての学際的研究手法の修得を目的としています。
（2）専門科目
　専門科目は，専門分野の基礎，専門知識の取得を目的とした各領域の特論と修士論文作成に向けた一貫した指導を目的とする所属領域の基礎特論・演習・特別研究で構成しています。

看護学領域

1．教育課程の概要

　看護学領域は，看護学の教育・倫理・管理学の基本概念となる課題を取り上げるとともに，各ライフステージにおける健康の保持・増進及び在宅療養と看取りを見据えた生活支援のための授業科目を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，学際的研究手法を習得させます。
（２）看護学の高度な専門知識の修得（特論），修得した知識体系を省察し批判的に分析する応用能力の修得（演習），研究計画に従って実施し，探求し，新たな知見を論理的に論文化する能力の修得（特別研究）をとおして，能動的，段階的に学習させ，修士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる成績評価基準に基づき客観的に評価します。
（２）科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

放射線技術科学領域

１．教育課程の概要
診断や治療は生体の器官，組織，細胞の各レベルから得られる情報を基にして行われています。放射線技術科学領域では，生体からの情報を物理学的，化学的及び生物学的手法を駆使して評価解析し，診断や治療への応用発展を目標としています。その為に必要な知識と技術の修得と共に，保健医療分野のリーダーの役割を担う人材の育成を目指した授業科目を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，学際的研究手法を習得させます。
（２）放射線技術科学の高度な専門知識の修得（特論），修得した知識体系を省察し批判的に分析する応用能力の修得（演習），研究計画に従って実施し，探求し，新たな知見を論理的に論文化する能力の修得（特別研究）をとおして，能動的，段階的に学習させ，修士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる成績評価基準に基づき客観的に評価します。
（２）科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。
（３）研究遂行能力の評価は，修士論文審査会及び発表会等において，プレゼンターション及びコミュニケーション能力を審査するとともに研究倫理の獲得力や修士論文の執筆能力等を合わせて総合的に行います。

生体検査科学領域

１．教育課程の概要
生体は細胞を最小基本単位とし，その集団としての組織，器官等により形成されていますが，病態因子・機序の解析は，生体レベルから細胞レベルまで遡行することで可能となり，その成果は診断・治療等への開発に繋がります。本領域では，この二方向性の教育・研究を主軸とし，生体検査科学領域の解析のできる人材の育成を目指した教育課程を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）生体検査科学の関連分野における基礎的素養の獲得のために主体的に学び続けることをとおして，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，学際的研究手法を習得させます。
（２）自ら課題を見出し，その解決に向けて探究を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，アクティブ・ラーニング，体験型学習などを適宜組み合わせた能動的な授業を拡充し，修士論文に係る研究指導を行います。

３．学習成果の評価
（１）カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標と成績評価基準に則り，各科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点に基づき客観的に評価します。
（２）修士論文審査会等におけるプレゼンテーション能力，コミュニケーション能力を含め，研究遂行能力や研究倫理の獲得，さらには学位論文の執筆能力などを総合して修士の学位に相応しいレベルに達しているかを評価し，課程として目的に沿った成果が上がっているかを評価します。

総合リハビリテーション科学領域

１．教育課程の概要

理学療法学及び作業療法学を基盤として，運動・精神障害の回復や生活活動の向上を目的とした評価・治療，生活環境要因が健康や障害に及ぼす影響や住環境整備，などの研究を展開する。加えて，新しい医療技術や医療機器を開発でき，保健医療に貢献できる高度な専門技術を有し，実践の場でリーダーシップを発揮できる人材の育成を目指した教育課程を編成しています。

２．教育・学習方法

（１）共通コア科目と専門領域の選択科目を１年次に配置するとともに，リハビリテーション科学特論・演習・特別研究を１年次から系統的に配置し，夜間開講と遠隔授業を導入しながら修了までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。

（２）リハビリテーション科学特論・演習をとおして，主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，学際的研究手法を習得させます。

（３）リハビリテーション科学特別研究における修士論文執筆をとおして，自ら課題を見出し，その解決に向けて多面的・多角的に探究を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，学生が主体となる能動的な授業を拡充し，修士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価

（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準に基づき客観的に評価します。

（２）リハビリテーション科学特別研究における修士論文執筆，発表，口頭試問を通し，学生の主体性・能動性，探求する力を客観的に評価します。

（３）各科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。

ディプロマポリシー（ＤＰ）

保健学研究科（博士前期課程）では，人材養成の観点に立った本研究科の教育目標に沿って定めた学位授与の方針（ディプロマポリシー）を修得した者に対して，それぞれの学位を授与します。

看護学領域

１．知識・理解の修得

・専門領域をより深く理解できるための高度な専門知識
・専門領域と密接に関連する他領域の専門知識に関する包括的・多角的な理解

２．当該領域固有の能力の修得

・臨床・地域保健医療活動の場において，根拠をもって看護を実践できる能力
・臨床・地域保健医療活動の場において，問題の本質を見抜き，倫理的・科学的に分析し解決できる能力
・保健・医療・福祉の教育機関において，教育・研究を実践する能力

３．汎用的能力の修得

・さまざまな状況において，自己管理，協働，プレゼンテーションができる能力
・他領域の専門職者と連携して保健医療の発展に寄与する能力

放射線技術科学領域

１．知識・理解の修得

・高度な専門知識と技術を基盤として理論や確立途上のエビデンスを追求し，それに対応した実践や新しい技術の開発ができること

２．当該領域固有の能力の修得

・生体からの情報について，生物学的，化学的及び物理学的手法を駆使して評価解析できる能力
・評価解析結果を診断や治療へ応用発展できる能力

・保健・医療・福祉の教育機関において，教育・研究を実践できる能力

３．汎用的能力の修得
・さまざまな状況において，自己管理，協働，プレゼンテーションができる能力
・さまざまな専門職の連携によりチーム医療を実践し，新しい視点と戦略をもってリーダーシップを発揮できる能力

生体検査科学領域

１．知識・理解
・生体検査科学における高度な知識と技術
・病態と細胞レベル・分子レベルにおける事象との関連についての理解
・異分野の研究領域への関心と理解

２．当該分野固有の能力
・高度な専門知識と技術を基盤として理論や確立途上のエビデンスを追求し，それに対応した実践や新しい技術を開発できる能力
・生体成分の新たな機能解析や検査技術開発に向けた研究に取り組める能力

３．汎用的能力
・倫理的な思考，問題解決ができる能力
・国際社会で活躍できるコミュニケーション能力
・医療における倫理と責任を強く自覚した保健医療分野のリーダーとしての能力

総合リハビリテーション科学領域

１．知識・理解
・リハビリテーション科学領域に関する専門的知識の体系的理解と，専門分野をより深く理解するための高度専門知識の修得

２．当該分野固有の能力
・人間の運動から生活活動，障害予防までの広い範囲で障害を捉える視点
・リハビリテーション科学領域で扱う評価・治療，障害予防における科学的基盤を確立するための研究に取り組む能力
・健康や障害に及ぼす生活環境要因を具体化し，　その因果関係の仕組みを探究して，説明できる能力

３．汎用的能力
・さまざまな状況において高度なコミュニケーション，プレゼンテーションのできる能力
・保健医療の現状改善を図る実践能力を持って，地域の保健医療に貢献できる高度専門職としての役割を担い，リーダーシップを発揮できる能力

【 博士後期課程 】

アドミッションポリシー（ＡＰ）

１ 概要
（１）基本理念
　保健学は，人間を身体的・精神的・社会的に全人的な存在としてとらえ，人々の健康について探究し，健康と福祉の向上に寄与する学問領域です。弘前大学大学院保健学研究科保健学専攻（博士後期課程）では，この学際的な学問領域を進歩・発展させるとともに，保健学の領域における教育と研究を通して，その成果を社会に還元し，人類の健康と福祉の向上に寄与することを基本理念とします。

（２）教育目標
① 研究者としての能力開発
　保健学に係わる学際的研究をエビデンスの探究という視点から専門の枠を超えて実践し，その結果を世界に向けて発信できる人材を育成します。

② 教育者の育成
　大学及び大学院において教育指導に寄与でき，地域社会において科学的方法論に基づいた健康教育を実践できる人材を育成します。
③ 高度な専門知識・技術を身に付けた指導者の育成
　高度な専門知識と技術を身に付け，チームの指導者として課題を選択・研究し，その解明に寄与できる人材を育成します。

④ 地域保健医療活動推進能力の育成
　地域保健活動の場において指導的役割を果たす立場の者を教育・指導・支援できる人材の育成を目指します。

2　求める学生像
・人々の健康を保持増進し，生活の質の向上に向けた独創的・学際的な研究を自立的に進められる学生
・高度な専門性，倫理性を身に付け，自らの専門性を深化・発展させることのできる学生
・科学的根拠に基づいた保健学を実践・発展させる上で不可欠な，“エビデンスの探究・蓄積”ができる学生
・未解明の問題のエビデンスを探究するため，学際的連携や多専門職による職種を越えた協働・研究を展開できる学生

3　入学前に身に付けておいてほしいこと
・高度な専門知識と技術を基盤として理論やエビデンスを追求するための基礎的知識と方法論
・理論やエビデンスに対応した実践の展開や新しい技術を開発するための基礎的知識と方法論
・多専門職の連携によるチーム医療を実践し，新しい視点と戦略をもってリーダーシップを発揮できるための基礎的知識と方法論

4　入学者選抜方針
　総合的学力及び研究に対する探求心，意欲等を評価するために，筆記試験（英語）及び口述試験の結果を総合して選抜します。（提出書類は，口述試験の基礎資料として使用します。）

看護学領域

1　概要
　看護学の幅広い学識と高度な専門知識と倫理性を深め，教育・研究者として独創的・学際的な研究を自律的に進め，人々の健康を保持増進し，生活の質（QOL）向上に向けて科学的根拠に基づき実践できる人材の育成を目指しています。

2　求める学生像
・看護学領域に関する高度な知識と技術を基に，健康の保持増進と生活の質向上に向けた取り組みを実践できる人
・修得した知識と教育・研究能力を活かして，保健・医療チームの中でリーダーとして活躍できる人
・論理的思考力を基に，学際的な研究に自律的に取り組み，看護学の発展に寄与できる人

放射線技術科学領域

1　概要
　人間の“生命活動”に係わる生体情報や生体機能について，科学的解析手法を駆使してエビデンスを追究し，サイエンスとしての放射線技術科学の更なる深化を図るとともに，今日的な保健医療の課題に対して，職種の枠を越えて相補的に連携･協働し，特定領域に縛られない新しい発想と創造的思考力を持った人材の育成を目指しています。

2　求める学生像
・放射線技術科学に関わる教育・研究者を目指す人
・高度な専門知識と技能を持った臨床研究者を目指す人
・先端的な放射線技術科学の知識及び技術を学びたい人

生体検査科学領域

1　概要
　分子，細胞レベルから個体に至る幅広い観点で生命現象を理解し，広範な生命科学領域における多様な問題を解決するための独創性と実行力を兼ね備えた人材を育成することを目的としています。このような人材育成を目的に，生命現象の分子レベルでの理解を基盤として，生体機能及び病因・病態解析に係る教育・研究を行います。

２ 求める学生像
・生体検査科学に関連する教育を行う大学あるいは大学院における教育・研究指導に意欲のある人
・保健・医療の現場において，高い倫理観と高度な専門知識を持った実行力のある人
・指導的・専門的立場から課題を見つけ，グローバルな観点から自立的な研究を行うことができる人

総合リハビリテーション科学領域

１ 概要
理学療法学及び作業療法学を基盤としたリハビリテーション科学領域の幅広い学識と高度な専門知識および倫理性をさらに深め，人々の健康の維持・増進，運動・精神障害の予防と軽減，生活の質（QOL）の向上を目的とした科学的根拠に基づくリハビリテーション（Evidenced Based Rehabilitation）を実践・発展させていく上で不可欠な，“未解明のエビデンスの探究・蓄積”ができる人材の育成を目指しています。

２ 求める学生像
・リハビリテーション科学領域に関する高度な知識と技術を基に，健康の維持・増進と生活の質向上に向けた取り組みを実践できる人
・修得した知識と教育・研究能力を活かして，保健・医療チームの中でリーダーとして活躍できる人
・既成概念にとらわれない発想と論理的思考力を基に，学際的な研究に自律的に取り組み，保健学を発展させていける人

カリキュラムポリシー（ＣＰ）

１．教育課程の編成・実施
（１）共通科目
共通科目は，エビデンスの探求と専門の垣根を越えた連携・協働の意義や方法論の修得を目的としています。
（２）専門科目
専門科目は，博士論文作成に向けた一貫した指導を目的とする所属分野の特講・特講演習・特別研究で構成しています。

看護学領域

１ 教育課程の概要
看護学の幅広い学識と高度な専門知識と倫理性を深め，教育・研究者として独創的・学際的な研究を自律的に進め，人々の健康を保持増進し，生活の質（QOL）向上に向けて科学的根拠に基づき実践できる人材の育成を目指した教育課程を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，エビデンスの探求のための研究手法を習得させます。
（２）看護学の高度な専門知識の修得（特講），修得した知識体系を省察し批判的に分析する応用能力の修得（特講演習），研究計画に従って実施し，探求し，新たな知見を論理的に論文化する能力の修得（特別研究）をとおして，独創性，創造性，新奇性のある研究課題に主体的に取り組み，研究倫理に従って探求し，研究成果を論文にするための能力の修得（特別研究）を段階的，能動的に学習させ，博士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる成績評価基準に基づき客観的に評価します。
（２）科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

放射線技術科学領域

１．教育課程の概要
人間の“生命活動”に係わる生体情報や生体機能について，科学的解析手法を駆使してエビデンスを追究し，サイエンスとしての保健学の更なる深化を図るとともに，今日的な保健医療の課題に対して，職種の枠を越えて相補的に連携･協働し，特定領域に縛られない新しい発想と創造的思考力を持った人材の育成を目指しています。

２．教育・学習方法
（１）主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，エビデンスの探求のための研究手法を習得させます。
（２）放射線技術科学の高度な専門知識の修得（特講），修得した知識体系を省察し批判的に分析する応用能力の修得（特講演習），研究計画に従って実施し，探求し，新たな知見を論理的に論文化する能力の修得（特別研究）をとおして，独創性，創造性のある研究課題に主体的に取り組み，研究倫理に従って探求し，研究成果を論文にするための能力の修得（特別研究）を段階的，能動的に学習させ，博士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる成績評価基準に基づき客観的に評価します。
（２）科目の学習成果は筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などを総合的に平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。
（３）主体的に研究を行う能力の評価は，博士論文審査会及び発表会等において，プレゼンターション及びコミュニケーション能力を審査するとともに独自性の発露，研究倫理を含めた計画能力や博士論文の執筆力等を合わせて総合的に判断します。

生体検査科学領域

１．教育課程の概要
生体分子の機能や病態の解析について独創的で質の高い研究を遂行することに意欲があり，高度な専門性と倫理観を有し，人類の健康と幸福に貢献するために，生体検査科学の領域で国内外で活躍できる教育･研究者の育成を目指した教育課程を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）生体検査科学の領域における研究課題を見出す能力を培うために，学術論文の精読，プレゼンテーションや討論を積極的に取り入れた指導します。
（２）主体的に研究ができるように，指導教員は研究指導や論文執筆・発表の指導を適切に行い，研究遂行能力やプレゼンテーション能力を涵養することを通じて見通す力と解決する力を培い，エビデンスの探求のための研究手法を習得させます。
（３）自ら見出した研究課題の解決に向けて能動的に探究を進め，その成果を表現する能力を身に付けさせるため，学生の主体的な研究遂行への適切な指導を行うことにより，博士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標と成績評価基準に則り客観的に評価します。
（２）博士論文発表会や博士論文審査会等におけるプレゼンテーション能力，コミュニケーション能力を含め，研究遂行能力や研究倫理の獲得，さらには関連領域における論文内容の国際的な学術的位置づけなどを総合して，博士の学位に相応しいレベルに達しているかを評価します。

総合リハビリテーション科学領域

１．教育課程の概要
理学療法学及び作業療法学を基盤としたリハビリテーション科学領域の幅広い学識と高度な専門知識および倫理性をさらに深め，人々の健康の維持・増進，運動・精神障害の予防と軽減，生活の質（QOL）の向上を目的とした科学的根拠に基づくリハビリテーション（Evidenced Based Rehabilitation）を実践・発展させていく上で不可欠な，“未解明のエビデンスの探究・蓄積”ができる人材の育成を目指した教育課程を編成しています。

２．教育・学習方法
（１）共通科目を１年次に配置するとともに，リハビリテーション科学特講・特講演習・特別研究を１年次から系統的に配置し，夜間開講と遠隔授業を導入しながら修了までの履修期間の無理なくかつ効果的な学習を促します。
（２）リハビリテーション科学特講・演習をとおして，主体的に学び続け，見通す力と解決する力を涵養する教育を行い，エビデンスの探求のための研究手法を習得させます。
（３）リハビリテーション科学特別研究をとおして，自ら課題を見出し，その解決に向けて探究を進め，成果を表現する実践的な能力を身に付けさせるため，学生が主体となる能動的な授業を拡充し，博士論文を執筆させます。

３．学習成果の評価
（１）学習成果を厳格に評価するため，カリキュラムポリシーに沿って策定された到達目標の到達状況が確認できる明確な成績評価基準に基づきを科目ごとに策定し，学習到達度を客観的に評価します。

（２）リハビリテーション科学特別研究における博士論文執筆，発表，口頭試問を通し，学生の主体性・能動性，探求する力を客観的に評価します。
（３）各科目の学習成果は，筆記（口述）試験，レポート，授業中の発表や質疑応答などの平常点で評価することとし，その評価方法については，授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示します。

ディプロマポリシー（ＤＰ）

保健学研究科（博士後期課程）では，人材養成の観点に立った本研究科の教育目標に沿って定めた学位授与の方針（ディプロマポリシー）を修得した者に対して，学位（保健学）を授与します。

看護学領域

１．知識・理解の修得
・看護学領域に関する高度な知識と技術の体系化
・看護学領域における教育方法・研究方法に関する知識と技術
・保健・医療・福祉分野における倫理およびマネジメントに関する知識と技術
・関連する他領域との連携に必要な基礎的知識と技術

２．当該分野固有の能力の修得
・看護学領域における独創的・学際的な研究を自律的に実践し，その成果を社会に還元し国際的に発信する能力
・看護学領域における高度専門職業人に対して，教育・研究指導を実践する能力
・看護学・保健学の“エビデンス”に基づいた高度な医療実践を行う能力
・解決すべき課題を先見的に見出し，倫理的・科学的に分析し，創造的に解決する能力
・保健・医療・福祉の他職種と協働し，医療チームの指導的役割を果たす能力

３．汎用的能力の修得
・看護学領域の教育・研究者として自律的に活動し，社会的責務を果たす能力
・高度専門職業人として必要なコミュニケーションスキルや論理的思考能力
・看護学領域における研究成果をとおして，看護学・保健学の学問的基盤の確立と発展に寄与する能力

放射線技術科学領域

１．知識・理解の習得
・放射線技術科学領域に関する高度な知識と技術の体系化
・放射線技術科学領域における教育方法・研究方法に関する知識と技術
・保健・医療・福祉分野における倫理およびマネジメントに関する知識と技術
・関連する他領域との連携に必要な基礎的知識と技術

２．当該分野固有の能力の修得
・放射線技術科学領域における独創的・学際的な研究を自律的に実践し，その成果を社会に還元し国際的に発信する能力
・放射線技術科学領域における高度専門職業人に対して，教育・研究指導を実践する能力
・科学的根拠に基づいた保健学を実践・発展させてゆく上で不可欠な，未解明の“エビデンス”を探究・蓄積できる能力
・エビデンスの探究に向け，学際的連携や多専門職による職種を越えた協働・研究を展開し，自らの専門性を深化・発展させる能力

３．汎用的能力の修得
・放射線技術科学領域の教育・研究者として自律的に活動し，社会的責務を果たす能力
・高度専門職業人として必要なコミュニケーションスキルや論理的思考能力
・放射線技術科学領域における研究成果をとおして，人間の“生命活動”に係わる生体情報や生体機能について，科学的解析手法を駆使してエビデンスを追究し，放射線技術科学・保健学の学問的基盤の確立と発展に寄与する能力

生体検査科学領域

１．知識・理解
・生体検査科学領域における教育･研究者として必要な高度専門知識

・生体検査科学領域における国際的スタンダードとなっている知識や技術
・学際的な研究に対応できる知識や技術

２．当該分野固有の能力
・種々の研究成果について客観的かつ批判的に評価できる能力
・生体検査科学領域における教育･研究を指導できる能力

・科学的根拠に基づいた保健学を実践・発展させていく上で不可欠な，未解明の“エビデンス”を探究・蓄積できる能力
・“エビデンス”の探究に向けて，学際的連携や多専門職による職種を越えた協働
・研究を展開し，自らの専門性を深化・発展させる能力

３．汎用的能力
・自立した教育･研究者として社会に貢献できる能力
・英語によるコミュニケーション能力を涵養し，国外研究者と討論できる能力
・高い倫理観と強い責任感を有する生命科学者として，研究成果を国際的に発信できる能力

総合リハビリテーション科学領域

１．知識・理解
・リハビリテーション科学領域に関する高度な知識と技術の体系化
・リハビリテーション科学領域における教育方法・研究方法に関する知識と技術
・保健・医療・福祉分野における倫理およびマネジメントに関する知識と技術
・関連する他領域との連携に必要な基礎的知識

２．当該分野固有の能力
・リハビリテーション科学領域における独創的・学際的な研究を自律的に実践し，その成果を社会に還元し国際的に発信する能力
・リハビリテーション科学領域における高度専門職業人に対して，教育・研究指導を実践する能力
・リハビリテーション科学の“エビデンス”に基づいた高度な医療実践を行う能力
・解決すべき課題を先見的に見出し，倫理的・科学的に分析し，創造的に解決する
・保健・医療・福祉の他職種と協働し，医療チームの指導的役割を果たす能力

３．汎用的能力
・リハビリテーション科学領域の教育・研究者として自律的に活動し，社会的責務を果たす能力
・高度専門職業人として必要なコミュニケーションスキルや論理的思考力を持ち，プレゼンテーション能力
・リハビリテーション科学領域における研究成果をとおして，保健学の学問的基盤の確立と発展に寄与するための技術と能力

４．関係規程等

○弘前大学大学院保健学研究科自己評価委員会要項

弘前大学大学院保健学研究科自己評価委員会要項

平成１９年４月１日制定
最終改正：令和２年６月 17 日

（設置）
第１条　弘前大学大学院保健学研究科（以下「研究科」という。）に，研究科及び医学部保健学科（以下「学科」という。）の教育・研究水準の向上を図り，かつ，社会的使命を達成するため，教育研究活動等の状況について自ら点検及び評価を行うことを目的として，自己評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

（任務）
第２条　委員会は，次の各号に掲げる事項を行うことを任務とする。
(1) 点検及び評価の実施に関すること。
(2) 点検及び評価に関する報告書の作成及び公表に関すること。
(3) その他点検及び評価に必要な事項の検討に関すること。

（組織）
第３条　委員会は，次の各号に掲げる委員をもって組織する。
(1) 副研究科長のうちから，研究科長が指名する者
(2) 学事委員長
(3) 学務委員長
(4) 各領域から推薦された教授　各１名
(5) 各領域（総合リハビリテーション科学領域を除く）から推薦された教員　各１名
(6) 総合リハビリテーション科学領域から推薦された教員　２名（第４号に掲げる委員が所属する専攻等以外の専任担当教員のうちから推薦するものとする）
(7) 保健学研究科事務長
(8) その他委員会が必要と認めた者

（委員長及び副委員長）
第４条　委員会に委員長を置き，前条第１号の委員をもって充てる。
２　委員会に副委員長を置き，委員長が指名した者をもって充てる。
３　副委員長は委員長を補佐し，委員長に事故があるときは，その職務を代理する。

（任期）
第５条　第３条第４号及び第５号の委員の任期は２年とし，再任を妨げない。ただし，再任は１回までとし，引き続き４年を超えることはできない。なお，補欠の委員の任期は，前任者の残任期間とする。
２ 第３条第７号の委員の任期は，必要に応じてその都度定める。

（会議）
第６条　会議は，委員長が招集し，その議長となる。
２　会議は，委員の過半数の出席をもって成立する。
３　会議の議事は，出席した委員の過半数をもって決し，可否同数のときは委員長の決するところによる。
４　委員会が必要と認めるときは，委員以外の職員の出席を求め，意見を聞くことができる。

（委員の代理出席）
第７条　委員が会議に出席できないときは，当該委員の指名した者が委員として代理出席することができる。

（点検及び評価項目等）
第８条　委員会が行う点検及び評価に関する項目は，次の各号に掲げるとおりとする。
(1) 研究科及び学科の在り方及び目標に関すること。
(2) 教育活動に関すること。
(3) 研究活動に関すること。
(4) 社会的活動に関すること。
(5) 自己評価体制に関すること。

(6) 管理運営に関すること。
(7) その他委員会が必要と認める項目

（点検及び評価の実施並びに報告書の公表）
第９条　委員会は，定期的に点検及び評価を行い，その結果をとりまとめ，保健学研究科教授会を経て，報告書として公表する。

（点検及び評価結果への対応）
第１０条　保健学研究科長は，委員会が行った点検及び評価の結果に基づき，改善が必要と認められる事項について，その改善の実施を別に定める委員会に指示する。
２　委員会は，前項の指示により検討，立案又は提案された改善方策が適切に実施されていることを確認する。

（庶務）
第１１条　委員会の庶務は，保健学研究科事務部において処理する。

（その他）
第１２条　この要項に定めるもののほか，委員会に関し必要な事項は別に定める。

附　記
１　この要項は，平成１９年４月１日から実施する。
２　弘前大学医学部保健学科自己評価委員会要項は，廃止する。

附　記
この要項は，平成２３年２月１６日から実施し，平成２３年４月１日から適用する。

附　記
この要項は，平成２６年４月１日から実施する。

附　記
この要項は，平成２８年４月１日から実施する。

附　記
この要項は，平成３１年４月２４日から実施し，平成３１年４月１日から適用する。

附　記
この要項は，令和２年６月１７日から実施し，令和２年４月１日から適用する。

○教育活動における自己点検評価に関する申合せ

教育活動における自己点検評価に関する申合せ

平成３１年４月２４日制定

（趣旨）
第１　この申合せは，弘前大学大学院保健学研究科自己評価委員会要項第８条第２号に定める教育活動に関する点検及び評価に関し，必要な事項を定める。

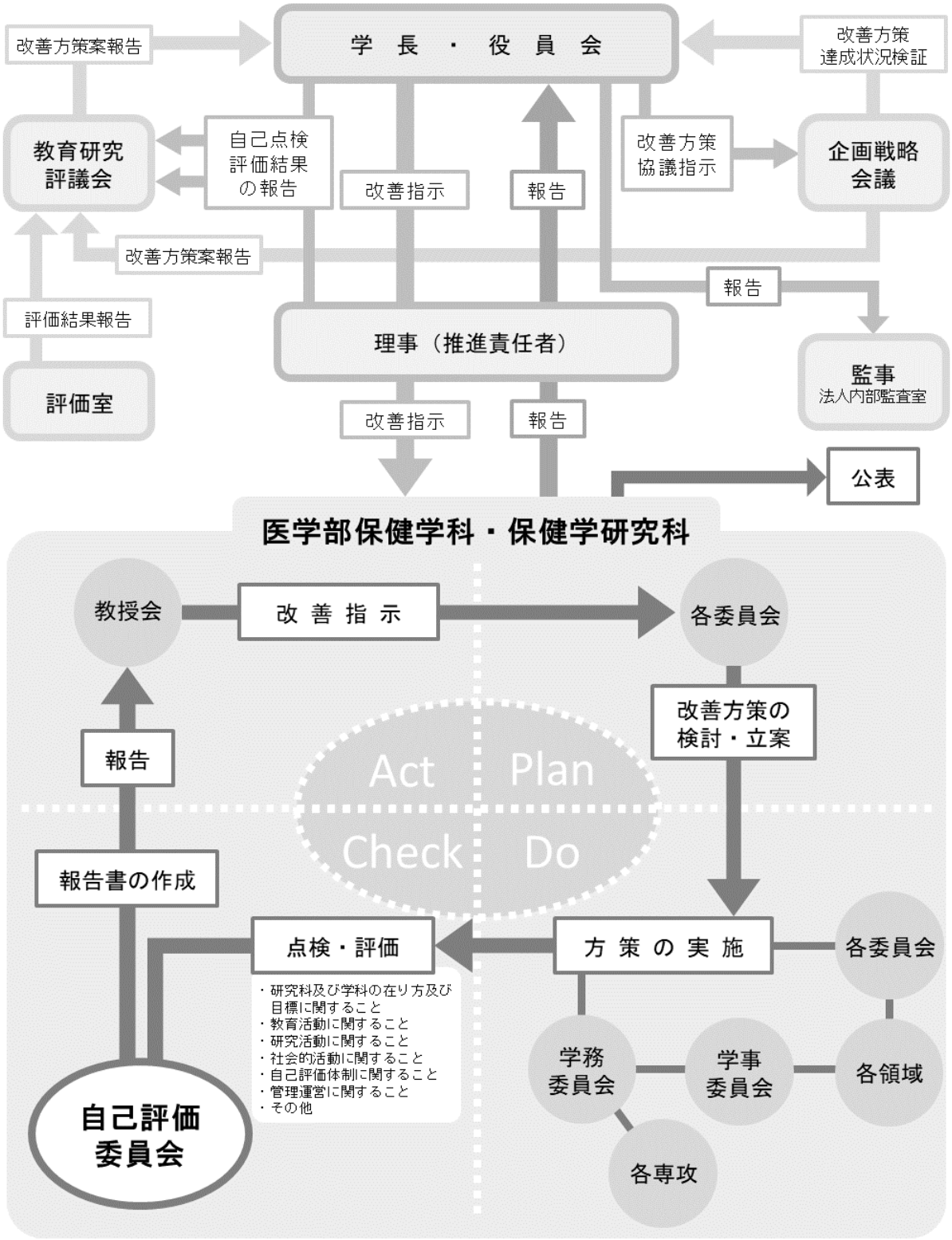
（点検及び評価項目等）
第２　教育活動に関する自己点検・評価項目は，以下のとおりとする。
(1) アドミッションポリシー，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーが，学科及び各研究科各々の目的に則して明確・具体的で，かつ，整合的であること
(2) 学科及び研究科の学生受入れが，学科及び研究科各々のアドミッションポリシーに則して適切であること
(3) 教育課程の編成及び授業科目の内容が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して体系的であり，相応しい水準であること
(4) 授業形態及び学習指導法が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して適切であること
(5) 履修指導及び支援が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して適切であること
(6) 成績評価が，カリキュラムポリシーに則して公正・厳格で，かつ，客観的に実施されていること
(7) 学習成果の達成度が，学科及び研究科各々の目的及びカリキュラムポリシーに則して相応しい水準になっていること
(8) 卒業及び修了判定並びに学位授与が，学科及び研究科各々の目的及びディプロマポリシーに則して公正に実施されていること
(9) 教育に係る施設及び設備が，学科及び研究科各々の目的に則して適切であること
(10) 学科及び研究科における学生支援が，学科及び研究科各々の目的に則して適切であること

（実施方法）
第３　教育活動に関する自己点検・評価及びそれに伴う対応を行う際は，原則として毎年度，学部及び研究科内の各委員会等の協力を受けて実施する。

（評価結果に基づく改善の実施）
第４　保健学研究科長は，以下のとおり評価結果に基づく改善の実施を関連する委員会に指示し，教授会又は関連する委員会の議を経て実施するものとする。
(1) 学科の教育，施設，学生支援，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに係る事項は，学務委員会に改善を指示する。
(2) 学科の学生受入れ及びアドミッションポリシーに係る事項は，医学部保健学科入学試験委員会に改善を指示する。
(3) 研究科の教育，施設，学生支援，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに係る事項は，学事委員会に改善を指示する。
(4) 研究科の学生受け入れ及びアドミッションポリシーに係る事項は，大学院保健学研究科保健学専攻入学試験委員会に改善を指示する。

附　記
この申合せは，平成３１年４月２４日から実施し，平成３１年４月１日から適用する。

５．管理運営体制


学　長　・　役　員　会
改善方策案報告
改善方策
達成状況検証
教育研究
評議会
自己点検
評価結果
の報告
改善指示
報告
改善方策
協議指示
企画戦略
会議
改善方策案報告
報告
評価結果報告
理事（推進責任者）
監事
法人内部監査室
評価室
改善指示
報告
公表
医学部保健学科・保健学研究科
教授会
改　善　指　示
各委員会
改善方策の
検討・立案
報告
Act
Plan
Check
Do
報告書の作成
点検・評価
方　策　の　実　施
各委員会
・研究科及び学科の在り方及び
目標に関すること
・教育活動に関すること
・研究活動に関すること
・社会的活動に関すること
・自己評価体制に関すること
・管理運営に関すること
・その他
学務
委員会
学事
委員会
各領域
自己評価
委員会
各専攻

Ⅱ　教育

Ⅱ　教育

教育活動の状況１

１．　教養教育

１）講義の担当

担当者名	職名	授業担当科目	年間担当時間数
木立　るり子	教授	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	8
野戸　結花	教授	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーション C－	6
藤田　あけみ	教授	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーション A－	6
		生活と健康－食と健康－	15
		人を育む営み－家族の機能と役割－	20
井瀧　千恵子	教授	運動と健康Ａ－リハビリテーションとメンタルヘルス－	12
		医学・医療の世界－身体をはかる－	24
小倉　能理子	教授	生活と健康－生活習慣と健康－	8
		地域学ゼミナール⑧	30
北宮　千秋	教授	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	2
		人を育む営み－家族の機能と役割－	10
		地域学ゼミナール⑨	30
冨澤　登志子	教授	環境と生活－放射線の理解－	7.2
		生活と健康－生活習慣と健康－	8
		青森の自然－青い森の食材機能学－	8
三崎　直子	准教授	生活と健康－家庭看護－	10
則包　和也	准教授	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	6
		メンタルヘルス－メンタルヘルスⅠ－	10
		人間の尊厳－人間の尊厳 B－	10
漆坂　真弓	准教授	生活と健康－生活習慣と健康－	6
		医学・医療の世界－身体をはかる－	16
大津　美香	准教授	生活と健康－家庭看護－	10
山本　美由紀	講師	地域学ゼミナール①	30
扇野　綾子	講師	人を育む営み－子どもの健康－	28
北嶋　結	助教	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
		地域学ゼミナール②	30
橋本　美亜	助教	人を育む営み－子どもの健康－	2
高間木　静香	助教	生活と健康－食と健康－	9
		運動と健康Ａ－ヨガの理論と実践－	30
北島　麻衣子	助教	医学・医療の世界－身体をはかる－	16
三上　佳澄	助教	人間の尊厳－人間の尊厳 B－	10
		キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	12
		医学・医療の世界－身体をはかる－	16
早狩　瑶子	助教	生活と健康－家庭看護－	10
土屋　涼子	助教	運動と健康Ａ－リハビリテーションとメンタルヘルス－	4
		運動と健康Ａ－運動とリハビリテーション A－	4
		生活と健康－生活習慣と健康－	4
太田　一輝	助教	運動と健康Ａ－リハビリテーションとメンタルヘルス－	4
		生活と健康－生活習慣と健康－	4
		生活と健康－食と健康－	6
中川　公一	教授	地域学ゼミナール⑧	30
細川　洋一郎	教授	環境と生活－放射線概論－	10
		生物学の世界－生物学を基盤とする技術革新－	16
高橋　康幸	教授	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	4
工藤　幸清	教授	環境と生活－放射線概論－	10
		環境と生活－放射線の理解－	14.4
廣田　淳一	准教授	情報と健康・医学－保健データを読み解くために－	30
		数学の世界－自然現象を微分方程式でシミュレーションしよう－	30
對馬　惠	講師	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	6
中原　岳久	講師	物理学の世界－医療系の物理学－	45

小山内　暢	助教	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
寺島　真悟	助教	環境と生活－放射線の理解－	7.2
		環境と生活－放射線概論－	10
嵯峨　涼	助教	地域学ゼミナール⑦	30
渡邉　純	教授	医学・医療の世界－がんを知る－	2
伊藤　巧一	教授	環境と生活－放射線の理解－	7.2
		生物学の世界－生物学を基盤とする技術革新－	16
丹藤　雄介	教授	青森の自然－食育概論②－	4
		青森の自然－食育概論①－	8
宮崎　航	教授	地域学ゼミナール⑤	30
武尾　照子	准教授	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	2
七島　直樹	准教授	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	4
		青森の自然－青い森の食材機能学－	4
		化学の世界－医療系の基礎化学－	16
藤岡　美幸	講師	言語学の世界－医療におけるノンテクニカルスキル入門－	30
野坂　大喜	講師	情報と健康・医学－保健・医療とデータ解析－	30
		情報処理入門Ｂ-情報機器の操作⑨-【Ｍ保放射線】	30
		情報処理入門Ｂ-情報機器の操作⑩-【Ｍ保検査】	30
		言語学の世界－医療におけるノンテクニカルスキル入門－	32
葛西　宏介	講師	生物学の世界－細胞の基礎生物学－	12
堀江　香代	助教	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
阿部　由紀子	助教	地域学ゼミナール⑥	30
		メンタルヘルス－幼少期トラウマの癒しと栄養による精神的健康の増進－	45
中野　学	助教	化学の世界－医療系の基礎化学－	14
石川　玲	教授	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＢ－	10
小山内　隆生	教授	環境と生活－放射線の理解－	3.6
		メンタルヘルス－メンタルヘルスＩ－	10
		人間の尊厳－人間の尊厳Ａ－	30
宮原　資英	教授	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
尾田　敦	教授	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＡ－	10
對馬　栄輝	教授	情報と健康・医学－健康のためのデータ解析学－	30
加藤　拓彦	准教授	キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
		地域学ゼミナール③	30
髙見　彰淑	准教授	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＡ－	10
松田　侑子	准教授	キャリア形成の発展－社会と私②－【Ａ食料・国際】	45
足立　匡基	准教授	地域学ゼミナール⑨	30
田名場　美雪	准教授	心理学の世界－心理学入門Ｂ－	16
		メンタルヘルス－心と体の健康を考える－	21.6
平川　裕一	講師	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＣ－	24
藤田　俊文	講師	青森の自然－青い森の食材機能学－	8
小枝　周平	講師	生活と健康－人間発達とリハビリテーション－	45
田中　真	助教	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	2
		キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	8
		メンタルヘルス－メンタルヘルスＩ－	10
		人間の尊厳－人間の尊厳Ｂ－	10
牧野　美里	助教	地域学ゼミナール④	30
髙橋　純平	助教	環境と生活－放射線リスクコミュニケーションの理解－	2
		環境と生活－放射線の理解－	7.2
		運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＢ－	10
石川　大瑛	助教	運動と健康Ａ－運動とリハビリテーションＢ－	10
		キャリア形成の基礎Ｂ【Ｍ保・Ｍ心理】	12
佐藤　ちひろ	助教	運動と健康Ａ－リハビリテーションとメンタルヘルス－	10

２．　学部教育

１）講義の担当

担当者名	職名	授業担当科目	対象学年	年間担当時間数
長内　智宏	教授	人体形態・機能学演習	1～4	10
		成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護方法論Ⅰ	1～4	5
		成人看護方法論Ⅱ	2～4	7.5
		成人看護方法論Ⅳ	2～4	6
		成人看護方法論Ⅴ	3～4	5
木立　るり子	教授	家族看護学	2～3	15
		在宅看護学演習	3～4	10
		在宅看護学概論	2～4	15
		在宅看護方法論	2～4	7.5
高橋　徹	教授	救急・蘇生医学	4	15
		疾病論Ⅲ	2～4	15
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		小児科学	3～4	15
		小児看護学概論	2～4	7.5
		小児看護方法論	2～4	7.5
		人体形態・機能学演習	1～4	10
樋口　毅	教授	疾病論Ⅱ	2～4	15
		助産診断・技術学Ⅰ	3～4	15
		人体形態・機能学演習	1～4	10
		保健学概論	1～4	2.14
		母性看護方法論	2～4	15
野戸　結花	教授	がんリハビリテーション科学	2～4	5
		がん看護論	4	7.5
		クリティカル・ケア論	4	7.5
		医療リスクマネジメント	3～4	3
		成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護学概論	1～4	5
		成人看護方法論Ⅲ	2～4	10
		成人看護方法論Ⅳ	2～4	6
藤田　あけみ	教授	コミュニケーション論	1～4	7.5
		看護科教育法Ⅰ（看護）	3～4	10
		看護学概論	1～4	15
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
		看護教育学概論	2～4	7.5
		看護対象論	2～4	7.5
		看護過程論演習	2	6
井瀧　千恵子	教授	がん看護論	4	7.5
		成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護学概論	1～4	5
		成人看護方法論Ⅰ	1～4	5
		成人看護方法論Ⅳ	2～4	6
		成人看護方法論Ⅴ	3～4	5
小倉　能理子	教授	看護科教育法Ⅱ（看護）	3～4	10
		看護教育学演習	3～4	15
		看護教育方法論	2～4	15
		教育原理	1～4	30
		教職実践演習（高）	4	30
		事前・事後指導（看護）	4	7.5

北宮　千秋	教授	疫学	2～4	15
		公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		公衆衛生看護学演習Ⅱ	3～4	5
		公衆衛生看護学概論Ⅰ	1～4	15
		公衆衛生看護学概論Ⅱ	2～4	15
		公衆衛生看護管理論	4	15
		公衆衛生看護方法論Ⅰ	2～4	15
		公衆衛生看護方法論Ⅱ	2～4	15
		公衆衛生看護方法論Ⅲ	3～4	15
		公衆衛生看護方法論Ⅳ	3～4	15
		保健学概論	1～4	2.14
冨澤　登志子	教授	セルフケア論	2～4	15
		成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護学概論	1～4	5
		成人看護方法論Ⅰ	1～4	5
		成人看護方法論Ⅱ	2～4	7.5
		成人看護方法論Ⅳ	2～4	6
五十嵐　世津子	准教授	母性看護学演習	3～4	7.5
		母性看護学概論	2～4	15
		母性看護方法論	2～4	15
三崎　直子	准教授	セクシュアリティ論	4	15
		助産学概論	3～4	15
		助産管理論	4	15
		助産診断・技術学Ⅱ	3～4	15
		助産診断・技術学Ⅲ	3～4	5
		助産診断・技術学Ⅳ	3～4	5
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		親役割援助論	4	15
則包　和也	准教授	看護倫理学	1～4	7.5
		人間発達論	1～4	15
		精神看護学演習	3～4	15
		精神看護学概論	2～4	15
		精神看護方法論	2～4	15
佐藤　真由美	准教授	コミュニケーション論	1～4	7.5
		看護過程論演習	2～4	6
		看護管理学	4	15
		看護技術学	2～4	7.5
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
		看護倫理学	1～4	7.5
漆坂　真弓	准教授	成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護方法論Ⅱ	2～4	7.5
大津　美香	准教授	老年看護学演習	3～4	15
		老年看護学概論	2～4	15
		老年看護方法論	2～4	15
山本　美由紀	講師	地域保健学	1～4	10
		保健医療福祉行政論	2～4	15
扇野　綾子	講師	小児看護学演習	3～4	15
		小児看護学概論	2～4	7.5
		小児看護方法論	2～4	7.5
會津　桂子	講師	看護科教育法Ⅰ（看護）	3～4	10
		看護科教育法Ⅱ（看護）	3～4	10
		看護過程論演習	2～4	6
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
		看護教育学概論	2～4	7.5
		看護教育方法論	2～4	15
		教職実践演習（高）	4	30
北嶋　結	助教	在宅看護学演習	3～4	10
		在宅看護方法論	2～4	7.5
		老年看護学演習	3～4	15

橋本　美亜	助教	小児看護学演習	3～4	15
高間木　静香	助教	母性看護学演習	3～4	7.5
北島　麻衣子	助教	成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護方法論Ⅲ	2～4	10
		成人看護方法論Ⅴ	3～4	5
三上　佳澄	助教	クリティカル・ケア論	4	7.5
		公衆衛生看護学演習Ⅱ	3～4	5
		成人看護学演習	3～4	4.29
		成人看護方法論Ⅱ	2～4	7.5
		成人看護方法論Ⅲ	2～4	10
		成人看護方法論Ⅳ	2～4	6
工藤　ひろみ	助教	看護過程論演習	2～4	6
		看護学概論	1～4	15
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
		看護対象論	2～4	7.5
		保健学概論	1～4	2.14
早狩　瑶子	助教	公衆衛生看護学演習Ⅱ	3～4	5
		助産診断・技術学Ⅲ	3～4	5
		助産診断・技術学Ⅳ	3～4	5
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		母性看護学演習	3～4	7.5
土屋　涼子	助教	看護科教育法Ⅰ（看護）	3～4	10
		看護科教育法Ⅱ（看護）	3～4	10
		看護過程論演習	2～4	6
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
		看護教育学演習	3～4	15
		事前・事後指導（看護）	4	7.5
山田　基矢	助教	公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		公衆衛生看護学演習Ⅱ	3～4	5
		在宅看護学演習	3～4	10
太田　一輝	助教	看護過程論演習	2～4	6
		看護技術学	2～4	7.5
		看護技術学演習Ⅰ	2～4	10
		看護技術学演習Ⅱ	2～4	10
多喜代　健吾	助教	公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		公衆衛生看護学演習Ⅱ	3～4	5
		精神看護学演習	3～4	15
鎌田　璃沙	助手	助産診断・技術学Ⅲ	3～4	5
		助産診断・技術学Ⅳ	3～4	5
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		母性看護学演習	3～4	7.5
中川　公一	教授	総合演習Ⅱ	4	6
		放射線計測学	2～4	30
		放射線計測学演習	3～4	30
細川　洋一郎	教授	人体機能学演習	1～4	10
		人体形態学	1～4	15
		総合演習Ⅲ	4	5
		放射線治療技術学	2～4	30
		放射線治療技術学演習Ⅰ	3～4	30
		放射線治療技術学演習Ⅱ	4	30

齋藤　陽子	教授	医学英語演習	3～4	6
		神経・筋・感覚機能検査学	3～4	30
		診療画像技術学Ⅰ	2～4	30
		診療画像技術学Ⅱ	3～4	30
		診療画像技術学演習	3～4	30
		総合演習Ⅴ	4	6
		理学療法特殊講義	3～4	5
		量子撮影技術学（後期）	2～4	7.5
		量子撮影技術学（前期）	2～4	7.5
		臨床関連基礎医学	3～4	7.5
敦賀　英知	教授	人体機能学演習	1～4	10
		人体形態学	1～4	15
		人体形態学演習	1～4	30
		総合演習Ⅴ	4	6
		臨床関連基礎医学	3～4	7.5
高橋　康幸	教授	医療リスクマネジメント	3～4	3
		画像解剖学	2～4	15
		画像解剖学演習	2～4	30
		核医学検査技術学	3～4	15
		核医学検査技術学Ⅰ	2～4	30
		核医学検査技術学Ⅱ	3～4	30
		核医学検査技術学Ⅲ	3～4	15
		総合演習Ⅱ	4	6
		総合演習Ⅴ	4	6
		臨床医学概論演習	2～4	30
工藤　幸清	教授	X 線機器工学	2～4	30
		医学英語演習	3～4	6
		医用工学演習	2～4	30
		総合演習Ⅰ	4	10
		総合演習Ⅳ	4	10
		放射化学Ⅰ	2～4	30
		放射化学Ⅱ	2～4	15
		量子撮影技術学（前期）	2～4	7.5
廣田　淳一	准教授	X 線 CT 工学演習	2～4	30
		医用工学	2～4	30
		解析学	1～4	30
		総合演習Ⅰ	4	10
		波動応用機器工学	2～4	15
		波動応用機器工学演習	2～4	30
		放射線治療機器工学	2～4	15
門前　暁	准教授	医療情報学	3～4	15
		総合演習Ⅲ	4	5
		放射線安全管理学	3～4	15
		放射線関係法規	3～4	30
		放射線生物学	2～4	10
對馬　惠	講師	医学英語演習	3～4	6
		医療安全管理学	3～4	7.5
		公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		総合演習Ⅳ	4	10
		保健学概論	1～4	2.14
中原　岳久	講師	総合演習Ⅲ	4	5
		放射線生物学	2～4	10
細田　正洋	講師	医用画像情報学Ⅰ	2～4	15
		医用画像情報学Ⅱ	3～4	30
		総合演習Ⅰ	4	10
		放射線安全管理学	3～4	15
		放射線画像形成学	2～4	15
		放射線物理学	2～4	30
		放射線物理学演習	2～4	30

小山内　暢	助教	医療安全管理学	3～4	7.5
		公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		総合演習Ⅳ	4	10
		総合演習Ⅴ	4	6
		量子撮影技術学（後期）	2～4	7.5
寺島　真悟	助教	総合演習Ⅲ	4	5
		放射線生物学	2～4	10
吉野　浩教	助教	総合演習Ⅱ	4	6
		量子撮影技術学（後期）	2～4	7.5
細川　翔太	助教	医用画像情報学Ⅰ	2～4	15
		核医学検査技術学Ⅲ	3～4	15
		総合演習Ⅱ	4	6
		総合演習Ⅲ	4	5
		量子撮影技術学（後期）	2～4	7.5
山口　平	助教	総合演習Ⅱ	4	6
		量子撮影技術学（前期）	2～4	7.5
辻口　貴清	助教	医学英語演習	3～4	6
		総合演習Ⅴ	4	6
嵯峨　涼	助教	総合演習Ⅲ	4	5
		量子撮影技術学（前期）	2～4	7.5
小倉　巧也	特任助教	医学英語演習	3～4	6
中村　敏也	教授	栄養・代謝学	2～4	15
		栄養・代謝学（１年２単位）	1～4	30
		健康食品学	3～4	7.5
		代謝機能検査化学演習	2～4	15
渡邉　純	教授	細胞診断学演習（後期）	3～4	90
		細胞診断学演習（前期）	3～4	60
		細胞診断学講義	3～4	30
		人体病理学	1～4	30
		病理組織細胞検査学	2～4	15
伊藤　巧一	教授	感染制御学	3～4	7.5
		検査科学英語演習	3～4	7.5
		実験動物学	3～4	15
		臨床免疫学	1～4	30
		臨床免疫学演習	2～4	30
丹藤　雄介	教授	関係法規	4	7.5
		内科学	2～4	30
		内科学Ⅰ	3～4	30
		内科学Ⅱ	3～4	30
		内科学演習	4	30
		臨床ウイルス学	2～4	15
山形　和史	教授	臨床血液学	2～4	30
		臨床血液検査学演習	2～4	30
宮崎　航	教授	衛生学・公衆衛生学	3～4	15
		衛生学・公衆衛生学（２年２単位）	2～4	30
		環境衛生学	2～4	15
		地域保健学	1～4	10
		保健統計学	2～4	30
武尾　照子	准教授	関係法規	4	7.5
		健康食品学	3～4	7.5
		健康食品法規	3～4	7.5
		臨床検査総合演習Ⅱ	4	30
		臨床生理学	2～4	30
		臨床生理学演習	2～4	30
吉岡　治彦	准教授	検査科学英語演習	3～4	7.5
		細胞診断学講義	3～4	30
		病理組織細胞検査学	2～4	15

七島　直樹	准教授	健康食品学	3～4	7.5
		健康食品法規	3～4	7.5
		代謝機能検査化学演習	2～4	15
		臨床栄養学	2～4	15
		臨床化学検査学	2～4	30
		臨床検査総合演習Ⅰ	4	30
千葉　満	准教授	健康食品学	3～4	7.5
		体液検査学	2～4	15
		尿検査学	2～4	30
		保健学概論	1～4	2.14
		理学療法特殊講義	3～4	5
藤岡　美幸	講師	感染制御学	3～4	7.5
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		微生物学	1～4	30
		微生物学総論	2～4	30
		臨床微生物検査学	2～4	30
野坂　大喜	講師	医用情報機器工学	1～4	30
		医療リスクマネジメント	3～4	3
		検査管理総論	2～4	15
		検査機器総論	2～4	15
		地域医療検査学	3～4	15
		地域医療検査学演習	4	30
		地域医療研修	4	15
		臨床栄養学	2～4	15
葛西　宏介	講師	検査科学英語演習	3～4	7.5
		分子生物学実験	3～4	15
		分子生物検査学	3～4	30
堀江　香代	助教	細胞診断学講義	3～4	30
山内　可南子	助教	検査科学英語演習	3～4	7.5
石川　玲	教授	がんリハビリテーション科学	2～4	5
		運動療法学	2～4	10
		神経筋障害理学療法学演習	3～4	10
		内部障害系理学療法学演習	3～4	15
		保健学概論	1～4	2.14
		理学療法学総論演習	1～4	6
		理学療法特殊講義	3～4	5
小山内　隆生	教授	医療リスクマネジメント	3～4	3
		研究方法論	3～4	15
		作業療法英語	3～4	15
		作業療法概論	1～4	30
		作業療法評価学概論	2～4	15
		精神障害作業療法治療学Ⅰ	2～4	10
		精神障害作業療法治療学Ⅱ	3～4	10
		精神障害作業療法評価学	2～4	7.5
		保健学概論	1～4	2.14
山田　順子	教授	作業療法機能学演習	3～4	30
		人体機能学	1～4	30
		人体機能学演習	1～4	10
宮原　資英	教授	心理学概論	1～4	30
		心理学研究法	1～4	30
尾田　敦	教授	スポーツ障害理学療法学演習	3～4	10
		義肢装具学	2～4	15
		筋骨格系障害学	2～4	15
		筋骨格系障害学演習	2～4	7.5
		筋骨格系障害義肢装具学演習	2～4	30
		助産診断・技術学演習	3～4	10
		神経系障害装具学演習	3～4	15
		徒手療法セミナー	3～4	15
		日常生活活動分析学	2～4	15
		理学療法学総論演習	1～4	6

栗林　理人	教授	精神疾患とその治療（医学概論）	1～4	30
		保健医療福祉倫理学	3～4	15
玉井　康之	教授	公認心理師の職責	1～4	30
和田　一丸	教授	疾病論Ⅰ	2～4	15
		精神医学	1～4	30
		精神医学（１年）	1～4	30
		精神障害作業療法疾患学	2～4	30
		精神障害作業療法疾患学演習	3～4	30
對馬　栄輝	教授	がんリハビリテーション科学	2～4	5
		運動学	1～4	30
		筋骨格系障害学	2～4	15
		筋骨格系障害学演習	2～4	7.5
		理学療法学総論演習	1～4	6
		理学療法研究方法論	2～4	15
		理学療法評価学Ⅰ	1～4	15
		理学療法評価学Ⅱ	1～4	7.5
		理学療法評価学演習	3～4	15
		老年期障害学	2～4	15
加藤　拓彦	准教授	基礎作業療法学	2～4	15
		精神障害作業療法治療学Ⅰ	2～4	10
		精神障害作業療法治療学Ⅱ	3～4	10
		精神障害作業療法治療学演習	3～4	30
		精神障害作業療法評価学	2～4	7.5
		地域作業療法学	2～4	15
		地域作業療法学演習	3～4	15
髙見　彰淑	准教授	リハビリテーション医学	2～4	15
		リハビリテーション医学演習	2～4	30
		神経筋障害理学療法学演習	3～4	10
		神経系障害学Ⅰ	2～4	15
		神経系障害学演習	2～4	30
		脳障害理学療法学演習	3～4	30
		理学療法学総論演習	1～4	6
		理学療法評価学演習	3～4	15
吉田　英樹	准教授	医療リスクマネジメント	3～4	3
		言語療法学概論	3～4	15
		神経筋障害理学療法学演習	3～4	10
		神経系障害学Ⅱ	2～4	15
		物理療法学	2～4	30
		理学療法学英語	2～4	15
		理学療法学総論演習	1～4	6
		理学療法研究演習	3～4	30
松田　侑子	准教授	カウンセリング論	2～4	15
足立　匡基	准教授	臨床心理学	2～4	15
		臨床心理学（１年）	1～4	15
		臨床心理学概論	1～4	30
平川　裕一	講師	身体障害作業療法治療学Ⅰ	2～4	30
		身体障害作業療法治療学Ⅴ	3～4	15
		身体障害作業療法治療学演習	3～4	15
		身体障害作業療法評価学	2～4	15
上谷　英史	講師	基礎作業療法学	2～4	15
		基礎作業療法学演習	3～4	30
		身体障害作業療法治療学Ⅱ	2～4	30
		身体障害作業療法治療学Ⅲ	3～4	30
		身体障害作業療法治療学演習	3～4	15
		地域作業療法学	2～4	15
		地域作業療法学演習	3～4	15

藤田　俊文	講師	スポーツ障害理学療法学演習	3～4	10
		リハビリテーション教育学Ⅱ	1～4	10
		地域リハビリテーション論	3～4	15
		福祉機器適合論	3～4	15
		福祉住環境学	3～4	15
		歩行解析セミナー	2～4	15
		理学療法学総論	1～4	15
		理学療法管理・運営論	2～4	15
		臨床判断分析セミナー	3～4	15
小枝　周平	講師	リハビリテーション教育学Ⅱ	1～4	10
		身体障害作業療法治療学Ⅳ	3～4	30
		発達障害作業療法治療学	3～4	30
		発達障害作業療法治療学演習	3～4	30
		発達障害作業療法評価学	2～4	15
田中　真	助教	公衆衛生看護学演習Ⅰ	3～4	4.29
		精神障害作業療法治療学Ⅰ	2～4	10
		精神障害作業療法治療学Ⅱ	3～4	10
牧野　美里	助教	運動療法学	2～4	10
		小児理学療法学演習	3～4	30
		内部障害系理学療法学演習	3～4	15
		理学療法評価学Ⅱ	1～4	7.5
髙橋　純平	助教	リハビリテーション教育学Ⅱ	1～4	10
		運動療法学	2～4	10
		筋骨格系障害学演習	2～4	7.5
石川　大瑛	助教	スポーツ障害理学療法学演習	3～4	10
		筋骨格系障害学演習	2～4	7.5
		神経系障害装具学演習	3～4	15

2）実験・実習の担当

担当者名	職名	授業担当科目	対象学年	年間担当時間数
細川　洋一郎	教授	放射線計測学実験	3～4	5.62
敦賀　英知	教授	人体形態学実習	3～4	15
工藤　幸清	教授	医用工学実験	2～4	11.25
		放射線機器工学実験	3～4	9
廣田　淳一	准教授	医用工学実験	2～4	11.25
		放射線機器工学実験	3～4	9
門前　暁	准教授	放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線科学実験	3～4	11.25
對馬　惠	講師	医用画像情報学実験	3～4	9
		放射線機器工学実験	3～4	9
中原　岳久	講師	医用物理学実験	1～4	11.25
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線科学実験	3～4	11.25
細田　正洋	講師	医用画像情報学実験	3～4	9
小山内　暢	助教	医用工学実験	2～4	11.25
		放射線機器工学実験	3～4	9
		放射線計測学実験	3～4	5.62
寺島　真悟	助教	放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線計測学実験	3～4	5.62
吉野　浩教	助教	医用工学実験	2～4	11.25
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線科学実験	3～4	11.25
		放射線機器工学実験	3～4	9
細川　翔太	助教	医用画像情報学実験	3～4	9
		医用物理学実験	1～4	11.25
		放射線科学実験	3～4	11.25
		放射線計測学実験	3～4	5.62

山口　平	助教	医用物理学実験	1～4	11.25
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線計測学実験	3～4	5.62
辻口　貴清	助教	医用画像情報学実験	3～4	9
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線計測学実験	3～4	5.62
嵯峨　涼	助教	医用物理学実験	1～4	11.25
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線計測学実験	3～4	5.62
小倉　巧也	特任助教	医用画像情報学実験	3～4	9
		放射線安全管理学実験	4	5.62
		放射線計測学実験	3～4	5.62
中村　敏也	教授	医用化学実験	1～4	9
		栄養・代謝学実習	2～4	22.5
渡邉　純	教授	細胞診断学実習	2～4	15
		人体病理学実習	2～4	22.5
		病理組織細胞検査学実習	2～4	45
伊藤　巧一	教授	臨床免疫学実習	4	60
山形　和史	教授	臨床血液学形態学実習	2～4	22.5
		臨床血液検査学実習	2～4	15
宮崎　航	教授	医用化学実験	1～4	9
		衛生学・公衆衛生学実習	3～4	22.5
武尾　照子	准教授	臨床生理学実習	1～4	96
吉岡　治彦	准教授	細胞診断学実習	2～4	15
		人体病理学実習	2～4	22.5
七島　直樹	准教授	医用化学実験	1～4	9
		臨床化学検査学実習	1～4	48
千葉　満	准教授	医用化学実験	1～4	9
		尿検査学実習	1～4	48
藤岡　美幸	講師	微生物学実習	3～4	45
		臨床微生物検査学実習	4	120
野坂　大喜	講師	医用情報機器工学実習	1～4	45
葛西　宏介	講師	医用生物学実験	1～4	45
		栄養・代謝学実習	2～4	22.5
		分子生物学実験	3～4	45
堀江　香代	助教	細胞診断学実習	2～4	15
阿部　由紀子	助教	医用化学実験	1～4	9
		衛生学・公衆衛生学実習	3～4	22.5
		尿検査学実習	1～4	48
中野　学	助教	臨床化学検査学実習	1～4	48
		臨床血液学形態学実習	4	60
		臨床血液検査学実習	2～4	15
		臨床免疫学実習	4	60
山内　可南子	助教	臨床血液検査学実習	2～4	15
石川　玲	教授	運動療法学実習	2～4	15
		内部障害系理学療法学実習	2～4	22.5
小山内　隆生	教授	作業療法評価学実習Ⅱ	3～4	22.5
山田　順子	教授	人体機能学実習	3～4	15
尾田　敦	教授	筋骨格系障害理学療法学実習	2～4	11.25
對馬　栄輝	教授	運動学実習	3～4	11.25
		筋骨格系障害理学療法学実習	2～4	11.25
加藤　拓彦	准教授	基礎作業学実習	2～4	45
		基礎作業療法学実習Ⅱ	3～4	22.5
		地域作業療法学実習	2～4	15
髙見　彰淑	准教授	理学療法評価学実習	2～4	15
吉田　英樹	准教授	神経系障害理学療法学実習	2～4	45
		物理療法学実習	2～4	22.5
		理学療法評価学実習	2～4	15
平川　裕一	講師	作業療法評価学実習Ⅰ	3～4	45
		身体障害作業療法治療学実習Ⅰ	2～4	15
		身体障害作業療法治療学実習Ⅱ	2～4	22.5

上谷　英史	講師	身体障害作業療法治療学実習Ⅰ	3～4	15
		地域作業療法学実習	2～4	15
小枝　周平	講師	作業療法評価学実習Ⅱ	3～4	22.5
		発達障害作業療法治療学実習	2～4	45
田中　真	助教	基礎作業療法学実習Ⅱ	3～4	22.5
		人体機能学実習	3～4	15
		地域作業療法学実習	2～4	15
牧野　美里	助教	運動学実習	3～4	11.25
		運動療法学実習	2～4	15
		内部障害系理学療法学実習	2～4	22.5
髙橋　純平	助教	運動学実習	3～4	11.25
		運動療法学実習	2～4	15
		筋骨格系障害理学療法学実習	2～4	11.25
		物理療法学実習	2～4	22.5
		理学療法評価学実習	2～4	15
石川　大瑛	助教	運動学実習	3～4	11.25
		筋骨格系障害理学療法学実習	2～4	11.25
石川　大瑛	助教	人体形態学実習	3～4	15
佐藤　ちひろ	助教	身体障害作業療法治療学実習Ⅰ	3～4	15
		身体障害作業療法治療学実習Ⅱ	2～4	22.5
		人体機能学実習	3～4	15
		人体形態学実習	3～4	15

3）臨地・臨床実習の担当

担当者名	職名	授業担当科目	対象学年	年間担当時間数
長内　智宏	教授	成人看護学実習	3～4	38.57
木立　るり子	教授	在宅看護学実習	4	30
		統合実習Ⅱ	4	5.62
高橋　徹	教授	小児看護学実習	3～4	45
		統合実習Ⅰ	3～4	15
野戸　結花	教授	成人看護学実習	3～4	38.57
		統合実習Ⅱ	4	5.62
藤田　あけみ	教授	基礎看護学実習Ⅰ	2～4	9
		基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
		統合実習Ⅱ	4	5.62
井瀧　千恵子	教授	成人看護学実習	3～4	38.57
小倉　能理子	教授	教育実習（高等学校）（看護）	4	45
北宮　千秋	教授	公衆衛生看護学実習Ⅰ	4	11.25
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	4	11.25
		統合実習Ⅱ	4	5.62
冨澤　登志子	教授	成人看護学実習	3～4	38.57
五十嵐　世津子	准教授	母性看護学実習	3～4	18
三崎　直子	准教授	助産学実習	4	75
		統合実習Ⅱ	4	5.62
		母性看護学実習	3～4	18
則包　和也	准教授	精神看護学実習	4	45
		統合実習Ⅱ	4	5.62
佐藤　真由美	准教授	基礎看護学実習Ⅰ	2～4	9
		基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
漆坂　真弓	准教授	成人看護学実習	3～4	38.57
大津　美香	准教授	老年看護学実習Ⅰ	2～4	22.5
		老年看護学実習Ⅱ	4	67.5
山本　美由紀	講師	公衆衛生看護学実習Ⅰ	4	11.25
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	4	11.25

扇野　綾子	講師	小児看護学実習	3～4	45
		統合実習Ⅰ	3～4	15
		統合実習Ⅰ	4	75
會津　桂子	講師	基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
		統合実習Ⅱ	4	5.62
北嶋　結	助教	在宅看護学実習	4	30
		老年看護学実習Ⅰ	2～4	22.5
		老年看護学実習Ⅱ	4	67.5
橋本　美亜	助教	小児看護学実習	3～4	45
		統合実習Ⅰ	3～4	15
		統合実習Ⅰ	4	75
高間木　静香	助教	母性看護学実習	3～4	18
北島　麻衣子	助教	成人看護学実習	3～4	38.57
三上　佳澄	助教	成人看護学実習	3～4	38.57
		統合実習Ⅱ	4	5.62
工藤　ひろみ	助教	基礎看護学実習Ⅰ	2～4	9
		基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
早狩　瑶子	助教	助産学実習	4	75
		母性看護学実習	3～4	18
土屋　涼子	助教	基礎看護学実習Ⅰ	2～4	9
		基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
		教育実習（高等学校）（看護）	4	45
山田　基矢	助教	公衆衛生看護学実習Ⅰ	4	11.25
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	4	11.25
		在宅看護学実習	4	30
太田　一輝	助教	基礎看護学実習Ⅰ	2～4	9
		基礎看護学実習Ⅱ	3～4	15
多喜代　健吾	助教	公衆衛生看護学実習Ⅰ	4	11.25
		公衆衛生看護学実習Ⅱ	4	11.25
		精神看護学実習	4	45
鎌田　璃沙	助手	助産学実習	4	75
		母性看護学実習	3～4	18
細川　洋一郎	教授	臨床実習Ⅰ	3～4	75
		臨床実習Ⅱ	4	75
齋藤　陽子	教授	臨床実習Ⅰ	3～4	75
		臨床実習Ⅱ	4	75
高橋　康幸	教授	臨床実習Ⅱ	4	75
渡邉　純	教授	臨地実習	3～4	57.86
伊藤　巧一	教授	臨地実習	3～4	57.86
吉岡　治彦	准教授	臨地実習	3～4	57.86
七島　直樹	准教授	臨地実習	3～4	57.86
千葉　満	准教授	臨地実習	3～4	57.86
藤岡　美幸	講師	臨地実習	3～4	57.86
山内　可南子	助教	臨地実習	3～4	57.86
石川　玲	教授	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅳ（４年１３単位）	4	585
小山内　隆生	教授	精神障害作業療法治療学実習	2～4	22.5
尾田　敦	教授	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅲ（３年後６単位）	3～4	135
栗林　理人	教授	早期体験実習（多職種連携）	1～4	45
對馬　栄輝	教授	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
髙見　彰淑	准教授	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅲ（３年後６単位）	3～4	135
吉田　英樹	准教授	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5

上谷　英史	講師	臨床実習Ⅰ	3～4	60
		臨床実習Ⅲ	4	405
		臨床実習Ⅳ	4	405
藤田　俊文	講師	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
田中　真	助教	精神障害作業療法治療学実習	2～4	22.5
牧野　美里	助教	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
髙橋　純平	助教	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5
石川　大瑛	助教	臨床実習Ⅰ（２年後１単位）	3～4	5
		臨床実習Ⅱ（３年前１単位）	3～4	5

４）卒業研究の指導

指導者名	職名	指導論文名
長内　智宏	教授	Factors relating to prognosis in ischemic stroke: Focus on platelet aggregability
		妻が妊娠中である夫の父親になる過程に影響を与える要因と支援方法
		Factors related to the degree of paralysis in cerebral infarction patients
木立　るり子	教授	訪問看護師の在宅人工呼吸療養者家族への支援に関する文献検討
		認知症者を在宅で介護する家族が肯定的に受け止める影響要因の文献検討
高橋　徹	教授	女子大学生の子宮頸がんに対する理解度・意識・予防行動に関する実態調査―AYA 世代におけるヘルスリテラシー向上のために―
		看護大学生の小児脳死・臓器移植に関する意識調査
		父親の育児支援における父子手帳，両親学級，立ち会い分娩の活用―看護学生における対児感情との関連―
樋口　毅	教授	医療系大学生の妊娠・出産に関する知識や意識―1 年生と 4 年生の比較から―
		月経随伴症状の自覚の有無と月経異常の知識や対処の相関
野戸　結花	教授	緩和ケア病棟看護師によるグリーフケアの実施状況と今後の課題
		緩和ケア病棟に勤務する看護師のセデーションに関するストレスと対処
		退院調整看護師によるがん患者への支援と個人因子による支援への影響
		開胸術後の痛みに対する看護師の知識と看護実践の実態
藤田　あけみ	教授	大学生の臓器提供意思表示の実態と意思表示の影響要因
		大学生の献血意識を踏まえた若年層の献血率向上のための取り組みの検討
		医療現場におけるセクシュアル・マイノリティに対する配慮の検討
井瀧　千恵子	教授	災害看護に対する看護学生の興味の変化
		医療系大学新入生の災害のイメージに関する調査
		起床時に浴びる太陽光が睡眠に及ぼす影響
小倉　能理子	教授	看護師の自己効力感とキャリア発達の関連
		看護学生のキャリアコミットメントと職業アイデンティティ
北宮　千秋	教授	人生設計の構築及び希望寿命が現在の生活習慣に関連するのか
		大学生の防災意識と健康意識・保健行動の関連
冨澤　登志子	教授	看護学生におけるオンラインでのアセスメントの特徴と疾患による違い
		アロマの種類によるハタヨガのリラクセーションとストレスへの効果
五十嵐　世津子	准教授	大学生の不妊症・不育症に関する認識
		大学生の避妊行動の認識とその影響要因
三崎　直子	准教授	妊婦の日常生活における疲労と子宮収縮の認識
則包　和也	准教授	COVID-19 感染予防への関心度に及ぼす影響因子とストレスの関連
		笑いヨガの有効性に関する文献学的考察
		医療機器から生じる音の印象
		中学生が問題行動を起こす背景と対象　―精神疾患との関連性―
佐藤　真由美	准教授	若者世代の親性準備性と児童虐待に対する考え方についての調査研究
		看護学生の実習における担当看護師へ報告する際の困難感と社会的スキルの関係
		看護学生のアニマルセラピーに対する認知度
漆坂　真弓	准教授	大学生の SNS 利用と食行動との関連
		原子力災害時における看護師への心理的支援体制の充実―看護師の認識―
		原子力災害時における看護師への心理的支援体制の充実―看護学生の認識―

大津　美香	准教授	身体疾患を持つ高齢者に対する介護職員の日常生活援助の実態
		介護施設の介護職員と看護職員の職種間連携の実態と課題
山本　美由紀	講師	大学生における孤食/共食・食事場面の実態とおいしさの関連―コミュニティづくりを目指して―
		心理的エンパワメントと大学生の対人信頼感との関連―多様なコミュニティ参加の有無の検討―
扇野　綾子	講師	幼児期の食事行動に対して保護者が困ったことと子どもの入院経験の関連性
		共働き家庭における育児に関する文献検討
		A 病院における親ががんである子どもへのケアの実態調査―看護師へのアンケート調査から―
會津　桂子	講師	看護学専攻 3 年生の医療安全に関する意識と KYT の効果
		4 年制大学における男子看護学生の学習時の思い
北嶋　結	助教	療養者と暮らす家族介護者の仕事継続を支える介護支援専門員の支援
橋本　美亜	助教	終末期にある子どもをもつ家族への看護援助に関する看護学生の認識
高間木　静香	助教	大学生の生殖に関する知識の程度と家族計画の性差
三上　佳澄	助教	看護学生の一次救命処置に関する不安要因の検討
工藤　ひろみ	助教	災害時における看護職者に必要な支援に関する文献検討
早狩　瑶子	助教	祖母の孫育て経験にみる孫育て継続の要因
土屋　涼子	助教	看護大学生の献血行動の実態と献血率向上に向けた課題の検討
山田　基矢	助教	訪問看護師の在宅人工呼吸療養者家族への支援に関する文献検討
		認知症者を在宅で介護する家族が肯定的に受け止める影響要因の文献検討
太田　一輝	助教	メディア授業における看護学生のストレスとストレスコーピングの実態
多喜代　健吾	助教	厚生労働省による HPV ワクチン接種の積極的勧奨を受けた看護女子大学生の子宮頸がん検診受診意思と受診行動
鎌田　璃沙	助手	妻が妊娠中である夫の父親になる過程に影響を与える要因と支援方法
成田　秀貴	助手	身体疾患を持つ高齢者に対する介護職員の日常生活援助の実態
		介護施設の介護職員と看護職員の職種間連携の実態と課題
中川　公一	教授	電子スピン共鳴法による毛髪の研究
		電子スピン共鳴法を用いたニンニクの研究
		電子スピン共鳴法を用いたインゲン豆の研究
		電子スピン共鳴法を用いたレーズンの研究
細川　洋一郎	教授	放射線抵抗性を考慮した細胞生存率モデルによる線量率効果の予測
		非小細胞肺癌に対する定位放射線治療の予後因子の検討 -局所制御を中心に-
		モンテカルロ法による歯科用 CBCT の線量評価Ⅱ
		放射線抵抗性を考慮した細胞生存率モデルによる体幹部定位放射線治療効果の評価
		放射線誘発コホート効果の基礎的研究
		非小細胞肺癌に対する定位放射線治療の予後因子の検討 -生存率を中心に-
齋藤　陽子	教授	造影 CT 検査実施後の永続性造影剤腎症発症に関する研究
		乳腺ダイナミック MRI における流出静脈拡張に関する検討
敦賀　英知	教授	紫外線照射による MMP-2 活性化における p38MAPK の関与について
		X 線照射によるヒト皮膚コラーゲン線維の変化
高橋　康幸	教授	コンプトンカメラによる放射線治療病室の汚染状況の可視化
		CdTe 半導体スペクトルサーベイメータとスミア法による汚染状況の測定
		モンテカルロシミュレーションを用いた放射線治療病室定期清掃に伴う被ばく線量の推定
		塩化ストロンチウム (Sr-89)を用いた終末期 RI 内用療法の効果検証
		骨 SPECT における画像処理と信号の検出性に関する検討
		骨 SPECT 撮像の標準化に関するガイドラインの検証
工藤　幸清	教授	IVR 室内における散乱線分布の二次元表示と三次元表示の比較
		IVR 室内における散乱線被ばく低減に向けた検討
		IVR 室内における CBCT 時の散乱線分布シミュレーション
對馬　惠	講師	超音波エストグラフィの歴史的動向 ～乳がんに関する文献研究～
細田　正洋	講師	固体高分子膜トリチウム電解濃縮装置の性能評価と環境水への適用
		通気法によるトロン散逸率評価におけるサンプリング流量の影響
		アクティブ型ラドン・トロン弁別測定器のトロン測定における性能評価
		原子力災害時に資する飲料水中の迅速 90Sr 測定法の確立
		大気中放射性微粒子捕集用フィルタの基礎特性評価
小山内　暢	助教	食品中の放射性物質の規制効果～モニタリング検査結果を用いた基礎的検証～
		IVR における放射線防護メガネの右眼に対する防護効果と水晶体用線量計装着位置の最適化

吉野　浩教	助教	ヒト臍帯静脈内皮細胞HUVECにおける放射線誘発細胞老化とRIG-I様受容体との関連
		細胞質 DNA センサーcGAS によるヒト頭頸部扁平上皮癌細胞の放射線応答制御に関する研究
細川　翔太	助教	視線追跡デバイスによるPET画像の画質評価
		臨床条件を想定したSPECT画像における顕著性を用いた信号の視認性の評価
山口　平	助教	細胞分泌小胞がもたらす致死線量放射線被ばく個体救命効果の基礎的検討
辻口　貴清	助教	放射能汚染傷病者の外傷診療に関するe-Learning教材基礎の開発
		PHITSとExcel VBA連動インターフェース構築　～医療従事者の二次被ばく線量算出モデル～
中村　敏也	教授	癌細胞の培養上清による線維芽細胞のヒアルロン酸関連遺伝子の発現への影響
		癌細胞の培養上清は線維芽細胞のヒアルロン酸の合成を刺激するがその分子量には影響しない
渡邉　純	教授	子宮内膜病変におけるPTEN発現陰性化の意義
		液状化検体細胞診標本における子宮内膜類内膜癌G1とG3の画像解析による形態学的相違の検討
		子宮内膜類内膜癌におけるARID1A発現陰性化の意義
伊藤　巧一	教授	骨髄および臍帯血由来線維芽細胞移植による致死量放射線曝露個体の自己造血機能回復の試み
		混合アロ臍帯血移植による致死量放射線曝露個体の自己造血機能回復に関わる因子解明
丹藤　雄介	教授	高齢肥満２型糖尿病患者における血中Myonectin(CTRP15)と血糖コントロールの動態
		高齢肥満２型糖尿病患者における血中Myonectin(CTRP15)と体組成の相関
		高齢肥満２型糖尿病患者におけるMyonectin (CTRP15) と腎機能の相関
宮崎　航	教授	カドミウム曝露細胞から放出されたエクソソームによる骨分化への影響
		ヒト骨芽細胞に対するカドミウム曝露の影響
武尾　照子	准教授	受動的ストレスに対するタイプＤパーソナリティと自律神経機能の関連性
		静脈血採血時における怒張介入効果の検討
吉岡　治彦	准教授	乳管内乳頭腫と非浸潤性乳管癌の鑑別におけるZ-stack画像を用いた３次元的集塊不整評価法
		線維腺種と浸潤性乳管癌の鑑別のための集塊の出現様式における多様性解析法の有用性
		ＬＢＣ標本における反応性頸管腺と上皮内癌の鑑別のためのＨＳＬ色空間解析法の有用性
		乳腺FNACにおける浸潤性小葉癌と硬性型浸潤性乳管癌の鑑別のための核エッジ・フラクタル法の有用性
七島　直樹	准教授	骨芽細胞様MC3T3-E1細胞を用いたカシス抽出物の骨形成促進の検討
		ヒト皮膚線維芽細胞におけるリンゴセラミドの美容効果の評価
千葉　満	准教授	酸化銅コーティング光触媒を用いた抗菌試験の検討
		CRISPR/Cas9による脂肪滴形成関連遺伝子PLIN2ノックアウトHepG2細胞株の樹立の検討
		サイズ排除クロマトグラフィーとELISAによるエクソソーム検出法の検討
		放射線被ばくにおける敗血症リスクの検討と腸内細菌叢の生死
		フローサイトメトリーによるエクソソームの表面マーカー検出法の検討
藤岡　美幸	講師	*Campylobacter*が凍結により受ける影響
		弘前市本町地区河川水における食中毒原因菌の調査
野坂　大喜	講師	人工知能による末梢血液スクリーニング技術の基礎的検討
		人工知能による白血球７分類モデルの基礎的検討と評価
葛西　宏介	講師	プロテアーゼ欠失株SMD1168を用いたL-amino acid oxidaseの高収量人工合成法の検討
		L-amino acid oxidaseの立体構造に与える金属影響
堀江　香代	助教	高分化型子宮内膜癌細胞株を用いたエストロゲン受容体過剰発現によるオキシトシン発現誘導の検討
		子宮内膜癌細胞株 (HEC50B) における PR 遺伝子導入による細胞増殖抑制の作用機序の検討
		卵巣癌患者由来腹水エクソソームの回収法および内在 microRNA 解析のための実験系の確立
阿部　由紀子	助教	短期間における糖質の過剰摂取と抑うつとの関連について
中野　学	助教	MRS2578によるアレルギー反応抑制効果の確認
石川　玲	教授	Visual Display Terminals(VDT)作業と書字作業が自律神経活動・精神的ストレス・疲労感に与える影響
		低強度から中強度までの運動における自覚的運動強度の再現性について
		縄跳び前一重跳びのスキル向上を目的とした映像を用いた即時フィードバック効果の検証～被験者とともに映像確認・口頭フィードバックを実施～

小山内　隆生	教授	マスク着用者のセラピストスーツの色の違いが印象形成に与える影響
		モデリング体験者の作業能力が自己効力感に与える影響
山田　順子	教授	NIRS を用いた母国語及び他言語を聞いた時の脳血流動態の計測
		MABC-2 コイン入れ課題を用いた 5 歳児における微細運動についての研究
尾田　敦	教授	梨状筋症候群に対するセルフマッサージの効果の検討
		足関節内反捻挫既往のあるサッカー選手のキック動作時の軸足足底圧とジョーンズ骨折のリスクの検討
		足関節捻挫の既往が全身反応時間に及ぼす影響
和田　一丸	教授	長期通院てんかん患者における臨床的特徴に関する研究
對馬　栄輝	教授	足部の形態が腰痛に関連する機序の検討～足部の柔軟性と腰部アライメントに着目して～
加藤　拓彦	准教授	塗り絵課題における見本提示が作業意欲，作業に対する不安，自己効力感に及ぼす影響について
		厚生労働省一般職業適性検査における適性能得点と折り紙作業遂行能力との関連について
		単語提示時の手がかり刺激の付加量の違いと種類の違いが記憶の再生に与える影響
		健常大学生におけるブルドン末梢検査と紙細工，革細工，ビーズ細工との関連性　-作業速度および作業正確性について
髙見　彰淑	准教授	非麻痺側支持片脚立位における遊脚の動揺が姿勢保持に与える影響
		利き手・非利き手における膝打ち試験の基準スピードに関する検討
		歩きスマホにおける操作方法別の歩行パラメータ変化
吉田　英樹	准教授	電気刺激の電極貼付部位の違いが方向性注意機能に及ぼす影響
		水中運動に伴う身体機能面への即時的効果に関する検討～動的バランスと身体柔軟性に着目して～
		感覚レベルで実施する経皮的電気神経刺激(TENS)のミラーサイトおよび遠隔部位での鎮痛効果に関する検討
		感覚レベル　TENS　とストレッチングの同時施行が筋伸張性に及ぼす影響に関する検討
		短時間で実施される局所の静的運動と動的運動による運動誘発性疼痛抑制(EIH)の比較・検討
平川　裕一	講師	非利き手での箸操作訓練に使用する箸先の形状の違いが操作能力に及ぼす影響について
		左利きの者が左手により日常的な文字の大きさの横線を書く際における手部および手指の動きについて
上谷　英史	講師	非利き手での筆記動作訓練における課題の条件の違いがその成果に対する印象に及ぼす影響について
		非利き手での筆記動作能力を効果的に向上させるための訓練課題の検討
		非利き手での箸操作訓練における訓練時間の違いが箸操作能力の向上に及ぼす影響について
藤田　俊文	講師	外部負荷を同時に加えた全身振動刺激時の組織酸素化動態と主観的運動強度の関係
小枝　周平	講師	日本語を母国語とする DCD 児の構音の特徴
		５歳児の人物画の発達の遅れに関連する因子
		自閉症モデルマウスに対する強制的な運動が情動や行動に与える影響
田中　真	助教	認知課題遂行時における BGM 聴取の影響について
		対話時における聴き手の感情フィードバックによって話し手は共感してくれたと感じるか
牧野　美里	助教	走行中の中足部接地が推進力や下肢に及ぼす影響
髙橋　純平	助教	視覚遮断条件下での運動介入による即時的バランス能力の検討
		ヨガ呼吸を併用したスタティックストレッチングの即時的伸張効果についての検討
石川　大瑛	助教	視線および体幹の方向が切り返し動作中の膝関節に与える影響
		サイドステップカッティングとクロスオーバーカッティングの比較-ACL 損傷リスクに着目して-
佐藤　ちひろ	助教	脳卒中モデルラットにおける運動介入の走行距離の違いが脳神経細胞新生に及ぼす影響
		脳出血モデルラットを用いた走行距離の異なる介入による運動麻痺改善の違い

３．　大学院教育

１）講義・演習

【 博士前期課程 】

担当者名	職名	授業担当科目	対象学年	年間担当時間数
長内　智宏	教授	病態生理学	1	6
		臨床薬理学	1	10
木立　るり子	教授	コンサルテーション論	1	15
		地域ケア学特論	1	7.5
高橋　徹	教授	医用放射線看護方法論	1	7.5
野戸　結花	教授	医用放射線看護方法論	1	7.5
		基礎放射線学特論	1	7.5
		放射線医学特論	1	7.5
		放射線看護学課題研究	2	30
		放射線看護学実習Ⅰ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅱ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅲ	2	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
		放射線看護学特論	1	6
藤田　あけみ	教授	フィジカルアセスメント	1	10
		看護学特別研究	2	37.5
		看護教育学特論	1	10
井瀧　千恵子	教授	被ばく医療看護方法論	2	10
		被ばく医療看護論	1	10
		放射線看護学実習Ⅰ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅱ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅲ	2	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
		放射線看護学特論	1	6
小倉　能理子	教授	フィジカルアセスメント	1	10
		医療マネジメント	1	7.5
		看護教育学特論	1	10
		病態生理学	1	6
		臨床薬理学	1	10
北宮　千秋	教授	看護倫理学特論	1	7.5
		被ばく医療看護方法論	2	10
		被ばく医療看護論	1	10
		放射線看護学特論	1	6
冨澤　登志子	教授	フィジカルアセスメント	1	10
		看護学特別研究	2	37.5
		看護研究方法論	1	15
		病態生理学	1	6
		保健学連携セミナー	1	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
		臨床薬理学	1	10
五十嵐　世津子	准教授	看護倫理学特論	1	7.5
		保健学研究セミナー	1～2	7.5
則包　和也	准教授	コンサルテーション論	1	15
		看護学特別研究	2	37.5
		看護倫理学特論	1	7.5
		地域ケア学特論	1	7.5
佐藤　真由美	准教授	看護管理学特論	1	30
		看護理論	1	15
		看護倫理学特論	1	7.5
		看護研究方法論	1	15

漆坂　真弓	准教授	看護理論	1	15
		被ばく医療看護方法論	2	10
		被ばく医療看護論	1	10
		放射線看護学課題研究	2	30
		放射線看護学実習Ⅰ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅱ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅲ	2	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
		放射線看護学特論	1	6
大津　美香	准教授	看護学特別研究	2	37.5
		国際保健医療学	1	7.5
		地域ケア学特論	1	7.5
山本　美由紀	講師	地域ケア学特論	1	7.5
扇野　綾子	講師	医用放射線看護方法論	1	7.5
會津　桂子	講師	看護教育学特論	1	10
北島　麻衣子	助教	医用放射線看護方法論	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅰ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅱ	1	7.5
		放射線看護学実習Ⅲ	2	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
		放射線看護学特論	1	6
細川　洋一郎	教授	基礎放射線学特論	1	7.5
		被ばく医療学特論	1	7.5
		被ばく医療総論	1	10
		放射線医学特論	1	7.5
		放射線技術科学前期特別研究	2	30
		放射線治療技術学特論	1	10
齋藤　陽子	教授	画像診断技術学特論	1	30
		放射線医学特論	1	7.5
		放射線技術科学前期特別研究	2	30
敦賀　英知	教授	人体形態学特論	1	30
		放射線技術科学前期特別研究	2	30
高橋　康幸	教授	トレーサー情報解析学特論	1	15
		被ばく医療学特論	1	7.5
		被ばく医療総論	1	10
		放射線技術科学前期特別研究	2	30
工藤　幸清	教授	基礎放射線学特論	1	7.5
		放射線看護学特別演習	1	15
門前　暁	准教授	トレーサー情報解析学特論	1	15
		保健学研究セミナー	1～2	7.5
		放射線安全管理学特論	1	15
		放射線技術科学前期特別研究	2	30
		放射線治療技術学特論	1	10
		放射薬品学特論	1	15
對馬　惠	講師	基礎放射線学特論	1	7.5
		放射線医学特論	1	7.5
中原　岳久	講師	放射線安全管理学特論	1	15
		放射線防護総論	1	7.5
細田　正洋	講師	診療放射線基礎科学	1	30
		放射線防護総論	1	7.5
小山内　暢	助教	医療マネジメント	1	7.5
寺島　真悟	助教	国際保健医療学	1	7.5
		放射線治療技術学特論	1	10
吉野　浩教	助教	放射線防護総論	1	7.5
		放射薬品学特論	1	15
細川　翔太	助教	放射線防護総論	1	7.5
辻口　貴清	助教	被ばく医療学特論	1	7.5
		被ばく医療総論	1	10
中村　敏也	教授	細胞生物化学	1	15
渡邉　純	教授	腫瘍細胞学特論	1	10

伊藤　巧一	教授	国際保健医療学	1	7.5
		分子生化学	1	15
丹藤　雄介	教授	生体代謝機能科学	1	30
		病態生理学	1	6
山形　和史	教授	臨床血液学特論	1	30
宮崎　航	教授	生活環境疫学特論	1	30
武尾　照子	准教授	細胞生理学特論	1	30
吉岡　治彦	准教授	腫瘍細胞学特論	1	10
七島　直樹	准教授	分子生化学	1	15
千葉　満	准教授	保健学研究セミナー	1～2	7.5
藤岡　美幸	講師	感染防御免疫学特論	1	30
		生体検査科学特別研究	2	150
野坂　大喜	講師	医療マネジメント	1	7.5
		細胞生物化学	1	15
堀江　香代	助教	腫瘍細胞学特論	1	10
阿部　由紀子	助教	保健学連携セミナー	1	7.5
石川　玲	教授	リハビリテーション医学特論	1	10
		リハビリテーション教育学特論	1	7.5
		リハビリテーション教育学特論演習	1	22.5
小山内　隆生	教授	リハビリテーション教育学特論	1	7.5
		リハビリテーション教育学特論演習	1	22.5
		医療マネジメント	1	7.5
山田　順子	教授	リハビリテーション科学特別研究	2	25
尾田　敦	教授	リハビリテーション科学特別研究	2	25
對馬　栄輝	教授	リハビリテーション科学特別研究	2	25
		病態生理学	1	6
		保健疫学特論	1	30
		保健学連携セミナー	1	7.5
加藤　拓彦	准教授	リハビリテーション科学特別研究	2	25
		保健学連携セミナー	1	7.5
髙見　彰淑	准教授	リハビリテーション医学特論	1	10
		リハビリテーション科学特別研究	2	25
		保健学研究セミナー	1～2	7.5
吉田　英樹	准教授	リハビリテーション科学特別研究	2	25
藤田　俊文	講師	国際保健医療学	1	7.5
田中　真	助教	リハビリテーション教育学特論	1	7.5
		リハビリテーション教育学特論演習	1	22.5
牧野　美里	助教	リハビリテーション医学特論	1	10
髙橋　純平	助教	リハビリテーション教育学特論	1	7.5
		リハビリテーション教育学特論演習	1	22.5
各指導教員		リハビリテーション科学特別演習	1	90
		看護学特別演習	1	90
		基礎リハビリテーション科学特論	1	30
		基礎看護学特論	1	30
		基礎生体検査科学特論	1	30
		基礎放射線技術科学特論	1	30
		生体検査科学特別演習	1	90

【 博士後期課程 】

担当者名	職名	授業担当科目	対象学年	年間担当時間数
長内　智宏	教授	基礎・実践看護学特講	1	4.29
木立　るり子	教授	看護学特講演習	2	45
		看護学特別研究	2～3	22.5
		地域生活支援看護学特講	1	3.75
高橋　徹	教授	教育・研究者育成コースワーク	1	3.75
		地域生活支援看護学特講	1	3.75
樋口　毅	教授	地域生活支援看護学特講	1	3.75
野戸　結花	教授	基礎・実践看護学特講	1	4.29

藤田　あけみ	教授	インタープロフェッショナルワーク論	1	3.75
		看護学特講演習	2	45
		看護学特別研究	2～3	22.5
		基礎・実践看護学特講	1	4.29
井瀧　千恵子	教授	基礎・実践看護学特講	1	4.29
小倉　能理子	教授	基礎・実践看護学特講	1	4.29
北宮　千秋	教授	看護学特別研究	2～3	22.5
		地域生活支援看護学特講	1	3.75
冨澤　登志子	教授	看護学特別研究	2～3	22.5
		基礎・実践看護学特講	1	4.29
五十嵐　世津子	准教授	地域生活支援看護学特講	1	3.75
三崎　直子	准教授	地域生活支援看護学特講	1	3.75
則包　和也	准教授	地域生活支援看護学特講	1	3.75
漆坂　真弓	准教授	基礎・実践看護学特講	1	4.29
大津　美香	准教授	地域生活支援看護学特講	1	3.75
中川　公一	教授	教育・研究者育成コースワーク	1	3.75
		放射線技術科学特講	1	2.73
細川　洋一郎	教授	放射線技術科学特講	1	2.73
		放射線技術科学特別研究	2～3	22.5
齋藤　陽子	教授	放射線技術科学特講	1	2.73
		放射線技術科学特別研究	2～3	22.5
敦賀　英知	教授	インタープロフェッショナルワーク論	1	3.75
		放射線技術科学特講	1	2.73
		放射線技術科学特別研究	2～3	22.5
高橋　康幸	教授	放射線技術科学特講	1	2.73
		放射線技術科学特別研究	2～3	22.5
工藤　幸清	教授	放射線技術科学特講	1	2.73
廣田　淳一	准教授	放射線技術科学特講	1	2.73
門前　暁	准教授	放射線技術科学特講	1	2.73
中原　岳久	講師	放射線技術科学特講	1	2.73
細田　正洋	講師	放射線技術科学特講	1	2.73
中村　敏也	教授	生体検査科学特講	1	4.29
渡邉　純	教授	教育・研究者育成コースワーク	1	3.75
		生体検査科学特講	1	4.29
伊藤　巧一	教授	生体機能科学特別研究	2～3	90
		生体検査科学特講	1	4.29
丹藤　雄介	教授	インタープロフェッショナルワーク論	1	3.75
		生体検査科学特講	1	4.29
七島　直樹	准教授	生体検査科学特講	1	4.29
千葉　満	准教授	生体検査科学特講	1	4.29
石川　玲	教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション教育学特講	1	7.5
		リハビリテーション教育学特講演習	1	22.5
		教育・研究者育成コースワーク	1	3.75
		障害保健学特別研究	2～3	90
小山内　隆生	教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション教育学特講	1	7.5
		リハビリテーション教育学特講演習	1	22.5
山田　順子	教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
尾田　敦	教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション科学特講演習	2	22.5
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
和田　一丸	教授	インタープロフェッショナルワーク論	1	3.75
		リハビリテーション科学特講	1	3.75
對馬　栄輝	教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション科学特講演習	2	22.5
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18

髙見　彰淑	准教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション科学特講演習	2	22.5
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
吉田　英樹	准教授	リハビリテーション科学特講	1	3.75
		リハビリテーション科学特講演習	2	22.5
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
		リハビリテーション科学特別研究	2～3	18
髙橋　芳雄	准教授	リハビリテーション教育学特講	1	7.5
田中　真	助教	リハビリテーション教育学特講	1	7.5
		リハビリテーション教育学特講演習	1	22.5
髙橋　純平	助教	リハビリテーション教育学特講演習	1	22.5

2）学位論文

【 博士前期課程 】

指導者名	職名	指導論文名
藤田　あけみ	教授	胃がん術後患者の食生活再構築過程の解明
冨澤　登志子	教授	看護学生における臨床判断プロセスの特徴
則包　和也	准教授	地域で生活する統合失調症者に対するメタ認知トレーニング（Metacognitive Training；MCT）の効果検討
大津　美香	准教授	認知症高齢者の心理的ニーズと肯定的な主観を引き出すかかわり方に関する研究
細川　洋一郎	教授	線量計算アルゴリズムによる半影領域の線量比較
		CT-on-rails を用いた画像誘導放射線治療における撮像線量と逐次近似応用再構成法が照合精度に与える影響：ファントム研究
		癌幹細胞を考慮した細胞生存率モデルによる線量率効果の予測
		放射線治療装置における肺野領域の線量計算アルゴリズムの評価
齋藤　陽子	教授	organ dose modulation(ODM)による吸収線量及び画質への影響の検討
敦賀　英知	教授	皮膚真皮における膠原線維および弾性系線維の放射線照射による影響の比較
高橋　康幸	教授	PET/CT 装置の CT 減弱補正における CT 値とアーチファクトの検証
門前　暁	准教授	塩化ラジウム製剤（Ra-223）による骨転移内用療法の効果・有害事象を予測するバイオマーカーの探索
藤岡　美幸	講師	新興病原体 Escherichia albertii の生化学的・生物学的特性の検討
尾田　敦	教授	後脛骨筋を主とする足部内転筋群の筋疲労が Medial Tibial Stress Syndrome の危険因子および運動学的パラメータに与える影響
		人工膝関節全置換術後患者に対するスリングエクササイズの有効性の検討
對馬　栄輝	教授	疲労による膝関節位置覚の低下が Drop Vertical Jump に及ぼす影響
		アンプティサッカーの競技能力に関わる評価バッテリーの考案　～バランス能力に着目して～
		均一圧，導子固定下における超音波療法の筋への効果
		腹斜筋の筋活動の変化が立位矢状面脊柱アライメントに与える影響
加藤　拓彦	准教授	急性期病院入院脳卒中患者における意識障害に焦点を当てた退院転帰先の予測因子の検討：前向き観察研究
髙見　彰淑	准教授	認知症周辺症状を念頭に置いた患者の ADL への影響に関するセラピストの認識と実症状のずれに関する研究
		仮想現実にて速度誤認識を形成させた際の前進及び後進歩行の脳血流変化に関する検討
		脳卒中後 Pusher 現象による ADL への影響と回復過程における半球間格差について
		視覚刺激を用いた自己運動錯覚がもたらす運動学習効果についての検証
吉田　英樹	准教授	微弱電流刺激療法が炎症期の創傷治癒に与える影響に関する研究
		変形性膝関節症における鵞足症状に対する超音波療法の有効性の検討

【 博士後期課程 】

論文指導者名	職名	指導論文名
北宮　千秋	教授	保育施設におけるインフルエンザ対策プログラムの開発および効果の検討 －保育士のインフルエンザ対策の現状と課題から－
敦賀　英知	教授	The effects of X-ray and ultraviolet on the ciliary zonules of the eye （X線及び紫外線の眼球毛様体小帯への影響）
高橋　康幸	教授	新しい線条体放射濃度結合比計算ソフトウェアを使用した N-ω-fluoropropyl-2β-carbomethoxy-3β-(4-[123I] iodophenyl) nortropane SPECT によるパーキンソン病の評価（Evaluation of N-ω-fluoropropyl-2β-carbomethoxy-3β-(4-[123I] iodophenyl) nortropane SPECT using the new specific binding ratio calculation software of Parkinson's disease）
石川　玲	教授	呼吸介助法の換気力学的研究　－胸腔内圧，胸郭コンプライアンス及び呼吸仕事量による検討－
山田　順子	教授	Motor problems and atypical sensory processing profiles in preschoolers with developmental coordination disorder（発達性協調運動障害を持つ幼児の運動の問題と非定型な感覚処理プロファイル）
對馬　栄輝	教授	脳卒中片麻痺患者の歩行特性が転倒に及ぼす影響
髙見　彰淑	准教授	自己装着可能なループ式アームスリング装着時の歩行や基本動作に及ぼす影響

４．　他大学・他施設における講義

担当者名	職名	授業担当科目	年間担当時間数
長内　智宏	教授	臨床医学概論	3
樋口　毅	教授	周産期医学	30
		母性疾病治療論	7.5
藤田　あけみ	教授	家族看護学	12
		家族社会学	30
井瀧　千恵子	教授	看護管理（災害看護）	8
北宮　千秋	教授	公衆衛生学	16
		公衆衛生学	30
		保健医療福祉のしくみ	9
		労働・環境と健康	30
冨澤　登志子	教授	英語Ⅱ	30
五十嵐　世津子	准教授	小児看護学Ⅰ	4
		母性看護Ⅱ	10
		母性看護概論	6
		母性看護概論・保健	16
三崎　直子	准教授	助産管理	4.5
		助産診断・技術学Ⅰ，助産管理論	42
則包　和也	准教授	精神看護学概論	15
		精神看護学方法論Ⅰ	20
		人間関係論	15
		人間関係論	30
佐藤　真由美	准教授	看護管理	16
大津　美香	准教授	家庭看護	12
扇野　綾子	講師	小児看護学方法論Ⅰ	10
北嶋　結	助教	成人臨床看護Ⅰ（循環器）	16
細川　洋一郎	教授	歯科放射線学	2
		放射化学	6
		放射線医学	30
高橋　康幸	教授	核医学機器工学	23
		核医学検査技術学演習	23
		核医学診断医術学	23
門前　暁	准教授	情報科学（情報科学の基礎）	10
對馬　惠	講師	病理学	10
小山内　暢	助教	病態治療学Ⅰ	4
		放射線医学の基礎	15
寺島　真悟	助教	薬学部	6
吉野　浩教	助教	情報科学（統計処理）	5
		病態治療学Ⅰ	6
辻口　貴清	助教	放射線医学	30
伊藤　巧一	教授	免疫と感染	12
丹藤　雄介	教授	臨床栄養学各論Ⅰ	10.5
宮崎　航	教授	応用生理学演習	10
		公衆衛生学	24
武尾　照子	准教授	人体の構造と機能Ⅰ，Ⅱ	60
七島　直樹	准教授	生化学	20
		生化学	30
藤岡　美幸	講師	微生物学	28
		臨床検査	16
野坂　大喜	講師	栄養代謝学	30
		保健統計学	30
堀江　香代	助教	臨床検査	10
中野　学	助教	臨床検査	8
石川　玲	教授	基礎看護援助論Ⅰ	4
小山内　隆生	教授	基礎作業学	6
		作業療法評価技術学Ⅱ	30
		精神科リハビリテーション学Ａ・Ｂ	60
山田　順子	教授	解剖生理学	48

栗林　理人	教授	小児疾病治療論	1.5
		模擬講義	2
玉井　康之	教授	精神医学特論１・２	30
和田　一丸	教授	精神医学Ｂ	30
對馬　栄輝	教授	人間工学	4
		理学療法発展領域論	10
		理学療法発展領域論	10
		リハビリテーション科学統計学実践特論	10.5
加藤　拓彦	准教授	基礎作業学	16
		統合失調症作業療法治療学	15
髙見　彰淑	准教授	基礎神経系理学療法学	22.5
		神経系障害理学療法学Ⅱ	16
吉田　英樹	准教授	健康と運動	30
		理学療法学	15
松田　侑子	准教授	学生の研究指導	22
		発達心理学，教育心理学，幼児理解と教育相談	36
		臨床心理学	30
平川　裕一	講師	運動生理学	24
上谷　英史	講師	保健医療論	14
藤田　俊文	講師	在宅看護援助論Ⅱ／理学療法	10
小枝　周平	講師	発達障害作業療法学	6
田中　真	助教	精神医学	12
		精神疾患作業療法治療学演習	4
髙橋　純平	助教	人間工学	6
		リハビリテーション	22.5
横田　純一	助教	内部障害理学療法評価学および治療学	68
佐藤　ちひろ	助教	医療との連携とリハビリテーション	4
		介護職員初任者研修に関する講義	4

教育活動の状況２

（１）中期計画の進捗状況

※【 】内の数字は本学の第３期中期計画の番号を示す。中期計画の全容は次のウェブサイトを参照。
＜中期目標・中期計画一覧表　国立大学法人弘前大学＞
https://www.hirosaki-u.ac.jp/wordpress_data/soshiki/gyomu/3ki-ichiran4.pdf
※文中のアルファベットはそれぞれ各専攻及び学科を示す。Ｎ＝看護学専攻，Ｒ＝放射線技術科学専攻，Ｔ＝検査技術科学専攻，ＰＴ＝理学療法学専攻，ＯＴ＝作業療法学専攻，Ｐ＝心理支援科学科

【６】地域の人材や資源を活用した実践的な授業を拡充し，地域志向科目を 200 科目以上開講する。地域の社会人の学び直しのための教育プログラムを開発する。

○地域志向科目・専門教育科目「老年看護学実習Ⅰ（２年次・前期，１単位）80 人履修」を 2020 年度に実施した。弘前市の高齢者にインタビューを行い，生活歴や思いの傾聴，聞き書き冊子（個人史）の作成等を通して，地域の高齢者を理解する姿勢を実践的に学習した。【Ｎ】(継続)

○地域志向科目・専門教育科目「老年看護学実習Ⅱ（４年次・前期，３単位）80 人履修」を 2020 年度に実施した。弘前市内の病院に入院していた高齢者の過去の事例を基に作成した看護過程及び弘前市内の介護保険施設に入所中の高齢者の生活援助に関する課題を通して，高齢者に関わる地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みの現状を理解し，高齢者看護の課題を考察した。【Ｎ】(継続)

○弘前大学医学部保健学科検査技術科学専攻細胞検査士・青森県細胞検査士会・青森県臨床検査技師会が協賛し『第２回　細胞検査士２次試験対策 スクリーニング講座』を企画した。細胞検査士資格認定試験一次試験の画像問題や，２次試験の同定試験の勉強のための細胞診標本の収集と画像撮影，解答集作成（DVD）により受験のための資料になるのみならず，病院臨床現場で遭遇する判定困難の際の基準画像集も兼ねることができたことは，がん細胞判定の診断精度向上に大きく寄与することができた。【Ｔ】(継続)

○附属病院病理部と弘前大学医学部保健学科検査技術科学専攻細胞検査士養成課程が協賛し，第171回から第180回細胞診症例検討会を Web と校内の併用で開催した。参加者として，青森県内地域の細胞検査士や資格認定試験受験する社会人や大学院生にも加わっていただき，共に臨床現場に沿った症例の学び及び，学び直しをすることができた。【Ｔ】(継続)

【12】地域の社会人学び直しを推進するため，社会人学生を対象とした新たな教育プログラムを開発・実施し，大学院への受入を拡充する。

○社会人学び直し教育として，『医工学技術者養成講座』を理工学研究科，医学研究科，保健学研究科が連携して履修証明プログラムとして設置した。保健学研究科は『医用検査機器特論(22.5h)』を担当し，2020 年度より学生受け入れを開始した。【Ｔ】(継続)

【19】課外活動の支援を強化するとともに，地域との連携によるボランティア活動等のプログラム開発・実施や活動に関する相談・助言，情報提供を行うなど，学生の地域活動の支援体制を整備する。

○作業療法学専攻では，弘前市と医学研究科が協力している「５歳児発達健診」「３歳児発達健診」に学生がボランティアとして参加し，学生が専門家の一員として地域の活動に参加することにより高い教育効果を得ている。(2020 年度は COVID-19 のため学生の受け入れ人数を制限して実施)【ＯＴ】(継続)

○作業療法学専攻では，地域の認知症患者に対する支援活動の一環として，専攻学生および市内一般企業を対象に計２回の認知症サポーター養成講座を開講した（受講者 計 27 名)。専攻学生は 2018 年度，2019 年度における受講者と合わせてほぼ全員が認知症サポーターとなった。【ＯＴ】(継続)

【28】原子力関連施設を擁する地域特性に鑑み，海外及び国内機関との連携の下，全学的な「放射線科学」及び「被ばく医療」に係る教育・研究の国際拠点を構築し，特にアジア諸国を中心に国内外における国際的な視野を有する高度専門職業人を育成する。さらに，東日本大震災後の弘前大学の果たしてきた様々な社会貢献をもとに，当該分野におけるリーダーシップを発揮し，国の被ばく医療機関として放射線事故等有事の際には，診療面も含め世界的な貢献を果たす。

○放射線看護高度看護実践コース
・日本看護系大学協議会より高度実践看護師教育課程の認定を受け教育を継続しており，2020 年度は２名（１年次学生１名，２年次学生１名）が就学中である。2020 年度末までに延べ７名の修了生を輩出しており，修了生の多くは看護師として勤務する傍ら，研修会等の講師として各所で活躍している。(継続)
・2017 年 12 月に文科省「職業実践力育成プログラム」に実践コースが認定され，2018 年度に厚生労働省の「教育訓練給付制度」の指定を受けている。(継続)

○放射線看護教育研修会の開催
・放射線看護分野の確立と発展に向けて看護職者・看護教員への教育支援看として，「放射線看護セミナー」をオンラインで開催し，全国から 96 名の参加者を得た。本セミナーの参加希望者が多数あり締切後も多くの問い合わせがあったことから，録画内容をオンデマンド配信し 21 名が参加した。(継続)
・京都大学医学部附属病院との共催で「放射線看護ベーシックトレーニング」をオンラインで開催した。第１回は参加者 19 名，１回目の参加枠に入ることができなかった医療者に向け第２回を開催し９名の参加者があった。(継続)

○放射線看護教育等に関する情報発信
・「日本放射線看護学会第 9 回学術集会」の学術交流の場において，「Society5.0 の時代に向けた放射線看護教育：e-learning から VR までいつでもどこでも学べる環境を」をテーマにして放射線看護教育に関する情報発信を行い，放射線看護の専門性の確立に寄与した。(新規)
・2020 年 12 月４日に，協定校の台北医学大学看護学部３年次学生の Fall Semester の「Disaster Nursing」の講義をオンラインで行った。講師は冨澤登志子教授，内容は，“Fukushima Nuclear Power plant disaster and nursing care on radiation disaster”，参加者は 50 名であった。(新規)

○高度な看護実践を行うための学習会等の開催
放射線看護高度看護実践コース修了生及び大学院生を対象に，専門看護師を講師に招き，高度な看護実践を行うための研鑽を目的とした学習会及び事例検討会を年間で計３回実施した。(継続)

○被ばく医療コースへの留学生の受入促進
令和２年度に外国人留学生１名（インドネシア）を被ばく医療コースへ受け入れ，本コースへの留学生受入数が累計７名となり，国際性が進展した。(継続)

（２）特記事項

○2020 年４月に心理支援科学科を設置した。１年生 10 名を迎え学生教育を開始した。保健学科との合同授業も開設しており，他職種連携の取り組みも推進を図っている。(新規)

○国際原子力機関（IAEA）の緊急時の準備と対応に関する国際ネットワークのメンバーとして，特に大学院教育に関する国際プログラムの開発に携わっている。【Ｒ】(継続)

○検査技術学専攻の学生が学会発表を行った（第 61 回日本臨床細胞学会春期大会２名，第 69 回日本医学検査学会１名)。【Ｔ】(新規)

○検査技術科学専攻の学生が，全国学会（第 61 回日本臨床細胞学会春期大会）で優秀演題賞を受賞した（2 名）【Ｔ】(新規)

○ニュージーランド臨床検査教育施設における短期研修及び学生間の国際交流プログラムを計画し，弘大基金と日本学生支援機構から研修費用が採択された。本事業は臨床検査領域における国際的視野を有した人材の育成を目的としており，弘前大学と国際交流連携協定校であるニュージーランド・オタゴ大学及びオークランド工科大学における臨床検査技師養成コースの学生間の国際交流と施設の視察を行うとともに，日本の臨床検査教育や業務内容について英語による発表及び実際に授業や実習に参加することでＮＺの教育を体験する。【Ｔ】(継続)

教育活動の自己評価１

評価できる点

○施設や地域で生活している高齢者に，学生がインタビューを実施する授業を通して，高齢者の理解と個別的な課題を深め，地域包括ケアシステムの構築に向けた取り組みの現状を理解する学生の育成に貢献している。

○日本看護系大学協議会からの認定を受け，高度実践看護師教育課程を継続して実施しており，2 名が就学中である。本年度は，専門看護師を講師として，学習会や事例検討会を 3 回実施した。修了生 7 名の多くは，看護師や研修会の講師として活躍していることから，優れた実践能力と高い専門性をもつ看護職者の育成に貢献している。

○放射線看護教育等について，研修会の開催（オンライン）や，学術集会での情報発信，海外の大学との共同セミナーを実施する等，国内のみならず世界的にリーダーシップを発揮した活動は，特色の一つである。

○弘前大学医学部保健学科検査技術科学専攻細胞検査士・青森県細胞検査士会・青森県臨床検査技師会が協賛し『第２回　細胞検査士２次試験対策　スクリーニング講座』を企画された。検査技術科学専攻 4 年生の細胞検査士資格認定試験一次試験の画像問題や，２次試験の同定試験の勉強のための細胞診標本の収集と画像撮影，解答集作成（DVD）により受験のための資料になるのみならず，病院臨床現場で遭遇する判定困難の際の基準画像集も兼ねた。特にがん細胞判定の診断精度向上に大きく寄与し，専門性を生かした教育活動がなされている点を高く評価する。

○附属病院病理部と弘前大学医学部保健学科検査技術科学専攻細胞検査士養成課程が協賛し，第 171 回から第 180 回細胞診症例検討会を Web と校内の併用で開催した。参加者として，青森県内地域の細胞検査士や資格認定試験受験する社会人や大学院生にも加わっていることは，全国的にみても特色の一つであるといえる。特に，養成課程の学生のみならず，地域の社会人にとって，継続的に臨床現場に沿った症例の学び及び，学び直しをしていることは高く評価する。

○社会人学び直し教育として，『医工学技術者養成講座』を理工学研究科，医学研究科，保健学研究科が連携する履修証明プログラムとして設置された。特に，保健学研究科は『医用検査機器特論(22.5h)』を担当し，2020 年度より学生受け入れを開始したことは，社会人と検査技術科学専攻学生が医用機器の理解を深め高いレベルでの人材育成活動となっている点を高く評価する。

○検査技術学専攻の学生が学会発表を行った（第 61 回日本臨床細胞学会春期大会２名，第 69 回日本医学検査学会１名）。いずれも学部学生が全国学会の一般演題にエントリーし採択されたことは，研究方法のみならず，発表方法など広く学術的な経験をしたことは，特記すべきことである。

○検査技術科学専攻の学生が，全国学会（第 61 回日本臨床細胞学会春期大会）で優秀演題賞を受賞した（２名）。これは，演題の内容や着眼点が卓越していることはもとより，発表データの作成に創意工夫がみられたものに与えられる賞である。各々，演題名は「ＬＢＣ標本における反応性頸管腺と上皮内癌の鑑別のためのＨＳＬ色空間解析法の有用性」と「線維腺腫と浸潤性乳管癌の鑑別のための低倍率視野における集塊の多様度解析法の有用性」であった。また両学生ともに弘前大学学長より「学生表彰」が授与されている点も含め特記すべきことである。

○ニュージーランド臨床検査教育施設における短期研修および学生間の国際交流プログラムを計画し，弘大基金と日本学生支援機構から研修費用が採択された。本事業は臨床検査領域における国際的視野を有した人材の育成を目的としており，弘前大学と国際交流連携協定校であるニュージーランド・オタゴ大学およびオークランド工科大学における臨床検査技師養成コースの学生間の国際交流と施設の視察を行うとともに，日本の臨床検査教育や業務内容について英語による発表および実際に授業や実習に参加することで NZ の教育を体験する。残念なことにコロナ禍，中止をせざるを得なかったが，海外大学との学生交流や視察を積極的に企画しており高く評価される。

○地域志向科目を積極的に設定しており，保健学科として各専攻の専門性を生かした教育活動がなされている。

○心理支援科学科の設置に合わせて，保健学科との合同授業がカリキュラムに組み込まれており積極的に多職種連携に取り組んでいる点は評価できる。

○専攻により，地域志向科目や社会人の学び直しに向けた教育内容に差があるように感じる。各専攻とも地域に根差した活動ができるよう教育内容を整備できるとなおよい。

○国際的な活動が多くなってきているのは評価できる活動である。継続した取り組みになるよう，人材配置や仕組みを整理しておくことが必要と考える。

改善を要する点

○高度実践看護師教育課程においては，院生の確保を継続的に行うために工夫をすることが重要である。

○地域生活者に対するインタビューを含む教育については，コロナ禍での対応に十分考慮する必要がある。

○保健学科と心理支援科学科との多職種連携に関する教育は評価できるが，医学科を含めた医学部全体での取り組みが今後必要と考える。

その他

○2020 年４月から心理支援科学科が設置され，公認心理師養成を医学部で行っている点を活かして多くの医療系科目を履修できるカリキュラムによって教育を行っている点が特色である。

教育活動の自己評価２

（教育活動における自己点検評価に関する申合せにおける自己点検・評価）

教育活動における自己点検評価に関する申合せ第２における各項目	自己点検・評価
（１）アドミッションポリシー，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーが，学科及び各研究科各々の目的に則して明確・具体的で，かつ，整合的であること	令和元年度に入試委員会，学務委員会，学事委員会を中心にアドミッションポリシー，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーの整備が行われており，学科及び各研究科各々の目的に則して明確・具体的で，かつ，整合的であることが確認できる。
（２）学科及び研究科の学生受入れが，学科及び研究科各々のアドミッションポリシーに則して適切であること	組織評価資料により入学状況を検証し，学科及び研究科各々のアドミッションポリシーに則して適切であることが確認できる。
（３）教育課程の編成及び授業科目の内容が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して体系的であり，相応しい水準であること （４）授業形態及び学習指導法が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して適切であること （５）履修指導及び支援が，カリキュラムポリシー及びディプロマポリシーに則して適切であること	医学部保健学科については，シラバス作成を依頼する際に，学科・専攻で定められた DP 及び CP と各授業科目の対応関係を明示するよう各教員に依頼が行われている。シラバス作成後には，学務委員会において，実施期間を設けシラバス・カリキュラムチェックが実施されており，教育課程の編成，授業科目の内容，授業形態，学習指導法，履修指導及び支援が CP・DP に即して体系的で相応しい水準であるか確認されており，チェックの結果をもとに不備のある授業担当教員へは改善要求，再確認が行われている。 大学院保健学研究科においては，シラバス作成を依頼する際に，研究科で定められた DP と各授業科目の対応関係を明示するよう各教員に依頼が行われている。学事委員会において，実施期間を設けシラバス・カリキュラムチェックが実施されており，設定された難易度に相応しい水準であるか確認が行われている。以上から，当該自己点検評価項目を満たしていると評価できる。
（６）成績評価が，カリキュラムポリシーに則して公正・厳格で，かつ，客観的に実施されていること	医学部保健学科及び大学院保健学研究科において，成績評価を含めた授業の開講状況の資料をもとに，CP 及び成績評価ガイドラインに則して，公正・厳格で，かつ客観的に実施されているか成績分布を確認したうえで，到達目標が過度に低くなっていないか，高くなっていないかなどを，「秀」評価の取得率や「不可」評価率の状況を踏まえ，学務委員会及び学事委員会において報告・検証を行い，その結果を全教員に報告する体制がとられている。以上から，当該自己評価点検項目を満たしていると評価できる。
（７）学習成果の達成度が，学科及び研究科各々の目的及びカリキュラムポリシーに則して相応しい水準になっていること	学務委員会及び学事委員会を中心に，就学状況，就職状況，学習成果，卒業生に対するアンケート調査等をもとに，学習成果の達成度が学科及び研究科各々の目的及びカリキュラムポリシーに則して相応しい水準になっているか検証が行われており，改善を要する点は各委員会で検討する等しており，当該項目を満たしていると言える。
（８）卒業及び修了判定並びに学位授与が，学科及び研究科各々の目的及びディプロマポリシーに則して公正に実施されていること	卒業及び修了判定並びに学位授与の認定会議において，認定基準を基に適切に行われていると評価できる。
（９）教育に係る施設及び設備が，学科及び研究科各々の目的に則して適切であること	医学部保健学科及び保健学研究科の自主的学習環境の整備状況については，学部及び研究科の目的に即して，高度な知識・技術を身につけるための必要な整備が行われていると認められる。また，学生からの要望に基づく環境整備や，学生の健康と安全の確保，教育効果の向上に配慮した取組がなされ，教育環境の向上に努めていると評価できる。
(10) 学科及び研究科における学生支援が，学科及び研究科各々の目的に則して適切であること	医学部保健学科及び保健学研究科の学生支援の状況については，学部及び研究科の目的に即して，高度な知識・技術を身につけるための修学支援のほか，豊かな人間性をもった人材育成のため学生生活全般にわたる支援を行う等，適切な支援が行われているとともに，新たな取組により学生の利便性向上に資する支援がなされていると評価できる。

Ⅲ　研究

Ⅲ　研究

研究活動の状況１

＜研究業績数の推移について＞

表１　保健学研究科研究業績数（2017 度～2020 年度）

		2017 年度		2018 年度		2019 年度		2020 年度	
		単著	共著	単著	共著	単著	共著	単著	共著
査読付き論文数	日本語	3	57	3	47	5	48	2	35
	外国語	2	65	3	56	6	91	2	79
その他の論文数	日本語	8	19	9	23	5	14	7	5
	外国語	0	2	0	2	0	5	0	0
学術図書	日本語	4	13	0	9	1	13	0	21
	外国語	0	3	0	2	0	0	0	0
作品等	－	0		0		0		0	

（出典）令和２年度国立大学法人運営費交付金「成果を中心とした実績状況に基づく配分」に用いるデータ等（研究業績数調査）

＜ＳＳ，Ｓの研究業績について＞

巻末資料「ＳＳ，Ｓの研究業績」参照。

研究活動の状況２

（１）中期計画の進捗状況

※【 】内の数字は本学の第３期中期計画の番号を示す。中期計画の全容は次のウェブサイトを参照。
＜中期目標・中期計画一覧表　国立大学法人弘前大学＞
https://www.hirosaki-u.ac.jp/wordpress_data/soshiki/gyomu/3ki-ichiran4.pdf
※文中のアルファベットはそれぞれ各専攻及び学科を示す。Ｎ＝看護学専攻，Ｒ＝放射線技術科学専攻，Ｔ＝検査技術科学専攻，ＰＴ＝理学療法学専攻，ＯＴ＝作業療法学専攻，Ｐ＝心理支援科学科

【23】国際共同研究の推進による国際共著論文数の倍増及び海外研究機関との研究プロジェクトの積極的な推進により，健康科学研究・脳科学研究・放射線科学研究・物質科学研究をはじめとする大学の特徴ある研究の国際拠点を形成する。

○幼児期から児童思春期の大規模コホート調査研究において，自閉症の累積発生率および他の神経発達症の併存率を調査した国際共著論文(IF: 5.9)を含む６本の国際共著論文にアクセプト・掲載された。【Ｐ】(新規)

○子どもたちの心の健康を定点観測し，早期支援に繋げる仕組みの開発を目指して弘前市内で毎年実施している『心のサポートアンケート』から得られたデータから得られた知見を題材として，海外の研究者とともに国際児童青年精神医学会(IACAPAP 2020 World Congress: シンガポール)でシンポジウム形式の発表を行った。【Ｐ】(新規)

【26】地域における人口減少や健康問題の克服，健康長寿の実現という地域課題の解決と，QOL（生活の質）の向上を図る研究に取り組む。さらに，豊富な食糧資源や観光資源といった地域の強みを活かし，食，健康や福祉の分野に関する文理融合的な地域志向型多領域研究を進める。

○高齢化が進む津軽地域の認知症高齢者の QOL の向上を図る目的で研究活動を行った。認知症高齢者の肯定的主観や心理的ニーズの効果的な引き出し方の検討を行い，2020 年 12 月 12 日～12 月 13 日に開催された第 40 回日本看護科学学会学術集会において「認知症高齢者の肯定的側面を引き出すための効果的な対応方法の検討」「認知症高齢者の心理的ニーズを引き出すための効果的な対応方法の検討」の演題発表を行った。【Ｎ】（新規）

○作業療法学専攻では，弘前大学 COI における「岩木健康増進プロジェクト」や「健康長寿社会の実現を目指した大規模認知症コホート研究」等の大規模疫学調査・研究に計４回参画し，その成果の社会実装に取り組んでいる。【ＯＴ】（継続）

○作業療法学専攻では，青森県内の企業（介護事業者）と「介護事業における利用者の日常生活の向上を目指した介入方法の開発」に関する共同研究を実施し，その成果の社会実装に取り組んでいる。【ＯＴ】（新規）

○弘前市が主催する「５歳児発達健診」「３歳児発達健診」に医学研究科とともに参画し，他職種連携のもと大規模な調査研究を実施している。研究成果は発達障害児の早期療育や子育て支援に結びついており地域住民の QOL の向上につながっているほか，地域の専門家の育成にも役立っている。【ＯＴ】（継続）

○子どもたちの心の健康を定点観測し，早期支援に繋げる仕組みの開発を目指して弘前市内で毎年実施している『心のサポートアンケート』から得られたデータについて児童思春期の子どもたちの抑うつの重症度および自殺念慮・企図を有している割合について報告を行った(Adachi et al., 2020)。結果についてプレスリリースを行ったところ，朝日新聞・共同通信といった全国紙を含む 6 社から取材依頼があり，取材内容は共同通信を通して地方紙やその WEB 版に多数掲載され，国内で大きな反響があった。【Ｐ】（新規）

【28】原子力関連施設を擁する地域特性に鑑み，海外及び国内機関との連携の下，全学的な「放射線科学」及び「被ばく医療」に係る教育・研究の国際拠点を構築し，特にアジア諸国を中心に国内外における国際的な視野を有する高度専門職業人を育成する。さらに，東日本大震災後の弘前大学の果たしてきた様々な社会貢献をもとに，当該分野におけるリーダーシップを発揮し，国の被ばく医療機関として放射線事故等有事の際には，診療面も含め世界的な貢献を果たす。

○KIRAMS との緊急被ばく医療に関するオンラインセミナー「2020 KIRAMS - Hirosaki University Webinar on Radiation Emergency Medicine」を開催し，COVID-19 禍での被ばく医療をテーマに KIRAMS 及び本学から２名ずつ，また，放射線防護に関するテーマで１名ずつが発表した（2020 年 11 月 17 日）。セミナーを通じて，未だ終息の見えない感染症拡大下での被ばく事故対応における課題と解決策が議論され，情報共有が図られた。（継続）

○タイ・カセサート大学で開催予定であった，タイの主要４大学との「放射線研究とその関連課題に関する二国間ワークショップ」及び本学で開催予定であった「若手研究者による放射線と健康に関する国際教育シンポジウム（ESRAH2020)」は，COVID-19 感染拡大の影響によりジョイントシンポジウムに変更のうえオンラインで開催した（2020 年 11 月 21 日～23 日)。タイ，欧州及び豪州の研究者 10 名による教育講演や研究発表のほか，参加大学の若手研究者，大学院生らによるポスター発表が行われた。今回のジョイント開催により両学会の活動が相互に認識され，より多様で活発な議論を創出する会となったことは有意義であった。（継続）

（２）特記事項

○カシス抽出物の新規保健機能の探索を行い，カシス抽出物には植物性エストロゲン効果があり，更年期モデルラットの血管エラスチン分解を軽減すること，脂質異常症を軽減することを見出した。これらの２件の研究結果は国際雑誌 Nutrients(2020 年 IF：5.717)に掲載された。さらに，これらの研究は国際共同研究であり，ニュージーランド・オタゴ大学の Indrawati Oey 教授が国際共著者として加わっている。【Ｔ】(新規)

○バングラデシュ・ダッカ大学微生物学部との共同研究により，日本では分離・同定が困難である感染症原因菌について，検出方法の開発や生化学的性状の解明等を行っている。【Ｔ】(新規)

○大学院保健学研究科の学生３名が原著論文に掲載された。【Ｔ】(新規)

○大学院保健学研究科の学生６名が学会発表を行った。【Ｔ】(新規)

○魚の粘液から同定した抗菌タンパク質（psLAA01）を世界で初めて高純度人工合成に成功しており，改良型合成法に関して Applied microbiology and biotechnology (2020, IF：4.813) で報告している。当該タンパク質は，院内感染の起因菌であるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌をはじめ，各種病原性微生物に対して強力な抗菌作用を有し，細菌結合性，菌体破壊作用が認められている。また，従来の抗生物質のような耐性化を引き起こすことがなく直接菌体を破壊することから新たな抗菌薬として期待されており，JST A-Step (2019-2020 年度)，トライアウト (2021 年度) の採択と製薬企業との実用化に向けた共同研究に発展している。【Ｔ】(新規)

○細胞膜６回半貫通型タンパク質であるヒアルロン酸合成酵素（HAS）に特徴的な細胞内ループ構造に，世界で２例目となるヒアルロン酸合成に必須なリン酸化アミノ酸部位が存在することを報告した (Biochemical and Biophysical Research Communications 2020, IF：3.575)。【Ｔ】(新規)

○作業療法学専攻では，脳卒中モデル動物を用いた運動麻痺改善に対する効果的リハビリテーション確立を目指した研究活動をさらに展開している。本学で開催された第２回生体応答研究科学センターサロンにおいて「ニューロリハビリテーション研究紹介～機能回復は脳回復・脳可塑性は可能性～」というテーマで異分野の研究者を対象に講演を行った。【ＯＴ】(継続)

研究活動の自己評価

評価できる点

○本大学の周辺地域で生活する認知症高齢者を対象とした研究を行い，学術集会で広く発信したことは，地方での超高齢化社会への対応を検討する取り組みとして評価できる。

○KIRAMS との緊急被ばく医療に関するオンラインセミナー「2020 KIRAMS - Hirosaki University Webinar on Radiation Emergency Medicine」を開催した。セミナーを通じて，未だ終息の見えない感染症拡大下での被ばく事故対応における課題と解決策が議論され，情報共有が図られたことは評価できる（2020 年 11 月 17 日）。

○タイの主要４大学との「放射線研究とその関連課題に関する二国間ワークショップ」及び「若手研究者による放射線と健康に関する国際教育シンポジウム（ESRAH2020)」のジョイントシンポジウムをオンラインで開催したことは評価できる（2020 年 11 月 21 日～23 日)。

○カシス抽出物の新規保健機能の探索を行い，カシス抽出物には植物性エストロゲン効果があり，更年期モデルラットの血管エラスチン分解を軽減すること，脂質異常症を軽減することを見出した。これらの２件の研究結果は国際雑誌 Nutrients(2020 年 IF：5.717)に掲載されており高く評価できる。さらに，これらの研究は積極的に国際共同研究として実施されており，ニュージーランド・オタゴ大学の Indrawati Oey 教授が国際共著者として加わり活発に実施されている。

○バングラデシュ・ダッカ大学微生物学部との共同研究を実施しており，日本では分離・同定が困難である感染症原因菌について，検出方法の開発や生化学的性状の解明等のレベルの高い研究を積極的に行っている。

○大学院保健学研究科の学生３名が原著論文に掲載されたことは評価できる。

○大学院保健学研究科の学生６名が学会発表を行ったことは評価できる。

○魚の粘液から同定した抗菌タンパク質（psLAA01）を世界で初めて高純度人工合成に成功しており，改良型合成法に関して Applied microbiology and biotechnology（2020，IF：4.813）で報告している。当該タンパク質は，院内感染の起因菌であるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌をはじめ，各種病原性微生物に対して強力な抗菌作用を有し，細菌結合性，菌体破壊作用が認められている。また，従来の抗生物質のような耐性化を引き起こすことがなく直接菌体を破壊することから新たな抗菌薬として期待されており，JST A-Step（2019-2020 年度)，トライアウト（2021 年度）の採択と製薬企業との実用化に向けた共同研究に発展しているレベルの高い研究として高く評価できる。

○細胞膜６回半貫通型タンパク質であるヒアルロン酸合成酵素（HAS）に特徴的な細胞内ループ構造に，世界で２例目となるヒアルロン酸合成に必須なリン酸化アミノ酸部位が存在することを報告したことは高く評価できる（Biochemical and Biophysical Research Communications 2020，IF：3.575)。

○地域を基盤とし，地域の特色を生かした研究が展開され，成果が見られている点は評価できる。

○国際共同研究が増えているほか，他職種が連携した研究が増えてきており，評価できる。

○子どもたちの心の健康に関して弘前市内で毎年実施している「心のサポートアンケート」から得られたデータに基づく研究報告を積極的に行っており，その成果が全国紙を含む新聞等での取材によって広く周知された。子どもの心の健康を支援する取り組みとして高く評価できる。

改善を要する点

○海外論文への投稿は見られるものの領域に偏りがある印象であり，今後は多領域での研究・論文投稿が課題である。

○文理融合的な地域志向型多領域研究を推進するためにも，保健学研究科内の各領域に加えて他の学部・研究科との連携が欠かせないと考える。

○研究業績は非常に優秀であると思われるが，専攻単位での小グループの研究実績が多いように思われる。本研究科に多職種が所属しているという利点を活かし，もう少し大きなグループでの活動が必要と思われる。

○若手研究者の育成を検討してほしい。

○保健学研究科の特徴を存分に生かすためには，生物学的な研究と疫学調査などヒトを対象とした研究がコラボできるような取り組みを検討していくことが必要と考える。

その他

○特になし。

Ⅳ　社会活動等

Ⅳ　社会活動等

社会活動等の状況１

１．　学会（研究会）などにおける委員としての活動

氏名	件名	役職等
木立　るり子	一般社団法人日本放射線看護学会	理事
	青森継続看護研究会	会長
高橋　徹	日本小児循環器学会	評議員
	日本川崎病学会	運営委員
	東北発達心臓病研究会	幹事
	東北小児循環器懇話会	幹事
中村　典雄	日本腎臓学会	評議員
	日本腎臓学会	広報委員会キーパーソン
	日本透析医学会	評議員
	日本透析医学会	研修プログラム小委員会委員
	日本脂質栄養学会	評議員
	日本腎臓リハビリテーション学会	代議員
	東北腹膜透析カンファランス	幹事
	東北アフェレシス研究会	世話人
	東北腎フォーラム	世話人
野戸　結花	一般社団法人日本放射線看護学会	理事
藤田　あけみ	日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会	評議員，社会保険委員，編集委員
	日本看護科学学会	代議員
	日本看護学教育学会	評議員，査読委員
	日本ヒューマンケア科学学会	理事，編集委員
	国立大学保健医療学系代表者会議看護分科会	組織検討委員
	一般社団法人日本放射線看護学会第 10 回学術集会	企画委員
井瀧　千恵子	日本看護診断学会	評議員
冨澤　登志子	一般社団法人日本看護診断学会	評議員
則包　和也	一般社団法人日本精神科看護協会青森県支部	幹事
	一般社団法人看護のための認知行動療法研究会	理事
	一般社団法人日本精神保健看護学会	実践の質向上委員会
大津　美香	一般社団法人日本循環器看護学会	代議員
	一般社団法人日本放射線看護学会第 10 回学術集会	実行委員
	一般社団法人日本循環器看護学会第 17 回学術集会	一般演題査読委員
	公益社団法人青森県看護協会　学会委員会	委員
	第 49 回青森県看護学会	抄録査読委員
扇野　綾子	日本小児保健協会	代議員
高橋　康幸	日本核医学技術学会	評議員
細田　正洋	一般社団法人日本保健物理学会緊急時モニタリング検討委員会	委員長
	国際原子力機関（IAEA） 緊急時の準備と対応における教育と訓練に関する国際ネットワーク　ワーキンググループ B	メンバー
	原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR） 報告書作成委員会 SG3（ラドン）	委員（屋内トロン責任者）
小山内　暢	保健科学研究会	企画運営委員
吉野　浩教	日本放射線影響学会	学術評議員
	日本放射線影響学会 SIT ワークショップ準備検討小委員	委員
	日本放射線影響学会 放射線リスク・防護検討委員会委員 放射線災害時の線量推定に関する小委員会	委員
	弘放会	副会長
辻口　貴清	一般社団法人日本保健物理学会緊急時モニタリング検討委員会	委員（幹事）
	一般社団法人日本保健物理学会コミュニケーション委員会	委員

渡邉　純	日本病理学会	評議員
	日本臨床細胞学会	評議員
	東北臨床細胞学会	理事
	青森県臨床細胞学会	会長
	日本婦人科腫瘍学会	評議員
山形　和史	日本消化器病学会東北支部	評議員
	日本消化器内視鏡学会東北支部	評議員
	公益財団法人日本骨髄バンク	調整医師
松宮　朋穂	あしなが予防医学研究会	幹事
藤岡　美幸	青森県臨床衛生検査技師会	施設連絡員
堀江　香代	第 37 回青森県臨床細胞学会　青森市　2021 年 3 月	実行委員，事務局
丹藤　雄介	日本膵臓学会	評議員
	日本消化吸収学会	評議員
	日本病態栄養学会	学術評議員
	日本膵臓病研究財団	評議員
	日本臨床内科医会	ニュース編集委員
	日本安定同位体医学応用学会	理事
	日本消化器病学会	ガイドライン委員
	日本胆膵病態・生理研究会	常任世話人
	木村看護教育振興財団	理事
	糖尿病トランスレーショナルリサーチ研究会	世話人
	青森県臨床内科医学会	副会長
	糖尿病病態代謝懇話会	世話人
	青森県肝胆膵研究会	世話人
吉岡　治彦	日本臨床細胞学会	評議員
	東北臨床細胞学会	理事
	青森県臨床細胞学会	理事
	青森県臨床検査技師学会	理事
	日本臨床検査学教育協議会	模擬試験作成・編集委員
七島　直樹	健康食品管理士会東北支部	役員
千葉　満	日本臨床検査学教育協議会	調査研究委員
宮崎　航	日本内分泌かく乱化学物質学会	理事
	日本衛生学会	評議員
	日本臨床検査学教育協議会	模擬試験作成・編集委員
伊藤　巧一	日本臨床検査学教育協議会	地方部会委員会委員
	日本臨床検査学教育協議会	研修委員会委員
	日本臨床検査学教育協議会	大学大学院部会副部会長
	日本臨床検査学教育協議会　北海道・東北部会	副会長
尾田　敦	青森県スポーツ医学研究会	世話人
	青森県理学療法士会津軽支部	相談役
	青森県アスレティックトレーナーの会	副会長，競技派遣部長，陸上競技担当
	青森県理学療法士会臨床実習指導者講習会協議会	会員
對馬　栄輝	日本運動器理学療法学会	代表幹事
	日本理学療法士学会　理学療法ガイドライン作成委員会運動器股関節ガイドライン作成グループ	班長
	日本理学療法士協会　運動器認定・専門理学療法士	審査委員
	日本理学療法士協会　協会指定研修	講師
髙見　彰淑	日本理学療法士協会　脳卒中ガイドライン作成班	副委員長
	日本理学療法士協会　脳卒中認定理学療法士	審査委員
吉田　英樹	日本理学療法士協会　物理療法部門研究会	演題査読委員
藤田　俊文	青森県理学療法士会	理事，学術局長，表彰委員担当理事
	青森県理学療法士会	表彰委員
	青森県理学療法士学会	学会賞審査員
	日本理学療法士協会東北ブロック協議会	学術局学術大会部長
	東北理学療法学術大会	学会賞審査員
	東北理学療法学術大会	演題査読委員

高橋　純平	第 8 回日本運動器理学療法学会学術大会	準備委員
	青森県理学療法士会	表彰委員
	青森県理学療法士学会	学会賞審査委員
横田　淳一	日本理学療法士協会　心血管理学療法ガイドライン作成班	メンバー
	日本理学療法士協会　心血管理学療法学会 COVID19 対策チーム	メンバー
	日本理学療法士協会　地域理学療法学会 COVID19 研究班	メンバー
小山内　隆生	東北精神保健福祉学会	理事
	日本作業療法士協会	代議員
	東北作業療法学会	第 32 回学会長
山田　順子	日本生理学会	集会委員
	日本生理学会	評議員
	日本脳科学会	評議員
	生理学女性研究者の会	運営委員
	入澤彩記念女性生理学者奨励賞	企画委員
和田　一丸	日本てんかん学会	評議員
	日本てんかん学会東北地方会	幹事
加藤　拓彦	日本作業療法学会	教育部委員
	日本作業療法学会	学術部委員
	青森県作業療法士会	監事
	東北精神保健福祉学会	監事
平川　裕一	日本作業療法研究学会	理事
	日本リハビリテーション工学協会	代議員
	東北作業療法学会	評議員
	青森県作業療法士会	全県理事，副会長，事務局長，地域作業療法推進委員会委員
	日本作業療法学会	演題審査委員
	日本作業療法研究学会	演題審査委員
	日本作業療法士協会	事例登録制度審査委員（B 審査委員）
上谷　英史	日本作業療法研究学会	理事
	日本作業療法士協会	事例報告登録制度審査委員（B 審査委員）
	青森県作業療法士会	全県理事
	青森県作業療法士会	地域作業療法推進委員会委員
	日本作業療法研究学会	演題審査委員
	青森県訪問リハビリテーション研究会	理事
	日本作業療法学会	演題審査委員
小枝　周平	青森県作業療法士会	全県理事
	日本作業療法学会	演題審査委員
	日本作業療法士協会	事例登録制度審査委員（B 審査委員）
	7th Asia Pacific Occupational Therapy Congress	Abstract reviewer
田中　真	青森県作業療法士会	全県理事
佐藤　ちひろ	生理学女性研究者の会	会計
	青森県作業療法士会	福利部長
栗林　理人	東北児童青年精神医学会	
松田　侑子	日本キャリア教育学会北海道東北地区部会	幹事
	日本キャリア教育学会事務局	幹事
足立　匡基	一般社団法人日本心理学諸学会連合検定局	運営委員

2．　学会（研究会）などの開催

氏名	件名	役職等
木立　るり子	第 22 回青森継続看護研究集会	
中村　典雄	第 31 回東北腹膜透析カンファランス	当番幹事
野戸　結花	一般社団法人日本放射線看護学会第 10 回学術集会	会長
北宮　千秋	一般社団法人　日本放射線看護学会第 10 回学術集会	企画委員

則包　和也	第 4 回　看護のための認知行動療法研究会	大会長
	第 22 回　青森継続看護研究集会	実行委員
大津　美香	第 49 回青森県看護学会	学会委員
高橋　康幸	津軽核医学技術懇話会	世話人
渡邉　純	第 38 回青森県臨床細胞学会　弘前市　2021 年３月	会長
丹藤　雄介	第 38 回日本胆膵病態・生理研究会	当番世話人
	第 14 回糖尿病トランスレーショナルリサーチ研究会	当番世話人
吉岡　治彦	第 47 回青森県医学検査学会　弘前市　2020 年 6 月	実行委員
	第 2 回細胞検査士受験生のためのスクリーニング講座，青森県細胞検査士会主催，2020 年 11 月，弘前市（中止，問題集作成）	実行委員，事務局
	第 38 回青森県臨床細胞学会　弘前市　2021 年 3 月	実行委員，事務局
宮崎　航	日本内分泌かく乱化学物質学会　第 23 回研究発表会	実行委員
堀江　香代	第 38 回青森県臨床細胞学会　弘前市　2021 年 3 月	実行委員，事務局
	第 2 回細胞検査士受験生のためのスクリーニング講座，青森県細胞検査士会主催，2020 年 11 月，弘前市（中止，問題集作成）	実行委員

３．　学術雑誌の編集委員などとしての活動（雑誌の査読は含まない）

氏名	雑誌名	役職等
藤田　あけみ	日本ストーマ・排泄リハビリテーション学	編集委員
	日本ヒューマンケア科学会誌	編集委員
北宮　千秋	一般社団法人　日本放射線看護学会	副編集委員
大津　美香	保健科学研究	編集委員長
高橋　康幸	Annals of Nuclear Medicine	編集委員
細田　正洋	保健物理	編集委員
	Radiation Environment and Medicine	編集委員
	Journal of Radiation Protection and Research	編集委員
吉野　浩教	Cells 誌	Reviewer Board
松宮　朋穂	Molecular Biology	編集委員
藤岡　美幸	保健科学研究	副編集委員長
丹藤　雄介	膵臓	編集委員
	消化と吸収	編集委員
七島　直樹	Molecular Medicine Reports	編集委員
千葉　満	Experimental and Therapeutic Medicine	編集委員
	Molecular Medicine Reports	編集委員
阿部　由紀子	弘前大学出版会	編集委員
對馬　栄輝	理学療法学	編集委員
加藤　拓彦	作業療法	副編集長

４．　学術雑誌の査読

氏名	雑誌名	備考
木立　るり子	一般社団法人日本放射線看護学会	査読数：1
	一般社団法人日本看護学教育学会	査読数：2
	一般社団法人日本在宅看護学会	査読数：2
	バイオテクノロジー標準化支援協会「医学と生物」	査読数：1
	保健科学研究	査読数：2
	Radiation Environment and Medicine	査読数：1
高橋　徹	日本小児科学会雑誌	
中村　典雄	日本透析医学会雑誌	
	Internal Medicine	
	Clinical Experimental Nephrology	
藤田　あけみ	日本ストーマ・排泄リハビリテーション学会誌	
	日本ヒューマンケア科学会誌	
井瀧　千恵子	日本看護診断学会	査読委員
	日本放射線看護学会	査読委員
	看護科学研究	査読委員

北宮　千秋	一般社団法人　日本放射線看護学会	査読 1
冨澤　登志子	一般社団法人日本放射線看護学会	査読委員
	一般社団法人日本看護診断学会	査読委員
	一般社団法人日本糖尿病看護教育学会	査読委員
則包　和也	保健科学研究	
大津　美香	日本循環器看護学会（和文）	査読委員
高橋　康幸	日本核医学技術学会	
	保健科学研究	
細田　正洋	日本原子力学会誌	
	Water	
	Science of the Total Environment	
	Scientific Reports	
	Radiation Protection Dosimetry	
	Radiation Environment and Medicine	
	Radiation Measurements	
	Peer J	
	Nuclear Science and Technology	
	Journal of Radiation Research	
	Journal of Radiological Protection and Research	
	Journal of Environmental Radioactivity	
	International Journal of Environmental Research and Public Health	
	Environmental Pollution	
	Applied Science	
小山内　暢	RAD Conference Proceedings	2 件
	Radiation Environment and Medicine	1 件
吉野　浩教	International Journal of Molecular Sciences 誌	査読数：4
	Molecular Medicine 誌	査読数：2
	Oncology Reports 誌	査読数：1
	Cancer Management and Research 誌	査読数：1
	Journal of Radiation Research 誌	査読数：3
	Molecular Medicine Reports 誌	査読数：10
	Cancers 誌	査読数：3
	Experimental Therapeutic Medicine 誌	査読数：8
	Biomedical Reports 誌	査読数：1
	Oncology Letters 誌	査読数：8
	Journal of Cellular Physiology 誌	査読数：1
	Artificial Cells, Nanomedicine and Biotechnology 誌	査読数：2
	Molecules 誌	査読数：2
	BMC Cancer 誌	査読数：1
	Oncotargets and therapy 誌	査読数：1
	Clinical and translational medicine 誌	査読数：1
	International Journal of Molecular Medicine 誌	査読数：2
	Cells 誌	査読数：2
	Marine drug 誌	査読数：2
	Frontiers Pharmacology 誌	査読数：3
	Journal of International Medical Research 誌	査読数：2
	Antioxidants 誌	査読数：1
	保健科学研究誌	査読数：1
辻口　貴清	Radiation Environment and Medicine	
	Disaster Medicine and Public Health Preparedness	
嵯峨　涼	Oncology Reports	
	Molecules	
	Molecular Medicine Reports	
	Molecular and Clinical Oncology	
	International Journal of Molecular Medicine	
	Experimental and Therapeutic Medicine	
渡邉　純	日本婦人科腫瘍学会	1 件
	日本臨床細胞学会	1 件

松宮　朋穂	Cellular and Molecular Immunology	1件
	Scientific Reports	2件
	EBioMedicine	1件
	The Lancet Infectious Diseases	1件
	Journal of Molecular Cell Biology	1件
	Plos One	1件
藤岡　美幸	日本食品微生物学会誌	1件
丹藤　雄介	Journal of Gastroenterology	1件
	Frontiers Endocrinology	1件
	Frontiers Public Health	1件
	膵臓	4件
	消化と吸収	2件
葛西　宏介	Developmental and Comparative Immunology	1件
千葉　満	Oncology Letter	1件
	保健科学研究	1件
宮崎　航	The Journal of Veterinary Medical Science	1件
	Archives of Toxicology	1件
	Toxics	2件
	International Journal of Molecular Sciences	1件
山形　和史	保健学研究	3件
山内　可南子	Frontiers in Pharmacology	1件
	Current Microbiology	2件
	Emerging Microbes & Infections	1件
伊藤　巧一	保健科学研究	1件
對馬　栄輝	理学療法学	
髙見　彰淑	理学療法学	
	理学療法研究	
	Journal of Physical Therapy Science	
	Physical Therapy Research	
吉田　英樹	東北理学療法学	
藤田　俊文	理学療法研究	
	東北理学療法学	
髙橋　純平	東北理学療法学	
	Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation	
小山内　隆生	作業療法	
	青森県作業療法研究	
山田　順子	The Journal of Physiological Sciences	
	Frontiers in Molecular Neuroscience	
加藤　拓彦	作業療法	
	青森県作業療法研究	
平川　裕一	作業療法	
	青森県作業療法研究	
上谷　英史	作業療法	
	青森県作業療法研究	
小枝　周平	作業療法	
	青森県作業療法研究	
田中　真	青森県作業療法研究	
佐藤　ちひろ	青森県作業療法研究	
髙橋　芳雄	Journal of Child Psychology and Psychiatry	1報
	Journal of Psychiatric Research	1報
足立　匡基	PLOS ONE	1報

5．　国や地方自治体などにおける審議会・委員会委員としての活動

氏名	件名	役職等
木立　るり子	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会企画委員会	企画委員長
中村　典雄	青森県糖尿病対策推進会議	委員
	青森県糖尿病対策協議会	委員
	日本腎臓病協会	青森県代表
	青森県指定難病審査会	委員
	青森県障碍者福祉専門分科会審査部会	委員

井瀧　千恵子	被ばく医療認定員会	委員
北宮　千秋	青森県立黒石高等学校専攻科看護科	評議員
細田　正洋	青森県原子力センター環境放射線調査研究検討会	委員
吉野　浩教	文部科学省　科学技術予測センター	専門調査員
山形　和史	青森県社会保険診療報酬請求書審査委員会	審査委員
丹藤　雄介	厚生労働省健康局管理栄養士国家試験委員会	委員
	弘前市地域包括支援センター運営協議会	委員
	弘前市地域密着型サービス運営委員会	委員
吉岡　治彦	2020 年度青森県生活習慣病検診従事者講習会（子宮がん・肺がん検診細胞診従事者講習会），2021 年 3 月	事務局
藤田　俊文	弘前市地域ケア会議	委員
和田　一丸	青森県国民健康保険診療報酬審査委員会	委員
平川　裕一	青森県介護予防市町村支援委員会	委員
	青森県あおもり高齢者すこやか自立プラン推進協議会	委員
	公益社団法人青森県医師会健やか力推進センター推進協議会	委員
栗林　理人	青森県教育委員会　復職審査会	委員長
	青森県弘前児童相談所	嘱託医
	弘前市教育支援委員会	専門委員
	平川市教育支援委員会	専門委員
	平川市いじめ防止対策審議会	審議委員
	藤崎町教育支援委員会	専門委員
	藤崎町いじめ防止対策審議会	審議委員
高橋　芳雄	平川市教育支援委員会	専門委員
	弘前市保育所巡回指導	巡回指導員
足立　匡基	平川市教育支援委員会	専門委員
	平川市いじめ防止対策審議会	審議委員
	藤崎町いじめ防止対策審議会	審議委員
	弘前市保育所等巡回サポート事業	巡回支援員

６．　新技術の創出など新産業基盤の構築への寄与（特許取得も含む）

氏名	件名	役職等
冨澤　登志子	A.O.Light 開発	
千葉　満	認知機能障害のバイオマーカー及びその検出薬，被験者の認知機能障害を検査する方法，認知機能障害の治療又は改善手段を被験者に提示する方法，並びに，認知機能障害の治療又は改善物質のスクリーニング方法（公開番号 WO 2021/132725 A1）	共同開発者

７．　産学共同事業への参加，技術移転・相談

氏名	件名	役職等
冨澤　登志子	共同研究（株式会社 NESI）	
	共同研究（光城精工）	
松宮　朋穂	弘前大学 COI	ゲノムメディカルリサーチコーディネーター
葛西　宏介	スノーデン株式会社との共同研究	研究代表者
平川　裕一	弘前大学 COI	共同研究者
	株式会社ケアスマイル青森／介護事業における利用者の日常生活の向上を目指した介入方法の開発	共同研究者
上谷　英史	弘前大学 COI	共同研究者
	株式会社ケアスマイル青森／介護事業における利用者の日常生活の向上を目指した介入方法の開発	共同研究者

８．　講演（大学での授業，研究発表を除く。一般市民の生涯学習等への寄与を含む。）

氏名	件名	開催場所，年月
木立　るり子	公社）青森県看護協会認定看護管理者教育課程ファーストレベル「ヘルスケアシステム論Ⅰ」	県民福祉プラザ，2020 年 6 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」在宅看護学概論	県民福祉プラザ，　2020 年 9 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」家族看護論	県民福祉プラザ，2020 年 10 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」コンサルテーション論	県民福祉プラザ，2020 年 11 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」実習報告会ファシリテーター	県民福祉プラザ，2020 年 11 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」事例検討会１　ファシリテーター	県民福祉プラザ，2020 年 11 月
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会」事例検討会２ファシリテーター	県民福祉プラザ，2020 年 12 月
高橋　徹	教員免許状更新講習	弘前大学，2020/12/20
中村　典雄	第 459 回八戸地区病院薬剤師会薬学例会	八戸市，2021 年 2 月 18 日
	令和 2 年度五所川原市糖尿病性腎症重症化予防支援事業	五所川原市，2021 年 3 月 2 日
藤田　あけみ	公社）青森県看護協会　青森県保健師助産師看護師実習指導者講習会　実習指導の評価	県民福祉プラザ 9 月 13 日，9 月 18 日，9 月 24 日，9 月 25 日
	公社）青森県看護協会「病院からつなぐ地域包括ケア看護実践者育成研修会―①看護教育学，②実習指導の基本	アピオ青森 11 月 5 日
	教員免許状更新講習「子どもの急変時の対応」（講師）	弘前大学大学院保健学研究科　2021 年 1 月 5 日
	弘前大学医学部附属病院看護部　指導者研修会①対象者の理解，②教育方法	弘前大学医学部附属病院 2021 年 3 月 2 日
井瀧　千恵子	教員免許状更新講習「生活習慣と健康」（講師）	弘前大学教育学部 2020 年 12 月
	原子力災害医療中核人材育成研修（講師）	弘前大学大学院保健学研究科　2021 年 2 月
北宮　千秋	教員免許状更新講習「放射線とリスクコミュニケーション」（講師）	令和 2 年 12 月
冨澤　登志子	2020 看護診断セミナー　初級コース	2020.5.30 オンライン
	2020 看護診断セミナー　中級コース	2020.7.18　オンライン
	2020 看護診断セミナー　上級コース	2020.9.19　オンライン
則包　和也	公益社団法人 青森県看護協会実習指導者講習会　実習指導の方法（精神）講師	青森県民福祉プラザ 2020 年 9 月
	第４回　看護のための認知行動療法研究会シンポジウム「精神を看護することに誇りを持つ　ーそのためにー」	弘前大学にてオンラインでの開催　2020 年 9 月
	弘前大学附属病院初任者研修　計２回	弘前大学附属病院　１回目 9 月，２回目　12 月
	第 20 回日本認知療法・認知行動療法学会シンポジウム「地域精神障害者を支えるための CBT を活かしたケア」	Web 開催　2020 年 11 月
	教員免許状更新講習　　メンタルヘルスの理解	弘前大学　2020 年８月
大津　美香	公益社団法人青森看護協会　保健師助産師看護師実習指導者講習会　実習指導の方法（老年）	リンクステーションホール青森，2020 年 9 月
	弘前大学医学部附属病院看護研究研修会	オンライン開催，2020 年 10 月
土屋　涼子	教員免許状更新講習「子どもの急変時の対応」	弘前大学大学院保健学研究科　2021 年 1 月 5 日
太田　一輝	教員免許状更新講習「子どもの急変時の対応」（講師）	令和 3 年 1 月 5 日
高橋　康幸	なにわ RI セミナー	Web，令和 2 年 12 月
	青森県診療放射線技師学術大会	Web，令和 3 年 10 月
細田　正洋	地域と寄り添う　～浪江町とともに～ 事故直後の甲状腺被ばく調査と環境放射線モニタリング	青森県弘前市，2021 年 3 月
吉野　浩教	金沢大学　新学術創成研究機構　異分野融合セミナー招待講演	金沢大学（web），2021 年 2 月
辻口　貴清	青森県委託事業　青森県原子力災害医療研修　講演	青森県青森市，2020 年 9 月
渡邉　純	「癌とは」大学模擬講義	北海道立岩内高校　2020 年 12 月 3 日

丹藤　雄介	津軽地域ケアネットワーク交流会 2021　講演第一部「持続可能なケアネットワーク構築のために次世代を担う人材をどう育てるか？」	青森県弘前市・弘前市医師会館　2021 年 10 月 16 日
	青森県歯科医療安全管理体制推進事業研修会　「COVID19 と生活習慣病」	青森県弘前市・弘前文化センター　2021 年 3 月 6 日
	青森県栄養士会生涯教育研修会「栄養素の消化と吸収」	青森県青森市・リンスステーションホール青森 2020 年 9 月 12 日
尾田　敦	青森中央学院大学ボウリング部第 1 回「コンディショニング研修会」	青森市，2020 年 2 月
	青森中央学院大学ボウリング部第 2 回「コンディショニング研修会」	青森市，2020 年 3 月
對馬　栄輝	鹿児島県理学療法士協会　理学療法における臨床研究について	WEB 開催，2020 年 6 月
	糖尿病トランスレーショナルリサーチ研究会　疫学研究における統計的手法～多変量解析の基礎	弘前市，2020 年 6 月
	株式会社 ALTURA　臨床研究・統計の基礎と臨床応用	WEB 開催，2020 年 8 月
	株式会社 ALTURA　データサイエンスを理学療法に導入「論文・研究」における大切なポイント	WEB 開催，2020 年 9 月
	リハビリテーションリサーチメソッド研究会　成績の要因分析	WEB 開催，2020 年 9 月
	京都大学運動機能研究会　股・膝関節疾患に対する理学療法の考え方と実際	WEB 開催，2020 年 11 月
	青森県理学療法士会青森支部　統計入門・臨床での研究の活用法	WEB 開催，2021 年 1 月
	北海道理学療法士会　日々の疑問からどう研究に繋げるのか	WEB 開催，2021 年 2 月
	リハビリテーションリサーチメソッド研究会　多重ロジスティック回帰分析	WEB 開催，2021 年 2 月
	リハビリテーションリサーチメソッド研究会　重回帰分析	WEB 開催，2021 年 2 月
吉田　英樹	社会福祉法人抱民舎部内研修会「筋トレの正しい理解」	弘前市，2020 年 12 月
藤田　俊文	介護支援専門員研修会	弘前市，2020 年 12 月
平川　裕一	一般社団法人青森県作業療法士会現職者選択研修　「身体障害領域の基礎知識」講師	弘前市，2020 年 10 月 4 日
	一般社団法人青森県作業療法士会「臨床実習指導者講習会」講師	弘前市，2021 年 2 月 20 日～21 日
	一般社団法人青森県作業療法士会　「地域作業療法スキルアップ研修～地域ケア会議と MTDLP～」ファシリテーター	弘前市，2020 年 9 月 27 日
	一般社団法人青森県作業療法士会　「地域作業療法スキルアップ研修～地域ケア会議における助言者～」ファシリテーター	弘前市，2020 年 9 月 27 日
	社会福祉法人青森県社会福祉協議会「介護・福祉用具体験講座“車いす～基本的介助と多様な車いす～”」講師	弘前市，2020 年 7 月 10 日
	中泊町　地域介護予防活動支援事業　講師	中泊町，2020 年 9 月 2 日～2021 年 3 月 29 日（計 31 回，うち 18 回は COVID-19 の影響により中止）
	中泊町　健康づくりフォーラム　講師	中泊町，2020 年 10 月 31～11 月 1 日
	中泊町　なかどまりアグリヘルスアップ事業　講師	中泊町，2020 年 1 月 15～16 日
	平川市　介護予防普及啓発事業　講師	平川市，2020 年 9 月 29 日～2021 年 3 月 10 日（計 8 回）
	鰺ヶ沢町　地域リハビリテーション活動支援事業　講師	鰺ヶ沢町，2020 年 12 月 7 日～2021 年 1 月 26 日（計 3 回，うち 2 回は COVID-19 の影響により中止）
	平川市「生活支援ボランティア養成講座」講師	平川市，2020 年 12 月 17 日
	社会福祉法人阿闍羅会「車いす利用者に対する介助方法等について」講師	大鰐町，2020 年 11 月 26 日（COVID-19 の影響により中止）

上谷　英史	一般社団法人青森県作業療法士会現職者選択研修「生活期・終末期の作業療法」講師	弘前市，2020 年 10 月 4 日
	一般社団法人青森県作業療法士会「地域作業療法スキルアップ研修～地域ケア会議における助言者～」講師	弘前市，2020 年 9 月 27 日
	一般社団法人青森県作業療法士会　「臨床実習指導者講習会」講師	弘前市，2021 年 2 月 20 日～21 日
小枝　周平	一般社団法人青森県作業療法士会現職者共通研修「作業療法の可能性」講師	五戸町，2020 年 9 月 13 日
	一般社団法人青森県作業療法士会現職者共通研修「作業療法生涯教育概論」講師	弘前市，2020 年 10 月 11 日
	一般社団法人青森県作業療法士会　「臨床実習指導者講習会」講師	弘前市，2021 年 2 月 20 日～21 日
田中　真	六ケ所村職員ゲートキーパー講座	六ケ所村，2020 年 8 月 7 日
	平川市傾聴ボランティアフォローアップ講座	平川市，2020 年 8 月 20 日
	五所川原市傾聴ボランティアフォローアップ講座	五所川原市，2020 年 9 月 18 日
	つがる市職員ゲートキーパー講座	オンライン，2020 年 10 月 2 日
	五所川原市職員ゲートキーパー講座	オンライン，2020 年 10 月 7 日
	弘前市職員ゲートキーパー講座	オンライン，2020 年 10 月 28 日
	十和田市職員ゲートキーパー講座	オンライン，2020 年 11 月 18 日
	平内町メンタルヘルス講座	オンライン，2020 年 12 月 25 日
	鶴田町傾聴講座	オンライン，2021 年 2 月 5 日
	藤崎町傾聴ボランティアフォローアップ講座	オンライン，2021 年 2 月 4 日
佐藤　ちひろ	生体応答科学研究センターサロン「ニューロリハビリテーション研究紹介～機能回復は脳回復・脳可塑性は可能性～」	弘前大学，2020 年 9 月
栗林　理人	青森県社会教育センター主催の講演会	2020 年 8 月
	青森県立若葉養護学校との連携会議	年 3 回
	青森県総合学校教育センター事例検討会	年 2 回
松田　侑子	鹿角市子育てサポーター養成講座　講師	鹿角市，2020 年 12 月
	青森県栄養士研究教育職域会研修会　講師	オンライン，2021 年 3 月
足立　匡基	青森市養護教諭会秋季全体研修会	2020 年 11 月
	弘前市・弘前大学情報交換会 （心のサポートアンケートの進捗について）	2020 年 11 月
	弘前市立石川中学校校内研修会	2021 年 1 月
	弘前市立第三大成小学校校内研修会	2021 年 2 月
	国立市立国立第二中学校校内研修会	2021 年 3 月

９．　国際交流への貢献（協定・覚書締結先や国際共著論文のための活動など）

氏名	件名	備考
冨澤　登志子	台北医学大学　3 年次科目「災害看護」　非常勤講師 (2020.12.4)	
	TMU＆Hirosaki University Webinar “Nursing Clinical and Educational Environment Mnagement”(2020.8.6)	
堀江 香代	国際共著	2 件

１０．その他（ボランティア，マスコミによる公表など）

氏名	件名	備考
木立　るり子	環境省リスクコミュニケーション事業に係る放射線リスクコミュニケーション相談員支援センター運営委員会	出席回数 3 回
	環境省リスクコミュニケーション事業に係る４者会議（環境省，原安協，浪江町，本学）	出席回数 2 回
北宮　千秋	浪江町職員への健康相談とリスクコミュニケーション事業	8 回開催
冨澤　登志子	A.O.Light 開発　記者会見(NHK，RAB，朝日新聞，共同通信，東奥日報，陸奥新報)(2021.3.29)	

則包　和也	環境省リスクコミュニケーション事業に係る活動（おしゃべり会,）	1回　浪江町
	浪江町職員への健康相談とリスクコミュニケーション事業	3回　浪江町
工藤　幸清	食品の放射性物質濃度学ぶ（サロン「なみっぷる」）講師	福島民報（2021/9/21 掲載）
細田　正洋	量子科学技術研究開発機構	協力研究員
	東京都立大学	客員准教授
細川　翔太	食品の放射性物質濃度学ぶ（サロン「なみっぷる」）講師	福島民報（2021/9/21 掲載）
辻口　貴清	COVID-19 に係る弘前大学医学部附属病院 DMAT としての活動	弘前保健所，青森保健所等での DMAT 活動 2020 年 10 月から継続中
	内閣府主催全国原子力防災訓練　参画	通信訓練@弘前大学本部ロジ，2020 年 12 月
渡邉　純	東奥日報 2021 年 1 月 13 日付 がん早期発見の専門資格「細胞検査士」弘大保健学科 9 名全員合格	
吉岡　治彦	「2020　LOVE49」，青森県臨床細胞学会細胞検査士会主催，子宮頸がん健診推進活動，子宮の日，2020 年 5 月，弘前市（コロナ禍のため中止。資料を関係大学，施設へ配布となる）	事務局
尾田　敦	第 46 回青森県春季陸上競技選手権大会・兼青森県高校総体陸上競技代替競技会　・兼日清食品カップ青森県小学生陸上競技交流大会　トレーナー活動	
	第 1 回あおもり夏季チャレンジ記録会　トレーナー活動	
	青森県高等学校新人陸上競技対校選手権大会・兼第 25 回東北高等学校新人陸上競技選手権大会青森県予選会　トレーナー活動	
	青森県中学校新人陸上競技選手権大会　トレーナー活動	
	あおもり秋季チャレンジ記録会　トレーナー活動	
	夏季青森県高等学校野球大会（甲子園大会県予選代替大会）　トレーナー活動	
	秋季青森県高等学校野球選手権大会弘前地区予選　トレーナー活動	
	秋季青森県高等学校野球選手権大会・兼第 73 回秋季東北地区高等学校野球大会予選会　トレーナー活動	
髙見　彰淑	浪江町復興支援活動	
藤田　俊文	夏季青森県高等学校野球大会（甲子園大会県予選代替大会）　トレーナー活動	
	秋季青森県高等学校野球選手権大会弘前地区予選　トレーナー活動	
	秋季青森県高等学校野球選手権大会・兼第 73 回秋季東北地区高等学校野球大会予選会　トレーナー活動	
髙橋　純平	浪江町職員への健康相談とリスクコミュニケーション	
	弘前大学浪江町復興支援室　健康・放射線相談出張窓口「おしゃべり会」	
石川　大瑛	夏季青森県高等学校野球大会（甲子園大会県予選代替大会）　トレーナー活動	
	秋季青森県高等学校野球選手権大会弘前地区予選　トレーナー活動	
加藤　拓彦	社会福祉法人　花　評議員	
平川　裕一	中泊町　なかどまり健康づくりフォーラム　健康度測定員	中泊町，2020 年 10 月 31～11 月 1 日
	ひろさき健幸増進リーダー会　アドバイザー	弘前市，2020 年 7 月 7 日～2021 年 3 月 23 日（計 10 回）
	弘前大学「岩木健康増進プロジェクト　プロジェクト健診」体力計測員	弘前市，2020 年 9 月 17 日～9 月 25 日（計 2 回）
上谷　英史	弘前大学「岩木健康増進プロジェクト　プロジェクト健診」体力計測員	弘前市，2020 年 9 月 17 日～9 月 25 日（計 2 回）
小枝　周平	弘前市 5 歳児発達健診　運動検査	
	弘前市 3 歳児発達健診　運動・視知覚検査	
	弘前大学生活協同組合　理事	
田中　真	あおもりいのちの電話相談員養成	2020 年 5 月～2020 年 12 月
佐藤　ちひろ	認知症サポーター養成講座	弘前市，2020 年 7 月 16 日，11 月 30 日（計 2 回）

松田　侑子	青森県庁こころの健康相談員	
	青森県障害者相談センター判定員	
	青森県スクールカウンセラー	
高橋　芳雄	【プレスリリース】子どものインターネット依存状態についての研究報告	東奥日報掲載（2020 年 9 月 9 日）
足立　匡基	プレスリリース「一般人口を対象とした子どもの自殺念慮・企図を含む抑うつ症状の現況」（9 月 30 日）	報道機関(日時) 東奥日報(10/1)，朝日新聞(10/3)，陸奥新報(10/4)，教育新聞(10/2)，大学ジャーナル(10/7)，共同通信(10/15)，産経新聞(10/15)，東京新聞(10/15)，北海道新聞(10/15)，goo ニュース(10/15)，沖縄タイムス(10/15)，上毛新聞(10/15)，西日本新聞(10/15)，大阪日日新聞(10/15)，神戸新聞NEXT(10/15)，中国新聞(10/15)，福井新聞(10/15)，大分合同新聞(10/15)，livedoor NEWS(10/15)，日刊スポーツ(10/16)，河北新報(10/15)，デーリー東北(10/20)
	プレスリリース「弘前市内公立小中学校に通う児童生徒の心の健康に対する 新型コロナウイルス感染拡大の影響について」（3 月 15 日）	東奥日報(3/16)，陸奥新報(3/16)，教育新聞(3/18)
玉井　康之	東日本大震災の被災地である福島県の学校に通学中の生徒へのメンタルサポート	
	弘前大学医学部附属病院で新型コロナ肺炎への対応を行っている医療従事者のメンタルサポート	
	青森県内でクラスターが発生した医療機関で新型コロナ肺炎への対応を行っている医療従事者のメンタルサポート	

社会活動等の状況２

（２）中期計画の進捗状況

※【 】内の数字は本学の第３期中期計画の番号を示す。中期計画の全容は次のウェブサイトを参照。
＜中期目標・中期計画一覧表　国立大学法人弘前大学＞
https://www.hirosaki-u.ac.jp/wordpress_data/soshiki/gyomu/3ki-ichiran4.pdf
※文中のアルファベットはそれぞれ各専攻及び学科を示す。Ｎ＝看護学専攻，Ｒ＝放射線技術科学専攻，Ｔ＝検査技術科学専攻，ＰＴ＝理学療法学専攻，ＯＴ＝作業療法学専攻，Ｐ＝心理支援科学科

【26】地域における人口減少や健康問題の克服，健康長寿の実現という地域課題の解決と，QOL（生活の質）の向上を図る研究に取り組む。さらに，豊富な食糧資源や観光資源といった地域の強みを活かし，食，健康や福祉の分野に関する文理融合的な地域志向型多領域研究を進める。

○津軽地域のグループホームの管理者と連携し，アルツハイマー型認知症高齢者の QOL の向上を図る研究に取り組んだ。「認知症高齢者の心理的ニーズの特徴」を明らかにし，QOL 向上のための支援方法を検討した。研究成果は 2020 年 9 月 12 日に開催された第７回保健科学研究発表会において演題発表を行った。【Ｎ】(新規)

○子どもたちの心の健康を定点観測し，早期支援に繋げる仕組みの開発を目指し，弘前市内全小中学校(小学校 35 校，中学校 16 校)を対象とした『心のサポートアンケート』を実施した。2020 年度の調査は，新型コロナウイルス感染症拡大の影響を鑑み，子どもたちの心の健康状態の継時的な推移をより詳細に観察することを目的に，2020 年７月，12 月，2021 年３月に本人を対象とした調査，2020 年７月に保護者を対象とした調査を実施した。心の健康調査結果について，保護者，教員に対するフィードバックを行った。各回の参加者はそれぞれ，７月: 11,240 人(参加率 98.9 %)，12 月: 11,175 人(参加率: 97.8 %)，３月: 9864 人（参加率: 98.0 %; ※中学３年生が対象外となったため，前２回に比べ総数が少なくなっている)。また保護者調査の参加者は 9759 人(参加率: 85.8 %)であった。保護者調査のフィードバック資料を元に，結果をプレスリリースしたところ，東奥日報，陸奥新報，教育新聞から取材依頼があり，記事が掲載された。【Ｐ】(継続)

【28】原子力関連施設を擁する地域特性に鑑み，海外及び国内機関との連携の下，全学的な「放射線科学」及び「被ばく医療」に係る教育・研究の国際拠点を構築し，特にアジア諸国を中心に国内外における国際的な視野を有する高度専門職業人を育成する。さらに，東日本大震災後の弘前大学の果たしてきた様々な社会貢献をもとに，当該分野におけるリーダーシップを発揮し，国の被ばく医療機関として放射線事故等有事の際には，診療面も含め世界的な貢献を果たす。

＜県内外関連機関と連携した人材育成＞
○青森県内のみならず全国の医療機関に所属する看護職及び診療放射線技師を対象とした「被ばく医療研修」のオンライン開催に向け，教材や VR の準備を進めた。(継続)

＜国際機関への協力＞
○細田正洋講師（現教授）が IAEA に設置された，放射線災害緊急時の準備・対応のための国際教育訓練ネットワーク（iNET-EPR）の委員に正式登録された（2020 年６月)。(新規)

＜国際拠点化促進事業＞
○2017 年度から，弘前大学被ばく医療連携推進機構に係る各活動の進捗状況の確認のほか，本学における機構の在り方等について国際的な視野での評価を得るため，フランス原子力庁環境放射能部門や国際がん研究機関の研究者を有識者として迎え，「国際アドバイザリーボード」を開催している。今年度は COVID-19 感染拡大の影響により紙上開催となった（2021 年３月)。アドバイザリーボードでは，海外の教育・研究機関との連携や，国際的な共同研究プロジェクト件数及び学術論文数の増加による情報発信の積極性が評価されたほか，実技演習を含む研修会のオンライン開催への速やかな移行が高く評価されており，これを受けて教育担当部門は VR 学習システムの開発を開始した。(継続)

【36】本学の有する専門的かつ幅広い知的資産を活用して，社会人の学び直しや地域の分野別リーダー的人材の育成等，社会の多様なニーズに応じた教育機会を提供する。

○地域住民の健康づくり活動への支援【ＯＴ】（継続）
・中泊町地域介護予防活動支援事業において，町民の健康づくり活動を支援した（11 回，17 回は COVID-19 の影響により中止）。また，なかどまりアグリヘルスアップ事業，なかどまり健康づくりフォーラムにおいて町民の健康づくり活動を支援した（４回）。
・平川市介護予防普及啓発事業において，市民の健康づくり活動を支援した（８回）。また，「生活支援ボランティア養成講座」の研修を実施した（2020 年 12 月 17 日，受講者 20 名）。
・鰺ヶ沢町地域リハビリテーション活動支援事業において，町民の健康づくり活動を支援した。

○地域住民の健康づくりを支援する人材の育成【ＯＴ】（継続）
・平川市「生活支援ボランティア養成講座」の研修を実施した（2020 年 12 月 17 日，受講者 20 名）。
・ひろさき健幸増進リーダー会の組織運営に関して助言した（20 回）。
・青森県内作業療法士を対象に，地域作業療法スキルアップ研修会を実施した（2020 年９月 27 日，受講者 20 名）。
・住宅改修・福祉用具アドバイザー事業において，ケアマネージャーに対して住宅改修と福祉用具の導入に関して助言した（2021 年１月 20 日，2021 年３月 26 日）。

○高齢者・障がい者の自立支援に資する人材の育成【ＯＴ】（継続）
・青森県社会福祉協議会からの依頼を受け，弘前市内高校３年生を対象に，「自立支援，車いす～基本的介助と多様な車いす～」の研修を実施した（2020 年７月 10 日，受講者 14 名）。

○社会人の学び直しへの支援【ＯＴ】（継続）
・青森県作業療法士会からの依頼を受け，県内作業療法士を対象に認知症サポーター養成講座を開講したほか，青森県内作業療法士を対象に現職者向けの研修を実施した（2020 年９月 13 日　受講者 13 名，2020 年 10 月４日　受講者 12 名，2020 年 10 月 11 日　受講者 29 名）。

（２）特記事項

○保健学科看護学専攻の卒業生の県内就職率の向上特に附属病院への就職者を増加させるために，附属病院と共同で，ガイダンス等で奨学金制度や就職支度金制度について周知した。附属病院への就職者は平成 30 年度卒 8 名→令和元年度卒 13 名→令和２年度卒 15 名と増加しており，地域医療へ貢献している。（継続）

○国際共同研究事業を含む研究協力や，教育・研究施設の相互利用，教職員・学生の交流促進を目的とし，タイ・チェンマイ大学医療科学部と交流協定を締結した（2021 年３月 29 日締結）（新規）

○育児中の母親を対象とした講座の開催【Ｎ】
地域で子育てをしている母親が心身ともに健やかに生活していくための一助とすること，講座の開催を通じて教育・知的資源を地域社会へ還元すると同時に，地域の現状やニーズを把握する機会とすることを目的に，育児中の母親を対象とした「リフレッシュ講座」を開催した。2020 年度は，県内の子育て支援センター等において，計７回（延べ参加者数 57 名）実施した。（継続）

○看護学専攻領域 木立 るり子 教授が青森県功労者知事表彰を受賞した（2020 年６月 20 日）。（新規）

○被ばく医療総合研究所と保健学研究科が実施しているインドネシア原子力庁との国際共同研究の成果の一部が環境化学分野のトップジャーナルの一つである Science of the Total Environment 誌に掲載された。（新規）

○作業療法学専攻では，青森県内養成校および青森県作業療法士会との共催で，158 名の作業療法士に対して，臨床実習指導者講習会を実施した（2021 年２月 20-21 日　受講者 47 名）。【ＯＴ】（継続）

○新型コロナウイルス感染症流行下における県職員への心理支援として，県内の新型コロナウイルス関連の対応にあたる県職員への相談活動や，県職員全員を対象としたセルフケアに関するオンデマンド型のセミナーを実施した（セミナー実施期間：2021 年２月８日～２月 26 日，受講者 2707 名）。【Ｐ】（新規）

○弘前市が主催する保育所等巡回事業に医学研究科子どものこころの発達研究センターのスタッフとともに巡回員として参画した。当事業は保育園やこども園に通う園児の発達や行動上の問題について巡回員が相談を受け，状況に応じたアドバイスを行う事業であり，当事業への参画を通して地域の保健福祉に貢献した。【Ｐ】（新規）

○青森県発達障害支援センターと連携して，地域の神経発達障害支援に関わる専門家を対象に，発達に関するアセスメントツールの実施と活用についての研修会を行った。【Ｐ】（新規）

○東日本大震災の被災地である福島県の学校に通学中の生徒へのメンタルサポートを，面接を用いて行い，学校教員と共有した（実施期間　2020 年８月 31 日，参加者教員９名，生徒 14 名；2020 年９月７日，参加者教員９名，生徒 40 名）。【Ｐ】（新規）

○弘前大学医学部附属病院で新型コロナ肺炎への対応を行っている医療従事者のメンタルサポートを行った。（実施期間　2020 年 11 月～12 月，参加者延べ 53 名）【Ｐ】（新規）

○青森県内でクラスターが発生した医療機関で新型コロナウイルス感染症への対応を行っている医療従事者のメンタルサポートを行った（実施期間　2021 年３月，参加者 16 名）。【Ｐ】（新規）

○神戸大学大学院人間発達環境学研究科集中講義「精神医学特論１」「精神医学特論２」（保健医療分野に関する理論と支援の展開）として，統合失調症スペクトラム，気分障害，不安障害群，パーソナリティ障害と行動異常，神経発達症，食行動障害および摂食障害群，認知症，精神療法，身体療法，薬物療法，精神医療と法制度，緩和ケア，リエゾン・コンサルテーション精神医学についてその定義，概念，分類，治療法，具体的症例提示を行って解説した。（実施期間　2020 年８月 24～26 日，受講者　大学院生 12 名）【Ｐ】（新規）

○理学療法学専攻では青森県アスレティックトレーナーの会と連携し，下記のスポーツ大会におけるトレーナー活動を実施した。【ＰＴ】（継続）

＜コンディショニング＆救護＞

・2020 年度第 46 回青森県春季陸上競技選手権大会・兼青森県高校総体陸上競技代替競技会・兼日清食品カップ青森県小学生陸上競技交流大会（2020 年７月 18 日～19 日，23 日～24 日，新青森県総合運動公園陸上競技場：カクヒログループアスレチックスタジアム）
・2020 年度第１回あおもり夏季チャレンジ記録会（2020 年８月１日，新青森県総合運動公園陸上競技場：カクヒログループアスレチックスタジアム）
・第 45 回青森県高等学校新人陸上競技対校選手権大会・兼第 25 回東北高等学校新人陸上競技選手権大会青森県予選会（2020 年９月 11 日～13 日，新青森県総合運動公園陸上競技場：カクヒログループアスレチックスタジアム）
・第 30 回青森県中学校新人陸上競技選手権大会（2020 年 10 月 3 日～4 日，新青森県総合運動公園陸上競技場：カクヒログループアスレチックスタジアム），2020 年度あおもり秋季チャレンジ記録会（2020 年 10 月 11 日，新青森県総合運動公園陸上競技場：カクヒログループアスレチックスタジアム）

＜救護＞

・2020 年度夏季青森県高等学校野球大会（甲子園大会県予選代替大会）（2020 年７月 14 日～28 日，はるか夢球場（弘前市））
・2020 年度秋季青森県高等学校野球選手権大会弘前地区予選（2020 年９月５日～９月 13 日，はるか夢球場（弘前市））
・2020 年度秋季青森県高等学校野球選手権大会・兼第 73 回秋季東北地区高等学校野球大会予選会（2020 年９月９日～９月 28 日，はるか夢球場（弘前市）・青森市営球場（青森市）・青森県営球場（青森市））

＜コンディショニング：チームトレーナー＞

・青森中央学院大学ボウリング部チームトレーナー

社会活動の自己評価

評価できる点

○本大学の周辺地域の施設管理者（グループホーム等）と連携し，アルツハイマー型認知症高齢者への効果的なアプローチについて考察した研究は，大学と地域の連携を深める取り組みであり，高く評価できる。

○青森県内スポーツ大会でのトレーナー活動において専門性を生かした活動が積極的に実施・継続されており，高く評価できる。

○地域を基盤とした活動が展開され，地域の専門家のスキルアップや医療・教育に関する部分に教員の専門性が存分に発揮されており，高く評価できる。

○国際誌の査読や国際的な機関の委員への就任など，国際的な活動が増えている点は高く評価できる。

○新型コロナウイルス感染症流行下において，その対応に当たっている県職員や医療従事者に対してセルフケアに関するセミナーや心理相談を行うなど，コロナ禍における心理支援活動に積極的に取り組み，貢献している点が評価できる。

改善を要する点

○文理融合的な地域志向型多領域研究を推進するためにも、保健学科および心理支援学科全体での取り組みの検討に加え、自治体との連携や協働活動を検討してほしい。

○社会貢献事業が継続的な活動となるよう、仕組みづくりが必要と考える。

○各種事業を基盤として、外部資金や特許の獲得、若手研究者育成につなげてほしい。

○教員が多くの社会貢献に関与していることから、研究科としても、もっと世間にアピールする手段を構築することも必要ではないかと考える。

その他

○検査技術科学専攻として社会活動等に関する内容が，Ⅰ教育活動の状況２　「【６】地域の人材や資源を活用した実践的な授業を拡充し，地域志向科目を 200 科目以上開講する。地域の社会人の学び直しのための教育プログラムを開発する。」の項目欄に 2 つ含まれており，青森県地域内における社会人臨床検査技師と学部学生の合同研究会，合同研究会は社会活動の一貫としても，特記すべきことである。

○新型コロナウイルスによる影響による影響に対して，迅速に対応できた点は特筆すべき点である。

巻末資料

研究業績説明書

法人番号	8	法人名	弘前大学	学部・研究科等番号	6	学部・研究科等名	保健学研究科	専任教員数	〔人〕	提出できる研究業績数の上限	〔件〕

1．学部・研究科等の目的に沿った研究業績の選定の判断基準【400字以内】

本学部・研究科は、わが国における保健医療の担い手の育成及びその教育と研究を推進するという目的を有しており、看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、理学療法士及び作業療法士の５つの医療専門職をベースにした看護学、放射線技術科学、生体検査科学、総合リハビリテーション科学の４つの領域からなるという特色がある。従って、各々の領域における独創的な研究のみならず、領域横断的・学際的な研究を通してその成果を社会に還元し、人類の健康と福祉の向上に寄与するという点が最も重要であると考えている。また、研究科に「被ばく医療コース」、「放射線看護高度看護実践コース」を設置し、緊急被ばく医療に対応できる医療専門職の養成を目指しているため、放射線科学や放射線リスクコミュニケーションに関する教育研究の推進に力を入れている。これらを踏まえ、保健医療全般及び放射線被ばく医療への貢献度という判断基準で研究業績を選定している。

2．選定した研究業績

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	社会、経済、文化的意義	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
1	58080	高齢者看護学および地域看護学関連	身体疾患を合併する認知症高齢者の治療・ケアの継続に向けた効果的な看護援助方法・内容の開発に関する研究 身体疾患を合併する認知症高齢者が安心して入院中～退院後の在宅療養生活を送ることを目指して、治療・ケアにおける効果的な援助方法・内容をプロトコルやチェックリストにして日々の看護実践に即役立てられるようにしたものである。	S	S	【学術的意義】 (1)は医療・看護・介護専門職に向けた認知症関連のシリーズ書籍である。がん、腎不全、心不全等の身体疾患を有する認知症高齢者に有効な看護援助内容について、これまでの研究成果を踏まえてプロトコルを作成した。(2)は血液透析の時間経過に伴う認知症高齢者の言動の変化と苦痛の評価を行い、血液透析を受ける認知症高齢者が安全・安楽に治療を受けるための援助方法・内容を図式化した。老年看護学に特化した国内の学術雑誌に原著論文として掲載された。(3)は臨床看護師向けの呼吸・循環器系の看護実践に役立つ看護ケアが掲載されている専門雑誌である。研究成果が認められ依頼を受けて寄稿した。認知症のある心不全患者が在宅療養生活を継続するために有用な援助方法・内容に関するチェックリストを作成した。 【社会、経済、文化的意義】 身体疾患を合併する認知症高齢者が安心して入院中～退院後の在宅療養において治療・ケアを受けるために有効な援助方法・内容を示したものである。効果的な治療・ケアの継続による再入院の予防（経済的意義）やQOL向上（文化的意義）、医療・看護・介護専門職者の援助方法の平準化（社会的意義）に期待できると考える。			(1)	高山成子，大津美香，久米真代	認知症plus身体疾患	日本看護協会出版会		pp.69-83, pp.122-134	2020.9		S
									(2)	久米真代，高山成子，磯光江，大津美香，渡辺陽子	血液透析の時間経過に伴う認知症高齢者の言動の変化と苦痛の評価	日本老年看護学	25(1)	pp.57-67	2020.7		S
									(3)	大津美香	認知症のある心不全患者の療養支援	日総研出版　呼吸・循環・脳実践ケア	42(1)	pp.72-77	2020.12		S
2	58080	高齢者看護学および地域看護学関連	保健師を対象とした放射線事故に対応した教育プログラムの構築 福島第一原子力発電所事故後の保健師の経験に基づいた、保健師と保健師学生達に必要とされる教育内容を選定した。また、教育プログラム・教科書等を作成し、研究授業を現職保健師、大学生（保健師コース）を対象に実践し、教育効果の分析を進めている。	S	S	【学術的意義】 福島第一原子力発電所事故後、保健師は広範囲に及ぶ住民支援の役割を担うこととなった。しかし、役割遂行と放射線の知識の習得を同時並行的にこなすこととなり、放射線に関係する住民支援への無力感につながった。住民の中にも放射線事故を語ることが少なくなっていった。このような知識不足に伴う保健師の活動の停滞は、住民のニーズに応えることを抑制すると考えられた。そのため、福島県と隣接県の地方自治体保健師8名への面接内容を質的に分析し、学ぶべきテーマを選定した。このことは保健師が放射線災害時に活動するために必要とされる教育内容が明確となり、専門職の高度化に寄与する点において意義あることである。また、本研究（1）はPublic Health Nurs.（PHN)に掲載されている（IF=1.111）。 【社会、経済、文化的意義】 本研究を通して構築された教育内容は、保健師学生および現職の保健師にとって、経験に即したプログラムとして今後指針となりうる要素を選定しており、日本のみならず、海外でも活用できる項目となっている。研究チームでは一連の研究を反映させる成果として「保健師と放射線」という教育者用の書籍を出版した(2)。放射線の知識、放射線測定演習、関係法規、リスクコミュニケーション、事例検討、相談場面のロールプレイで構成されている。今後、保健師教育で求められる放射線事故教育を推進していく上でのモデル提示となった。さらに、保健師教育で用いる教科書（3）に、放射線と保健師活動について執筆し、これまでの研究成果を基に学術的知識の普及に取り組んだことは意義がある。			(1)	Chie Kawasaki, Chiaki Kitamiya, Koji Yoshida, Junko Omor, Sarah Porter, Kiyomi Asahara	An experiential approach to developing radiological content for public health nursing: Lessons from a nuclear disaster	Public Health Nurs.	37(2)	pp.295-302	2020.03	doi: 10.1111/phn.12700.	
									(2)	保健師の活動と放射線研究班 編 北宮千秋 著	保健師と放射線 第2章教育用テキスト	真興交易(株)医書出版部		pp.60−73	2018.11		
									(3)	宮崎美砂子、北山三津子、他、編） 北宮千秋 著	公衆衛生看護学各論2第3版(2021年版) 第3章Ⅱ地域の健康危機に対する活動 4)放射線災害	日本看護協会出版会		pp.288－303	2021.2		S

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	社会、経済、文化的意義	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
3	52040	放射線科学関連	研究テーマ 乳がん患者の放射線療法後の照射皮膚に抗酸化カロテノイドが豊富なトマトジュースは効果があるか 要旨 23人の放射線療法完了後の患者にトマトジュースを6ヶ月間飲用してもらい、照射された皮膚の初期および後期の有害事象を調査した。初期の有害事象に関しては、RT終了時にほとんどの患者でグレード1の急性放射線皮膚炎が観察されたが、放射線皮膚炎のグレードは、トマトジュース飲用開始後1か月で0に急速に変化した。ほとんどの患者は良好な皮膚状態となった。トマトジュース飲用は、初期の有害事象を緩和および回復し、照射された皮膚の重症度を軽減するのに役立つ可能性がある。	S	S	【学術的意義】 放射線治療後に160ml/日トマトジュースを飲用することが、放射線皮膚炎の回復促進に効果があることが、臨床で経過監査瑠することで明らかになった本研究はIn Vivoに掲載され、無料公開されている（IF=1.541）。 【社会、経済、文化的意義】 本研究で使用した抗酸化食品の一つであるトマトジュースは入手が容易で、価格的にも手軽に試すことができる。トマトジュースの飲用によって放射線治療後の放射線皮膚炎の悪化予防が期待できる。			(1)	Yasuyo Fukushi , Yasushi Mariya, Kyogo Yamada, Kazue Yoshida, Asami Sasa, Hitoshi Saito, Ayumi Hirai, Shigenori Suzuki, Koichi Aizawa, Hiroyuki Suganuma, Chieko Itaki	Tomato Juice Consumption Could Improve Breast Skin Adverse Effects of Radiotherapy in Breast Cancer Patients	In Vivo	34(5)	3013-3021	Sep-Oct 2020	doi: 10.21873/invivo.12133.	S
									(2)								
									(3)								
4	53040	腎臓内科学関連	糖尿病性腎症2期（早期腎症）の観察研究 糖尿病の合併症である腎症は早期介入が必要だが、その現状は明らかではない。これを明らかにするため、津軽地域における腎症2期の観察研究を行った。14医療機関と連携し317名の患者を3年間観察した。これにより通院継続し標準治療を受けることによって30%程度は早期腎症が寛解することが明らかとなった。3期へ進行しても通院継続により再び寛解に至る可能性があることも示され、定期的通院継続の重要性が示された。	S	S	【学術的意義】 糖尿病性腎症の観察研究は、今までもいくつか報告があるが、多くは糖尿病専門施設での報告であり、本研究のように実地医家、いわゆるクリニックの医師が主体となった観察研究は少なく、実臨床の診療状況が明らかになったという点で意義があると思われる。また、早期介入が寛解を促進させること、またその基準となるカットオフ値を提示できたことは学術的にも重要と考えられる。 【社会、経済、文化的意義】 本研究は、津軽地域の実臨床の状況を明らかにする上で非常に役立ったと考えられる。本研究の結果から、改めて定期的通院継続が、糖尿病性腎症の悪化を防ぐ上で大変重要であることが明らかとなった。また見方を変えると、現在津軽地域で行われている医療が、世界標準と何ら遜色ないということも明らかとなったといえる。さらに本研究を通じて、地域の医療機関との間で連携が深まったことも重要である。研究期間は3年間であったが、その後も年1回報告会を行い、地域の医療従事者へ情報提供を行い連携を図った。このような地域の医療機関を巻き込んだ研究を行うことで、地域医療の質の向上がもたらされるものと考えられた。現在厚生労働省が勧めている糖尿病性腎症重症化予防プログラムに繋がる研究であったものと考えており、この面からも意義深いものと思われる。 本研究結果は、日本糖尿病学会、日本腎臓学会、糖尿病性腎症研究会といった全国レベルの学会で、複数回報告しており、現在も二次解析を進めている段階である。			(1)	Nakamura N, Narita I, Fujita T, Murakami R, Shimada M, Nakamura M, Osawa H, Yamabe H, Okumura K	Factors associated with microalbuminuria remission in patients with type 2 diabetes: Importance of early intervention for microalbuminuric patients (Tsugaru Study)	in vivo	31	285-290	2017.3		
									(2)	中村典雄	糖尿病腎症3期からの寛解に関する検討～糖尿病腎症2期の観察研究（TSUGARU Study）の二次解析から～	Prog Med	38	1039-1043	2018.9		
									(3)	中村典雄	糖尿病性腎症における尿中アルブミン排泄量と摂取脂肪酸バランスとの関連についての検討～糖尿病腎症2期の観察研究（TSUGARU Study）の二次解析から～	Prog Med	40	937-977	2020.9		S

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
5	52040	放射線科学関連	核輸送因子に着目した癌病態および癌細胞の放射線応答制御に関する研究 核輸送因子karyopherin-β1が頭頸部扁平上皮癌の癌病態に関与すること，またkaryopherin-β1がヒト頭頸部扁平上皮癌細胞の放射線抵抗性及び放射線誘導性PD-L1発現を制御していることを明らかにした。	SS	SS	【学術的意義】 ヒト頭頸部扁平上皮癌と核輸送因子karyopherin-β1（KPNB1）の関連を調べた結果，KPNB1が頭頸部扁平上皮癌の癌病態に関わっていることを明らかにした。さらに，KPNB1が放射線治療効果の妨げとなる放射線抵抗性及び放射線誘導性PD-L1の発現を制御していることを見出すとともに，そのメカニズムの一端を明らかにした。本研究成果は2020年4月発行のCancers誌（Impact factor:6.639）に掲載されるとともに，“Feature paper”に選出された。また，本論文は英国科学誌Cell death & Disease誌等の論文に引用されている（現時点での引用数2）。 【社会，経済，文化的意義】 放射線療法は局所性に優れ，組織の形態と機能を温存できる優れた癌治療であるが，癌細胞の放射線抵抗性及び放射線照射に伴う免疫抑制分子PD-L1の発現増加が問題となっている。本研究は，頭頸部扁平上皮癌細胞で過剰に発現しているKPNB1を標的とすることで，これら二つの問題を同時に解決できることを示したインパクトの高い成果であり，その意義は医学的にも非常に大きいと考えられる。加えて，KPNB1が運搬する放射線抵抗性制御因子の一部も明らかとなったため，新たな放射線増感剤の探索・開発に繋がる社会的・経済的にも意義のある成果である。			(1)	Hazawa M, Yoshino H, Nakagawa Y, Shimizume R, Nitta K, Sato Y, Sato M, Wong RW, Kashiwakura I.	Karyopherin-β1 Regulates Radioresistance and Radiation-Increased Programmed Death-Ligand 1 Expression in Human Head and Neck Squamous Cell Carcinoma Cell Lines	Cancers	12(4)	908	2020.4	10.3390/cancers12040908	SS
									(2)								
									(3)								
6	52040	放射線科学関連	RIG-I様受容体が介在する放射線応答制御機構の解明と制癌への応用 （1）ではRIG-I様受容体活性化による放射線増感機構にミトコンドリアリボソームタンパクDAP3が関与していることを明らかにし，（2）ではヒト肺腺癌細胞に対するRIG-I様受容体刺激因子と放射線の併用による抗癌効果をさらに高める戦略として，アポトーシス誘導因子Fasリガンドが有用であることを見出した。	SS	SS	【学術的意義】 免疫活性化作用のあるRIG-I様受容体刺激因子による放射線増感作用の分子メカニズムの解明及びRIG-I様受容体刺激因子と放射線の併用による抗癌効果を更に高めるための治療戦略の探索に関する研究である。（1）では，ミトコンドリアリボソームタンパクDAP3がヒト肺腺癌細胞の放射線抵抗性を制御していることを明らかにするとともに，RIG-I様受容体刺激因子はヒト肺腺癌細胞で高発現しているDAP3のタンパク発現を低下させることで，放射線致死効果を高めることを明らかにした。本成果は2021年1月にInternational Journal of Molecular Sciences誌（Impact factor: 5.923）に掲載され，現在までにAnticancer Reaserch誌の論文1本に引用されている。（2）では，RIG-I様受容体刺激因子と放射線との併用処理による抗癌効果増強はアポトーシス関連受容体Fas非依存的であるため，Fasリガンドを併用することで抗癌効果が更に高まるのではとの作業仮説を立て，その仮説が正しいことを証明した。この成果はCurrent Cancer Drug Targets誌（Impact factor: 3.428）に掲載され，Oncology Letters誌の論文1本に引用されている。 【社会，経済，文化的意義】 本邦における死因第一は悪性腫瘍であり，効果的な治療法の開発が求められている。放射線療法は優れた癌治療であるが，放射線治療の効果向上のためには，放射線治療時における癌に対する適切な免疫活性が重要である。従って，免疫活性化剤による放射線増感作用機構とその抗癌効果を更に高めるための治療戦略を見出した本研究成果の意義は医学的に非常に大きく，現在の社会のニーズに合致した研究成果であると言える。			(1)	Sato Y, Yoshino H, Kashiwakura I, Tsuruga E.	DAP3 Is Involved in Modulation of Cellular Radiation Response by RIG-I-Like Receptor Agonist in Human Lung Adenocarcinoma Cells.	International Journal of Molecular Sciences	22(1)	420	2021.1	10.3390/ijms22010420	SS
									(2)	Sato Y, Yoshino H, Tsuruga E, Kashiwakura I.	Fas Ligand Enhances Apoptosis of Human Lung Cancer Cells Cotreated with RIG-I-like Receptor Agonist and Radiation.	Current Cancer Drug Targets	20(5)	372-381	2020.6	10.2174/1568009620666200115161717	SS
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
7	90140	医療技術評価学関連	核医学分野における画質評価の精度向上。核医学の標準化を進めるにあたって、画質を正しく評価することが重要である。現状の評価方法には未解決な点があり、手法の妥当性を示す材料が不足していた。本研究は臨床画像を組み込んだモンテカルロシミュレーションによって前述の問題点を解決した。また、体格の違いと画質を低下させる散乱線の割合の関係を明らかにした。	S		【学術的意義】 PET検査は施設によって画質のばらつきが大きいことが問題視されている。画質の標準化のためには、まず画質を正しく評価することが必要である。現時点において、もっとも精度の高い画質評価法は検査で得られるカウント量から算出した物理量を用いる方法である。しかし、画質評価指標の算出には画像化に寄与した信号量と、画質を悪化させる信号量が必要である。画質を悪化させる信号量の算出には散乱線の割合が必要であるが、装置の性能上、実測困難である。代替案として円柱ファントムから求めた散乱含有率を全ての患者データに適用して指標の算出が行われていた。本研究の成果によって、その値の妥当性と限界を明らかにした。本邦では体重が過度に重い患者は少なく、本研究で使用した患者群においては従来の固定値を用いる方法と、シミュレーションで推定した値を用いる方法に有意な差は認められなかった。これにより、現在の手法の妥当性が示された。			(1)	Hosokawa S, Inoue K, Takahashi Y, Kano D, Nakagami Y, Nakazawa S, Suzaki K, Fukushi M	Validation of the scatter fraction obtained from the cylindrical phantom for calculating noise equivalent count in clinical PET examinations	核医学技術	40・2	pp.135-141	2020.4		S
									(2)	細川 翔大, 井上一雅, 高橋 康幸, 加納 大輔, 中神佳宏, 中澤 脩人, 渡辺 侑也, 白川浩二, 福士 政広	PET装置の構成および性能と散乱成分の関係	核医学技術	40・4	pp.389-398	2020.12		S
									(3)								
8	58020	衛生学および公衆衛生学分野関連：実験系を含む	高自然放射線地域を活用した低線量率慢性被ばく影響の解明のための被ばく線量評価 本研究では、放射線科学において未だ明らかになっていない低線量率被ばくにおける放射線影響を解明するために、インドネシアで新たに発見された高自然放射線地域において外部被ばくおよび内部被ばくの線量評価を実施した。	SS	SS	【学術的意義】 弘前大学と連携協定を締結しているインドネシア原子力庁との国際共同研究によって近年新たに発見された高自然放射線地域において人への放射線影響を評価する上で重要な要素である被ばく線量を世界で初めて明らかにした。特に、(1)の論文ではこれまでに高自然放射線地域として世界的に知られているインド・ケララでは外部被ばく、中国・陽江では内部被ばくが被ばく源として重要であることが報告されてきたが、当該地域では外部被ばくと内部被ばくの両方が重要な被ばく源であり、かつ、これらの線量は今まで報告されてきた高自然放射線地域よりもはるかに高く、その平均値は放射線業務従事者の年間線量限度を上回るレベルであることを明らかにした。さらに、高ラドン濃度化の要因として、生活圏レベルの高度において夜間の大気が非常に安定することが要因の一つであることも明らかにした。（2）では飲料水中の放射性核種濃度を定量し、世界保健機関が示すガイドラインのレベルを超えていることを明らかにしただけでなく、線量の低減手法についても言及した。（3）では、(1)の調査で不足していたラドンの同位体であるトロンの濃度レベルを明らかにし、その線量寄与が大きいことを報告した。これらの結果は全て国際誌に報告し、2020年のインパクトファクターは(1)では7.963、(2)では3.390と環境科学や公衆衛生分野においてトップジャーナル（Q1）に掲載された。 【社会的意義】福島第一原子力発電所事故から10年が経過した現在においても、県民の多くの不安要素は低線量率慢性被ばくにおける将来的な人体影響に関してである。本研究での調査対象地域には福島事故後の県内の線量レベルをはるかに超える環境に何世代にもわたって住民が生活している。このような地域において住民が受ける線量を線源ごとに弁別して評価したことは意義が大きい。さらに、現在は住民から採取した血液試料の解析も行われており、線量との関係性を明らかにすることで、福島事故後の被災者に対する将来の健康影響について議論する重要な情報を得ることができるということでは我が国ならず国際的な視点からも社会的意義は非常に大きい。			(1)	M.Hosoda, E. D. Nugraha, N. Akata, R. Yamada, Y. Tamakuma, M. Sasaki, K. Kelleher, S. Yoshinaga, T. Suzuki, C. Pornnumpa, M. Furukawa, M. Yamaguchi, K. Iwaoka, T. Sanada, T. Miura, Kusdiana, D. Iskandar, E. Pudjadi, I. Kashiwakura, S. Tokonami	A unique high natural background radiation area - Dose assessment and perspectives	Science of the Total Environment	750	142346	2020.9	https://doi.org/10.1016/j.scitotenv.2020.142346	SS
									(2)	E. D. Nugraha, M. Hosoda, J. Mellawati, Untara, I. Rosianna, Y. Tamakuma, O. B. Modibo, C. Kranrod, Kusdiana,S. Tokonami	Radon Activity Concentrations in Natural Hot Spring Water: Dose Assessment and Health Perspective	International Journal of Environmental Research and Public Health	18(3)	920	2021.1	https://doi.org/10.3390/ijerph18030920	SS
									(3)	M. A. Saputra, T. Purwanti, R. Arifianto, R. I. laksmana, R. P. Hutabarat, M. Hosoda, S. Tokonami	Exposures from radon, thoron, and thoron progeny in high background radiation area in Takandeang, Mamuju, Indonesia	Nukleonika	65(2)	89-94	2020.5	https://doi.org/10.2478/nuka-2020-0013	SS

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
9	38050	食品科学関連	プロポリス摂取後の有効性評価法の確立 ミツバチ産品であるプロポリスには高濃度のポリフェノール類が含有されており、それらによる薬効が示唆されている。一方、プロポリスの消化・吸収・代謝経路は全く不明であった。この研究では、ヒト健常ボランティアによるヒト大規模試験を実施した。その結果、プロポリス摂取後の体内への吸収効率には大きな個人差や性差があることを明らかにした。	S	S	【学術的意義】 ミツバチ産品であるプロポリスは、古来より代替医療に用いられており、最近はサプリメントとして知られている。プロポリスの薬効は、含有される数百種類のポリフェノール類によると考えられているが、ヒト個体での科学的な検証はなかった。この研究では、弘前地区の複数企業の協力のもと、世界で初めてプロポリスの大規模ヒト試験を実施した。その結果、プロポリス摂取後、主成分とされているアルテピリンCの血中濃度が全例で上昇すること、そして、血中アルテピリンC濃度は女性が有意に高値を示すことが明らかとなり、これらの成果を論文（１）に（IF=2.614）に公表した。 国内最大のミツバチ産品の生産企業である山田養蜂場からの依頼により、（１）の研究成果に加えて、プロポリスの抗ウイルス効果に関する検体解析の結果を、同社が主催する学術研究セミナー（２）で講演した。 【社会・経済・文化的意義】 本研究では、実施のハードルが高いヒト大規模試験を展開したことで、ミツバチ産品関連企業からの注目を集めた。実際に試験の実施項目や巡回型検診を利用した方法に関する具体的な問合せや共同研究の打診が数多く寄せられている。これらからのことから産学連携プロジェクトへの発展が期待される。 プロポリス中のアルテピリンC含有量は地域によって大きく異なる。現在、養蜂が盛んな地域を中心として、よりアルテピリンC含有量の高いプロポリスの調査が開始されている。青森県でも岩木地区を含め、養蜂業が盛んな地域があることから、本研究の成果は、青森県内のミツバチ産品生産の活性化に貢献することが期待される。			(1)	Ding J, Matsumiya T, Hayakari R, Shiba Y, Kawaguchi, S, Seya K, Ueno K, Imaizumi T	Daily Brazilian green propolis intake elevates blood artepillin C levels in humans	Journal of Scinence of Food and Agriculture	Epub ahead of print		2021.2	https://doi.org/10.1002/jsfa.11132	S
									(2)	松宮朋穂	ヒト試験に基づくプロポリス摂取による抗ウイルス活性化機構の解明	第11回みつばち研究発表会(岡山市)			2020.9		
									(3)								
10	38050	食品科学関連	カシス抽出物の新規保健機能効果 本研究では、カシス抽出物の新規保健機能の探索を行った。カシス抽出物には植物性エストロゲン効果があり、更年期モデルラットの血管エラスチン分解を軽減すること、脂質異常症を軽減することを見出した。	S	S	【学術的意義】 (1)はカシス抽出物が更年期モデルラットにおいて、更年期性症状のひとつである動脈硬化に対する軽減作用として血管エラスチンの減少抑制や病理学的な血管リモデリングから保護することを初めて報告した論文である。(2)はカシス抽出物が更年期モデルラットの脂質異常症を軽減することを見出した初めての論文である。これらの本研究は国際雑誌「Nutrients」に掲載された。本誌の直近のインパクトファクターは4.546であり、国際的に高い評価を受けている。カシス抽出物には、植物性女性ホルモン効果があることは知られていたが、本研究によってカシス抽出物が更年期性の血管機能性の低下や脂質異常症に対する抑制効果があるという新知見が得られた。 【社会、経済、文化的意義】 青森県は国内でのカシスの生産量が最大であり、「あおもりカシス」は2015年末、「地理的表示保護制度」の第1号として選出されている。したがって、今後あおもりカシスは急速に認知度が高まることが期待される。カシスの保健機能の解明はカシスの高付加価値化さらにはカシス産業の発展にもつながることが期待される。このような状況においてカシスの高付加価値化に直結する本研究の意義は大きい。加えてこれまでの研究成果を発展させ、「カシス含有成分を用いた新規食品素材の開発」という研究課題で研究成果展開事業　A-STEP機能検証フェーズに採択された。			(1)	Horie K, Nanashima N, Maeda H, Tomisawa T, Oey I.	Blackcurrant (Ribes nigrum L.) Extract Exerts Potential Vasculoprotective Effects in Ovariectomized Rats, Including Prevention of Elastin Degradation and Pathological Vascular Remodeling.	Nutrients	13(2)	560	2021.2	doi: 10.3390/nu13020560.	S
									(2)	Nanashima N, Horie K, Yamanouchi K, Tomisawa T, Kitajima M, Oey I, Maeda H.	Blackcurrant (Ribes nigrum) Extract Prevents Dyslipidemia and Hepatic Steatosis in Ovariectomized Rats.	Nutrients	12(5)	1541	2020.5	doi: 10.3390/nu12051541.	S
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
11	49050	細菌学関連	菌種同定困難な新興下痢症原因菌 *Escherichia albertii* に関する研究 本研究では現在の培養・分離技術では同定困難な新興下痢症原因菌*E. albertii* の生化学的・生物学的な性状等を明らかにすることで、各種下痢症原因菌と鑑別可能な方法を検討することを目的としている。本研究では臨床由来*E. albertii* を収集し、(1)本菌発育における至適培養温度の検討、(2)便や尿検体由来*E. albertii* の多様な生化学的性状の確認、(3)薬剤感受性試験における耐性株の確認を行い、これまでに知られていないいくつかの知見を報告した。	S	S	【学術的意義】 *E. albertii* の培養・同定の困難さはもはや世界的な問題である。多くの研究者は本菌の遺伝子解析やその病原性に特化した研究を行っているが、実際に臨床検体から分離・同定する検査技術には関与していない。そのため本研究では臨床検体から本菌を正しく分離・同定するために(1)の研究では培養条件を検討し、本菌の至適培養温度を確認した。(2)では臨床検体を対象として生化学的性状が多様性であることや、便検体のみならず尿検体からも本菌が分離されることを確認した。(3)では薬剤感受性試験から耐性薬剤を確認し、治療の際の適切な薬剤選択につなげた。教育的観点からは学部生や大学院生が実験補助として常時参加することにより、研究成果を論文投稿や学会発表することができた。これは臨床検査技師教育にとどまらず、将来を担う感染症領域の人材育成にも貢献するものを考える。			(1)	藤岡美幸、吉岡翔、野坂大喜	*Escherichia albertii*における培養温度の検討	保健科学研究	11(1)	1-5	2020.9		
									(2)	Miyuki Fujioka, Sho Yoshioka, masahiko Ito, CR Ahsan	Biochemical and molecular properties of *Escherichia albertii* isolated from human urine and specimens	Japanese journal of infectious disease		in press	2021.3	DOI:10.7883/yoken.JJID.2020.858	S
									(3)	吉岡　翔、伊藤政彦、磯崎将博、玉井清子、月足正辰、藤岡美幸	新興病原体 *Escherichia albertii*における薬剤感受性調査	保健科学研究	11(2)	5-9	2021.3		
12	52010	内科学一般関連	非アルコール性脂肪性肝炎のバイオマーカーに関する研究 本研究では将来肝硬変への進展リスクのある非アルコール性脂肪性肝炎(NASH)の早期発見を目指した研究で、血清中microRNAがNASHバイオマーカー候補となることを示した。	S	S	【学術的意義】 非アルコール性脂肪性肝炎（NASH）は将来肝硬変への進展リスクが懸念される病態である。しかし、どの脂肪肝患者が初期のNASH状態にあるかスクリーニングすることは難しく、非侵襲的な新規検査法の開発が求められている。本研究ではNASH発症前および初期時に血清中で増減し、バイオマーカーとなる可能性をもったmicroRNAとその分泌メカニズムについて調べることを目的とした。その成果として血清中miR-122とmiR-192がNASHバイオマーカーとなる可能性が示唆された。 【社会，経済，文化的意義】 これまで正確なNASH診断は病理組織学的解析により行われてきた。しかし侵襲性があるため血液のような侵襲性の低い新たな検査法の開発が求められていた。本研究成果はNASHを早期発見する新たな検査法の開発につながり、将来肝硬変への進展を予防することで患者QOLを改善できるため予防医学における意義が非常に大きい。			(1)	松本佳菜,千葉満	非アルコール性脂肪性肝炎における血清中マイクロRNAバイオマーカーの探索	臨床病理	68	pp.231	2020.10		S
									(2)	松本佳菜,加藤弓子,林百音,大杉悠平,田山千紗,千葉満	非アルコール性脂肪性肝炎の新規バイオマーカーとしての血清中マイクロRNAの探索	医療検査と自動化	45	pp448	2020.8		S
									(3)								
13	59040	栄養学および健康科学関連	糖質と抑うつとの関連性に関する研究 糖質の短期間過剰摂取により抑うつが誘発されるかどうかを明らかにするため、3%グルコース水溶液をマウスに4週間自由摂取させた結果、抑うつ様行動の増加は認められなかった。	S	S	【学術的意義】 糖質の長期間過剰摂取と抑うつとの関連については、複数の先行研究において調査が行われているが、短期間過剰摂取の抑うつへの関与に関する報告はないと思われるため、本研究は学術的意義が高いと考えられる。 【社会、経済、文化的意義】 特定の食品成分の摂取制限もストレスの要因の1つとなると思われるため、本研究は、糖質の短期間過剰摂取は抑うつの原因とならない可能性を示唆した点において、社会的意義および文化的意義も大きいと考えられる。			(1)	Yukiko Abe	Short-Term Overconsumption of Sugars May Not be Associated with Depression in Mice	EC NUTRITION	15(4)	9-12	2020.4		S
									(2)								
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
14	49020	人体病理学関連	子宮内膜液状化検体細胞診における画像解析の有用性の検討 液状化検体細胞診（LBC)は、乾燥による不適切標本が無く、背景の過剰な血液、粘液、炎症細胞が除去され観察が容易で、塗抹範囲も狭く、画像解析に適した細胞診標本が作製されるという利点がある、本研究では、近年増加傾向にある子宮内膜類内膜癌のLBCと塗抹法における細胞診所見の形態学的相違とLBCにおける子宮内膜類内膜癌のG1とG3の鑑別について、Whole Slide Image画像の画像解析を用いて客観的に解析しその有用性について検討する。	S	S	【学術的意義】 子宮内膜細胞診においてLBCが普及しない現状についてはいくつか原因が考えられる。その１つとして、画像解析によるLBCの細胞像が客観的に十分に解析されていないことに着目した。本研究では、Whole Slide Image(WSI)画像の画像解析を用いて客観的に解析し、以下の結果を得た。 １．子宮内膜類内膜癌におけるLBCと従来法の細胞診所見の形態学的相違： 従来法と比較して、LBCのG1で集塊の出現数が有意に多く、集塊の重積層数が有意に高く、G1とG3で集塊の面積と外周長が有意に小さかった。LBCのG1とG3で核の面積と外周長が有意に小さく、N/N比は大きかった。以上より、LBCと従来法の形態学的相違が明らかとなり従来法からLBCへ移行する道が開けた。 ２．LBCの子宮内膜類内膜癌のG1とG3の鑑別：G1の重積層数はG3のものより有意に多く、集塊面積はG3のものより有意に大きかった。核小体面積、N/N比はG3のものより有意に小さかった。以上より、LBCにてG1とG3の鑑別診断が可能であることが明らかとなった。 【社会、経済、文化的意義】 子宮内膜癌は生活様式の欧米化に伴い増加傾向にあり、2008年には、その罹患率は子宮頸癌uterine cervical cancerのそれを上回った。2017には、年間およそ1万人が罹患している。さらに、生殖年齢の若年者でも発生することが問題となっている。 世界では、2008年に子宮体癌は年間28万8千人が新たに診断されたと報告されている。 子宮体癌の診断には、本邦ではまず内膜細胞診が行われ、精査のために内膜組織診が行われることが一般的である。内膜細胞診は、内膜組織診と比較して検体採取が容易で患者さんへの負担が少なく、反復検査も可能である。さらに、標本作製に要する時間も短いので、結果を早く報告でき、費用も安価である。しかしながら、世界では、子宮内膜癌の診断は内膜組織診によって行われており、内膜細胞診は普及していないのが現状である。子宮内膜LBCの画像解析は客観的細胞診断に有用であることを明らかにした本研究は、子宮内膜LBCの世界への普及と精度向上に貢献することが期待される。			(1)	Odashima, H., Yoshioka, H., Ota, K., Goto, Y., Noro, M., Horie, K., Watanabe, J.	Morphological Differences between Liquid-Based Cytology and Conventional Preparation in Endometrial Endometrioid Carcinoma Grade 1 and Grade 3, and the Differentiation of Grades in Each Method.	Acta Cytol.	65(3)	227-234	2021.3	DOI:10.1159/000512868	S
									(2)	渡邉 純	子宮内膜類内膜癌おけるLBCと従来法の形態学的相違とGradeの鑑別	第59回日本臨床細胞学会秋期大会シンポジウム「子宮内膜細胞診」			2020.11		
									(3)	廣田伊吹、小田嶋広和、太田かすみ、南宏樹、吉岡治彦、堀江香代、則松良明、矢納研二、渡邉純	液状化検体細胞診標本における子宮内膜類内膜癌G3の画像解析を用いた検討	第61回日本臨床細胞学会総会（春期大会）			2020.6-7		
15	49020	人体病理学関連	病理組織診断支援のための、がん組織の形態学的な客観的評価法の開発に関する研究 本研究は、病理組織診断の診断支援システム（補助診断）の開発を目的としている。病理組織診断は悪性腫瘍の最終診断である。材料にはホルマリン固定・パラフィン包埋薄切切片・HE染色組織標本を用いるため、疾病ごとの特徴的な形態が保持される。しかし、形態学的な変化を認識し、病変に特徴的所見を捉える病理診断には、客観的評価の裏付けによる診断精度向上が求められている。形態学的は客観的手法の開発をテーマとしている。	S		【学術的意義】 本研究(1)は、子宮内膜異型増殖症（AEH）のHE組織切片における診断精度向上を目的に、構造異型と核異型を同時に定量化する画像解析手法を確立した。AEHは、癌の併存または癌に進行するリスクが高いことが明らかになり、WHO分類（2014）では子宮内膜上皮内腫瘍（EIN）に併記、癌取扱い規約（第4版，2017）ではEIAと同義語として位置づけられた前がん状態であり、AEHの客観的診断に本手法が応用可能となり子宮内膜類内膜癌の早期診断へ寄与する。さらに病理組織診断判定基準の確立は、現在、日本病理学会で取り組んでいる日本医療開発機構（AMED）の「臨床研究等ICT基板構築研究事業」の課題「ICT技術や人工知能(AI)等による利活用を見据えた、診療画像等データーベース基盤構築に関する研究」により進められており、本研究が大きく寄与するものである。			(1)	吉岡治彦、木村仁美、堀江香代、渡邉純	構造異型と核異型の画像解析による子宮内膜増殖症と異型増殖症の組織診断支援法	第69回日本医学検査学会、幕張メッセ(Web)			2020.9		
									(2)								
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
16	49020	人体病理学関連	がん細胞検査を担う細胞検査士のための、がん細胞の形態学的な客観的評価法の開発に関する研究(1) 本研究は、がんの細胞診断学において細胞検査士が日常行っている光学顕微鏡的な形態変化の視点から、(1)同定試験やスクリーニング試験に対応する教材としてふさわしい細胞標本の検索、（2）教材とととしてふさわしい細胞像のアトラス集・画像データ・WSIデータの検討、（3）稀な例や鑑別診断を有する疾患例の抽出、を行い、細胞検査士教育の細胞診断学演習の強化と、細胞診断学研究の基礎を行うことをテーマとしている。	S		【学術的意義】 (1)は、弘前大学医学部保健学科細胞検査士と青森県細胞検査士会と青森県臨床検査技師会が協賛し企画したものである。細胞検査士資格認定試験　一次試験の画像問題や、二次試験の同定試験の勉強のための細胞診標本の収集と画像撮影、解答集作成により受験のための資料になるのみならず、病院臨床現場で遭遇する判定困難の際の基準画像集も兼ねることができたことは、がん細胞判定の診断精度向上に大きく寄与することができた。			(1)	四釜育与、吉岡治彦、堀江香代、渡邉純、青森県細胞検査士会会員	細胞検査士資格認定試験のための細胞試験問題集2020	『第2回　細胞検査士2次試験対策 スクリーニング講座』.弘前大学医学部保健学科(Web.DVD)			2020.11		
									(2)								
									(3)								
17	49020	人体病理学関連	がん細胞検査を担う細胞検査士のための、がん細胞の形態学的な客観的評価法の開発に関する研究(2) 本研究は、細胞診断の精度向上のために画像解析手法を取り上げ、細胞診断に有用な所見の抽出すること、核所見を数値化すること、各所見の診断の重みを統計学的に明確にすること、そしてこの結果を踏まえ再び細胞所見にフィードバックすることで、細胞診を担う細胞検査士、細胞診専門医の診断能力向上を目出すことを研究テーマとしている。特に、細胞診が真に求めているAI （人工知能）とは何かを追求することを目的としている。（199/200）	S		【学術的意義】 本研究(1)は、乳癌早期発見のための乳腺線吸引細胞診では、濃染集塊HCG (Hyperchromatic Crowded Cell Groups) が見られた時、良性疾患である線維腺腫との鑑別が困難なことが多い。そこで、集塊の暗さ、集塊形状の不整さ、及び集塊濃淡染色性の複雑さを数値化する集塊グレー・フラクタル解析法が開発し、細胞診補助システムに寄与した。（２）は、子宮内膜腺間質破綻 (Endometrial glandular and stromal breakdown：EGBD) における内膜間質細胞凝集塊は異型増殖症や子宮内膜癌との鑑別が非常に重要であるが鑑別困難なことが多い。そこで、EGBD内膜間質細胞核の形態画像を数値化するくぼみ核解析法を開発し、EGBDの診断精度向上に寄与した研究である。（３）は、特異な転移経過を示した症例報告である。原発不明の時、腹水細胞診で浸潤性小葉癌を推定し、ホルモン療法効果の有無も合わせ診断できた経過が報告され、細胞検査士を目指す学生にも、また乳腺細胞診を経験する機会の少ない細胞検査士にも教育的論文を発表した。			(1)	Yoshioka H, Herai A, Oikawa S, 2, Morohashi S, Hasegawa Y, Horie K, 1, Watanabe J.	Fractal analysis method for the complexity of cell cluster staining on breast FNAB.	Acta Cytol	65(1)	p4-12	2021.1	doi://10.1159/000509668	s
									(2)	南　宏樹、吉岡治彦、小田嶋広和、宮川京大、渡邉純.	子宮内膜間質細胞腎形核の客観的評価のためのくぼみ核解析法の有用性.	青森県臨床細胞学会誌	37	p13-20	2020.4		s
									(3)	及川颯大、吉岡治彦、長谷川善枝、諸橋聡子.	腹水細胞診で浸潤性小葉癌を推定し得た一例	青森県臨床細胞学会誌	37	p21-25	2020.4		s

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
18	63030	化学物質影響関連	内分泌かく乱の作用のある化学物質の新規作用メカニズムの解明 環境中の様々な化学物質がヒトや生物の内分泌をかく乱する可能性が示唆されているが、そのメカニズムについては不明な点が多い。本研究では、エストロゲン様作用を持つ植物由来化学物質および合成化学物質の中枢位神経系における作用機序を解明した(1)，(2)。また、甲状腺ホルモンの神経系細胞に対する作用メカニズムの解明を行った(3)。	S	S	【学術的意義】 環境中に存在する化学物質のうち、植物由来成分・化学物質はヒトの健康に有益であり、サプリメント等として利用される。一方、エストロゲンをはじめとするホルモン様作用を持つ人工化学物質が環境中に放出され、ヒトを含む生物へばく露されると様々な体調変化や疾病の増悪などを引き起こす可能性がある。イソフラボン類ならびにPFOS(ペルフルオロオクタンスルホン酸：撥水加工やテフロン加工等に利用される化学物質)はエストロゲン様作用をはじめとする様々な効果を有することが知られており、エストロゲン受容体のみならず、他の受容体を通して身体に変化をもたらすことが報告されているが、作用機序の解明が不十分である。成果（1）は、PFOSの周産期ばく露による脳発達への影響を示したものであり、Food and Chemical Toxicology誌(IF=4.679)に発表した。成果（2）では、イソフラボン類がGタンパク共有型エストロゲン受容体を介してグリア細胞の細胞移動を増進させるというがん転移の解明につながる成果を示し、Frontier's in Endocrinology誌(IF=3.644)に発表した。成果（３）は、甲状腺ホルモンが脳発達に関与するメカニズムを詳細に示したものであり、今後の化学物質影響に関する研究をすすめるための重要な基礎研究である。Frontier's in Endocrinology誌(IF=3.644)に発表した。 【社会・経済・文化的意義】 健康増進のために利用される化学物質と経済活動によって環境中に放出された化学物質の新たな作用メカニズムと効果を示したことから、より安全な利用と疾病予防につながることが期待できる。また、特にヒトを含めた生物の内分泌作用をかく乱する様々な化学物質の作用機序の解明と比較から、今後も創出・放出される化学物質の毒性発現を予防・抑制するための新たな手法の開発につながる。			(1)	Abdallah Mshaty, Asahi Haijima, Yusuke Takatsuru, Ayane Ninomiya, Hiroyuki Yajima, Michifumi Kokubo, Miski Aghnia Khairinisa, Wataru Miyazaki, Izuki Amano, Noriyuki Koibuchi	Neurotoxic effects of lactational exposure to perfluorooctane sulfonate on learning and memory in adult male mouse	Food and Chemical Biology	145	111710	2020年11月	https://doi.org/10.1016/j.fct.2020.111710	S
									(2)	Winda Ariyani, Wataru Miyazaki, Izuki Amano, Kenji Hanamura, Tomoaki Shirao, Noriyuki Koibuchi	Soy Isoflavones Accelerate Glial Cell Migration via GPER-Mediated Signal Transduction Pathway	Frontier's in Endocrinology	11	554941	2020年11月	https://doi.org/10.3389/fendo.2020.554941	S
									(3)	Hiroyuki Yajima, Izuki Amano, Sumiyasu Ishii, Tetsushi Sadakata, Wataru Miyazaki, Yusuke Takatsuru, Noriyuki Koibuchi	Absence of Thyroid Hormone Induced Delayed Dendritic Arborization in Mouse Primary Hippocampal Neurons Through Insufficient Expression of Brain-Derived Neurotrophic Factor	Frontier's in Endocrinology	12	629100	2021年2月	https://doi.org/10.3389/fendo.2021.629100	S
19	47030	薬系衛生および生物化学関連	魚類粘液由来抗菌タンパク質に関する研究 本研究では、魚の粘液から見つかった抗菌タンパク質を効率良く人工合成するための新しい技術と抗菌活性調節に関わる配位金属を特定した。	S	S	【学術的意義】 魚の粘液から同定した抗菌タンパク質（psLAA01）を世界で初めて高純度人工合成に成功しており、改良型合成法に関してApplied microbiology and biotechnology（2020、インパクトファクター：4.813）で報告している。当該タンパク質は、院内感染の起因菌であるメチシリン耐性黄色ブドウ球菌をはじめ、各種病原性微生物に対して強力な抗菌作用を有し、細菌結合性、菌体破壊作用が認められている。 【社会、経済、文化的意義】 従来の抗生物質のような耐性化を引き起こすことがなく直接菌体を破壊することから新たな抗菌薬として期待されており、JST A-Step（2019-2020年度）、トライアウト（2021年度）の採択と製薬企業との実用化に向けた共同研究に発展している。			(1)	Kasai K, Ito Y, Nitta A, Ariyoshi K, Nakamura T, Miura T.	Metal coordination by L-amino acid oxidase derived from flounder Platichthys stellatus is structurally essential and regulates antibacterial activity.	Applied microbiology and biotechnology	104(22)	9645-9654	2020.12	doi: 10.1007/s00253-020-10914-3.	S
									(2)								
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
20	44010	細胞生物学関連	ヒアルロン酸合成酵素の活性調節メカニズムに関する研究 本研究では、ヒトの細胞膜に存在するヒアルロン酸合成酵素の活性調節に関わるアミノ酸部位を特定した。	S	S	【学術的意義】 細胞膜6回半貫通型タンパク質であるヒアルロン酸合成酵素（HAS）に特徴的な細胞内ループ構造に、世界で2例目となるヒアルロン酸合成に必須なリン酸化アミノ酸部位が存在することを報告した（Biochemical and Biophysical Research Communications 2020、インパクトファクター： 3.575）。 【社会、経済、文化的意義】 ヒアルロン酸はがん細胞で多く発現しており転移・浸潤に関わる物質である。そのため、ヒアルロン酸合成に必須なアミノ酸部位の特定は、がんの転移や浸潤を抑える新しい分子標的や創薬に繋がる可能性がある。			(1)	Kasai K, Kuroda Y, Takabuchi Y, Nitta A, Kobayashi T, Nozaka H, Miura T, Nakamura T.	Phosphorylation of Thr328 in hyaluronan synthase 2 is essential for hyaluronan synthesis.	Biochem Biophys Res Commun.	533(4)	732-738	2020.9	doi: 10.1016/j.bbrc.2020.08.093.	S
									(2)								
									(3)								
21	59010	リハビリテーション科学関連	脳卒中後の有効な運動麻痺治療開発を目指した研究 有効な脳卒中後運動麻痺の治療法開発を目的とし、脳卒中モデル動物に対して種々のリハビリテーションを実施し、まだ未解明である脳可塑性の機序解明を目指している。これまでに作出した脳出血・脳梗塞モデルラットに加え、マウスモデルの確立にも成功した。これにより、モデル作出の成功率の向上したほか、遺伝子改変等も見据えた研究応用の可能性が高まった。	S		【学術的意義】 運動麻痺をはじめとする種々の脳卒中後遺症の改善は”脳回復”に依存することは明らかであるが、その回復メカニズムの全貌は明らかでなく、有効な治療手法の同定やそのエビデンス確率は不十分である。心理が身体機能回復に与える影響を脳可塑性の側面から検証した本研究は学術的意義を認められ2017年には第94回日本脳科学会において奨励賞を、業績（１）ではポスターアワードを、業績（２）では優秀発表賞を受賞した。また、2019年にも前肢に限局した運動麻痺を有する脳梗塞モデル作出に成功を高く評価され、同学会において優秀発表賞を受賞しており、2年連続の受賞となった。これらの成果は業績（３）として国際誌に掲載されている。 【社会、経済、文化的意義】リハビリテーション分野では、心理が身体機能へ及ぼす影響はトピックであるが、脳機能のレベルでのエビデンスはまだ未確立である。本研究で明らかとなった、モチベーションによる運動麻痺回復効果の促進作用は、臨床応用を見据えた成果であり、社会、経済的、文化的意義は高い。また，臨床上治療エビデンスの最も高い麻痺側肢集中使用法（CI療法）の有効性を検証できた点は高い意義を有する．			(1)	Chihiro Sato, Shuhei, Koeda, Sumigawa Koshi, Misaki Mikami, Kazuki Akahira, Junko Yamada	The comparison of the synaptic changes with voluntary and forced rehabilitation in intracerebral hemorrhage model rats.	The 1st Japan-Korea-Taiwan Neurorehabilitation Conference			2019.04.28		
									(2)	佐藤 ちひろ, 丹治 邦和, 小枝 周平, 三上 美咲, 赤平 一樹, 山田 順子	脳出血モデルラットにおける異なる種類の運動が機能回復に与える影響	第157会弘前医学例会			2020.01.24		
									(3)	Sato C, Tanji K, Shimoyama S, Chiba M, Mikami M, Koeda S, Sumigawa K, Akahira K, Yamada J.	Effects of voluntary and forced exercises on motor function recovery in intracerebral hemorrhage rats.	Neuroreport	31(2)	189-196	2020 Jan 27	doi: 10.1097/WNR.0000000000001396.	S

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	社会、経済、文化的意義	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
22			発達性協調運動障害（DCD）は協調運動障害を有する発達障害であるがその病態は未だ明らかではない。DCDの症状は青年期になっても残存するため二次的な心理・社会的問題を引き起こす。本研究ではDCDの協調運動の問題に影響する発達障害特性や感覚、注意・実行機能などの認知的側面等を明らかにすることで、協調運動の問題が現れるメカニズムを探り、発達障害ごとの協調運動の問題への適切な支援へと活用させる。	SS		【学術的意義】 発達性協調運動障害（DCD）はこれまで単なる不器用と位置付けられてきたもので、発達に伴い自然には改善しない疾患であり、いじめや社会不適応などの問題に発展する可能性が高い。また、DCDは日本ではまだ認知度が低く2017年４月にようやく第1回DCD学会が開催された。現在自閉スペクトラム症（ASD）、注意欠如・多動症（ADHD）など発達障害への理解が進む中、DCD研究は非常に遅れており、介入プログラムの開発が急務である。我々は弘前市五歳児発達検診に毎年参加し年間1000名以上の児のデータより抽出したDCD児の研究を行っている。論文ではASD,ADHD児に比べ表現型がおとなしいため、親や教師からDCDだと気づかれにくいことが問題であることを示した。また、本研究テーマで2018年度から大学院生の三上美咲は日本学術振興会DC1特別研究員に採用されたことからも学術的意義の高さは推察できる（本学で唯一採択、保健学研究科では初）。2020年度は、DCD児が示す感覚処理の問題について国際誌へ論文が掲載された（1）。またDCD児が抱える行動や情緒的問題について国際学会にてシンポジストとしての口述発表（2）およびポスター発表を行った（3）。これらのことから国際的にも本研究の学術的意義が認められていると言える。社会経済文化的意義　DCDの認知度は低く研究の遅れのみならず一般的理解も低く、保護者、教育者の理解も他の発達障害に比べ遅れている。そこで、精神・身体両面から考えることができる作業療法士の参加が望まれており、弘前市からの委託により主に運動発達という観点から調査研究およびDCDのスクリーニング診断にも参加している。現在、作業療法の視点や知識を生かし、動作解析による病態解明を行いDCDの早期介入へむけた研究を行っている。本研究内容による解析の結果介入プログラムが完成すれば、作業療法士だけでなく特別支援教育に携わる教員、幼稚園教諭、保育士、保護者などさまざまな場面で多くの人が活用できるものとなる社会的意義は大きく、弘前市のみならず国内外の当該研究に貢献できる。			(1)	Misaki Mikami, Tomoya Hirota, Michio Takahashi, Masaki Adachi, Manabu Saito, Shuhei Koeda, Kazutaka Yoshida, Yui Sakamoto, Sumi Kato, Kazuhiko Nakamura, Junko Yamada.	Atypical sensory processing profiles and their associations with motor problems in preschoolers with developmental coordination disorder	Child Psychiatry & Human Development	52	311-320	2021.4	10.1007/s10578-020-01013-5	
									(2)	Misaki Mikami	The developmental trajectories of social-emotional-behavioral challenges in children with developmental coordination disorder (Towards a better understanding of early childhood neurodevelopmental profiles and their association with psychopathology in adolescence: findings from a longitudinal epidemiological study in Japan)	24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP 2020)			2020.12		
									(3)	Misaki Mikami, Masaki Adachi, Michio Takahashi, Tomoya Hirota, Manabu Saito, Shuhei Koeda, Kazutaka Yoshida, Kazuhiko Nakamura, Junko Yamada	Sensory processing abnormalities and their associations with behavioral and emotional difficulties in preschoolers with Developmental Coordination Disorder	24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions (IACAPAP 2020)			2020.12		

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
23	59010	リハビリテーション科学関連	脳卒中片麻痺者の上肢を用いた立ち上がり動作に関する研究 上肢を用いた椅子からの立ち上がり動作は上肢を用いない立ち上がり動作と比較し，どのような運動学的特徴を有しているか，また，脳卒中片麻痺者が動作を遂行した場合の特徴や動作の可否に必要な能力の検討を行った。	S	S	【学術的意義】 肢体不自由による下肢の筋力低下などにより立ち上がり動作が困難な場合，上肢を用いた立ち上がり動作が行われる。主に，座面などを押して立つPush動作，手すりなどを引いて立つPull動作に分類されるが，本研究分野の論文は少なく，さらに，肢体不自由者を対象とした研究はみられない。(1)では脳卒中片麻痺者の上肢を用いた動作中の運動書き分析を，(3) では立ち上がることのできない脳卒中片麻痺者と上肢を用いて立ち上がることのできた脳卒中片麻痺者を比較し，立ち上がり動作に必要な能力を明らかにした。この点については，臨床上非常に有意義な情報であり，リハビリテーション研究の学術的恩恵も高い。 【社会，経済，文化的意義】 上肢を用いた際の立ち上がり動作は，高齢者などにとっては当たり前の動作であり，日常生活上必要不可欠な動作であるが，これらの動作をまとめた参考書はない。そこで，リハビリテーション教育で用いる教科書（2）に、身体運動学的アプローチの一つとして上肢を用いた立ち上がり動作について執筆し、これまでの研究成果を基に学術的知識の普及に取り組んだことは意義がある。			(1)	高橋純平，西山徹	脳卒中片麻痺者の上肢を用いた立ち上がり方法の違いによる運動学的分析	東北理学療法学	30	34-38	2018.9	doi.org/10.15049/artsjpta.30.0_34	
									(2)	髙橋純平， 藤澤宏幸　編	日常生活活動の分析　身体運動学的アプローチ第2版 （18章）上肢を用いた立ち上がり動作	医歯薬出版（株）		243-246	2020.3		
									(3)	Jumpei Takahashi	Relationship between the ability to stand and physical function in stroke survivors with hemiplegia: a pilot study	Japanese Journal of Comprehensive Rehabilitation Science	12	4-8	2021.3	doi.org/10.11336/jjcrs.12.4	S
24	59010	リハビリテーション科学関連	慢性期脳卒中片麻痺患者と健常成人における下肢関節角度を用いた運動学的歩行非対称性の比較について，正規化相互相関関数を考案し，その評価として妥当かどうかを検討した研究である．	SS	SS	【学術的意義】 脳卒中片麻痺患者の歩行非対称性は歩行時のエネルギー消費や立位バランス能力と関連し，歩行能力を低下させる一因である．歩行非対称性は立脚時間や歩幅から計算されたSymmetry IndexやSymmetry Ratio，Gait Deviation Index，Gillette Gait Indexなどを用いて研究が行われてきた．これらは単一の項目で非対称性を表すことができないという欠点をもつが，単一で表せる正規化相互相関関数を考案した． そこで，脳卒中片麻痺患者と健常成人を対象に，歩行中の下肢関節角度から歩行非対称性として正規化相互相関関数を算出し比較することで，脳卒中片麻痺患者の運動学的歩行非対称性を確認できるか検証した研究である．本研究はGait & posture誌（IF＝2.349）に掲載された．			(1)	Hirofumi Ogihara, Eiki Tsushima, Tomohiko Kamo, Takaaki Sato, Akira Matsushima, Yamato Niioka, Ryoma Asahi, Masato Azami	Kinematic gait asymmetry assessment using joint angle data in patients with chronic stroke-A normalized cross-correlation approach	Gait & posture	80	168-173	2020.7	DOI:10.1016/j.gaitpost.2020.05.042	SS
									(2)								
									(3)								
25	59010	リハビリテーション科学関連	日常生活歩行速度の国際標準化を目的として，様々な年代の集団を対象として標準的な指標を見出す研究である．測定値としての歩行速度と日常生活での歩行速度の関連や，身体機能（特に高齢者）との関係，IoT活用による行動範囲などの測定を併せて歩行速度測定の標準化を目指している．	SS	SS	【学術的意義】 『日常生活歩行速度の国際標準化のプロジェクト』として東京都健康長寿医療センター研究所(東京都老人総合研究所)と共同で行っている一連の研究であり，現段階では基礎的に測定室における歩行速度と日常生活の実歩行速度との関連．またフレイルとの関連をも検討している．本研究の一部は，Int J Environ Res Public Health誌（IF＝2.849）に掲載された．今後も継続して発表を行う研究である．			(1)	Kawai H, Obuchi S, Watanabe Y, Hirano H, Fujiwara Y, Ihara K, Kim H, Kobayashi Y, Mochimaru M, Tsushima E, Nakamura K	Association between Daily Living Walking Speed and Walking Speed in Laboratory Settings in Healthy Older Adults	Int J Environ Res Public Health	17	2707	2020.4	DOI: 10.3390/ijerph17082707	SS
									(2)								
									(3)								

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
26	10030	臨床心理学関連	児童・思春期における子どものメンタルヘルスに関する大規模前向きコホート調査 (1)我が国において極めて報告の少ない大規模な児童思春期を対象としたコミュニティベースのデータから、子どもの抑うつの有病率と重症度分布を提示した。(2)アジアで初めてとなる子どもの抑うつ症状の継時的推移のパターンを示した。(3)子どものQOLと社会資源との関連を明らかにした。	S	SS	【学術的意義】 (1)および(2)は子どもの抑うつに関する一連の研究である。(1)は[IF: 3.35]の雑誌に掲載された。学童・思春期の子ども8,003人(回答者: 7,765人, 回答率: 97.0%)を対象に、国際比較可能な尺度を用いて子どもの抑うつの重症度分布、自殺企図・念慮を持つ割合について明らかにした。調査の結果、子どもたちの13.6%に中等度の抑うつ症状が観察された。このうち4.9%にはやや重度から重度のうつ症状が観察された。大規模なコミュニティベースのデータで子どもの抑うつの重症度や自殺企図・念慮を持つ割合を調査した研究はなく、また国際比較可能なデータを提供した点に一定の学術的意義があったものと考えられる。また、(2)のシンポジウムにおいて、4556名の子どもの抑うつ症状について3年間追ったデータから、子どもの抑うつの継時的パターンをアジアで初めて示し、データから抑うつの高維持群に対して、自閉スペクトラム症の特性が関与していることを指摘した。 (2) [IF: 2.74] 9～15歳の子ども7759人を対象にネットワーク分析を行い，子どもの健康関連生活の質（HRQOL）と学校のソーシャルキャピタルの項目間の関係のネットワーク構造を調べた。分析の結果、HRQOLと学校のソーシャルキャピタルのネットワークにおいて、「学校・学業機能」に関する項目と「生徒間の楽しみの共有」に関する項目の強度中心性がそれぞれ最も高く、小児のHRQOLと学校のソーシャルキャピタルに重要な役割を果たしていることが明らかになった。 【社会、経済、文化的意義】 (1)のプレスリリースを行ったところ東奥日報、共同通信、朝日新聞、陸奥新報、教育新聞、河北新報、デーリー東北に取材申し込みがあり、研究結果が多紙に掲載され、社会的に大きな反響があった。ここ数年、成人の自殺率は減少傾向にある一方で、子どもの自殺率が漸増傾向にある我が国の現状を反映した結果であること、また2020年には子どもの自殺が急増したことから社会的意義が大きかったものと考えられる。			(1)	Adachi M, Takahashi M, Hirota T, Shinkawa H, Mori H, Saito T, Nakamura K.	Distributional patterns of item responses and total scores of the Patient Health Questionnaire for Adolescents in a general population sample of adolescents in Japan	Psychiatry and clinical neurosciences	74・11	628	2020.11	10.1111/pcn.13148	SS
									(2)	Masaki Adachi	Suicidality in Autism Spectrum Disorder comorbid with ADHD Symptoms in a Non-clinical School-aged population	24th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions(IACAPAP), IACAPAP, Singapore			2020.12		
									(3)	Hirota T, Takahashi M, Adachi M, Nakamura K.	Pediatric health-related quality of life and school social capital through network perspectives	PloS one	15・12	e0242670(1-13)	2020.12	10.1371/journal.pone.0242670	SS
27	09030	子ども学および保育学関連	文化差が幼児の睡眠に対して与える影響についての研究 文化差や睡眠慣習といった環境的要因を受けやすい幼児期の睡眠について、日本と中国の未就学児を対象に、両国の文化差がどのような影響を与えるかについて,国際比較を行った上海交通大学との国際共同研究である。	S	S	【学術的意義】 幼児の睡眠の問題については生物学的な要因だけでなく、文化や睡眠に関する慣習といった環境的な要因が大きな影響を与えることがわかっている。これまで、幼児の睡眠に関する文化差の研究ついては、欧米諸国とアジア諸国という大きく異なった文化間での比較がなされていたが、例えば東アジア諸国間といったマイナーな文化差が幼児における睡眠の問題に与える影響について検討したものはなかった。同じ東アジア地域に属する、我が国と中国との間で、幼児における睡眠の問題と情緒的・行動的問題との関連について国際比較を行った。その結果、東アジア地域にある両国間においても、幼児が抱える睡眠の問題の質に違いがあっただけなく、睡眠の問題と情緒的・行動的問題との関連のパターンに違いがあることを初めて明らかにした。 【社会・経済・文化的意義】 睡眠の質および量は子どもの身体的・精神的健康に密接に関連しており、睡眠習慣や睡眠環境の改善が心身の健康改善につながることが期待されている。就学前の子どもの良好な睡眠を促進するために、臨床的な実践と健康政策の策定において文化的要因を考慮する必要があることを明らかにした点で、社会的な意義は大きいといえる。			(1)	Takahashi, M., Adachi, M., Yasuda, S., Osato-Kaneda, A., Saito, M., Kuribayashi, M., Nakamura, K.	Prevalence of sleep problems in Japanese preschoolers in a medium-sized city: Community-based survey using the Children's Sleep Habits Questionnaire.	Pediatrics International	59	747-750	2017. 6	10.1111/ped.13281	
									(2)	Takahashi M., Wang G., Adachi M., Jiang F., Jiang Y., Saito M., Nakamura K.	Differences in sleep problems between Japanese and Chinese preschoolers: a cross-cultural comparison within the Asian region.	Sleep medicine	48	42-48	2018. 8	10.1016/j.sleep.2017.11.1145	
									(3)	Wang, G., Takahashi, M., Wu, R., Liu, Z., Adachi, M., Saito, M., Nakamura, K., Jiang, F	Association between Sleep Disturbances and Emotional/Behavioral Problems in Chinese and Japanese Preschoolers	Behavioral Sleep Medicine	18	420-431	2020. 5-6	10.1080/15402002.2019.1605995	S

業績番号	小区分番号	小区分名	研究テーマ及び要旨【200字以内】	学術的意義	文化的意義、社会、経済、	判断根拠（第三者による評価結果や客観的指標等）【400字以内。ただし、「学術的意義」及び「社会、経済、文化的意義」の双方の意義を有する場合は、800字以内】	重複して選定した研究業績番号	共同利用等	代表的な研究成果・成果物【最大3つまで】							組織評価に係る評価
										著者・発表者等	タイトル・表題等	発表雑誌・出版社・会合等	巻・号	頁	発行・発表年等	掲載論文のDOI（付与されている場合）	R2年度
28	52030	精神神経科学関連	自閉スペクトラム症の疫学および早期発見に関する研究 自閉症スペクトラムの疫学調査及び早期発見に資する指標を明らかにすることを目的に研究を行った。研究では、数年にわたり弘前市の全5歳児とその家族を対象にして自閉スペクトラム症や他の神経発達障害についての情報を収集した。	SS	SS	【学術的意義】 2013年に出版されたDSM-５における神経発達症、特に自閉スペクトラム症の診断基準の改定後、我が国で初めて自閉スペクトラム症の有病率・累積発生率と他の神経発達症との併存率を明らかにした。本研究では、有病率・累積発生率を推定するためのサンプリングや統計手法について厳密な方法を用いたことで、これまでの研究と比較してより正確な有病率・累積発生率を提示したという点で学術的意義が大きいといえる。また、乳幼児の発達の記録をするために日本全国で使用されている母子手帳の発達的指標の中から、自閉スペクトラム症の早期発見に有用な兆候を発見したことで、自閉スペクトラム症児の発達における症状の顕在化のタイミングについて明らかにした点は学術的意義が大きいといえる。 【社会・経済・文化的意義】 我が国では何らかの支援を受けず5歳で初めて神経発達症の診断を受ける児が少なくないことを指摘し、早期発見と支援の社会的仕組みのさらなる発展が我が国の急務の課題であることを明らかにしたこと。また、本研究の知見は、神経発達症の早期発見を行うための社会的資源が少ない自治体においてもユニバーサルなリソースを用いることで、早期発見の地域格差を減少させることに寄与するという点で非常に大きな社会的意義を持つといえる。			(1)	Adachi, M., Takahashi, M., Takayanagi, N. Yoshida, S., Yasuda, S., Tanaka, M., Osato-Kaneda, A., Saito, M., Kuribayashi, M., Kato, S., Nakamura, K.	Adaptation of the Autism Spectrum Screening Questionnaire (ASSQ) to preschool children	PLoS One	13	e0199590	2018. 7	10.1371/journal.pone.0199590	
									(2)	Saito, M., Hirota, T., Sakamoto, Y., Adachi, M., Takahashi, M., Osato-Kaneda, A., Kim, YS., Leventhal, B., Shui, A., Kato, S., Nakamura, K.	Prevalence and cumulative incidence of autism spectrum disorders and the patterns of co-occurring neurodevelopmental disorders in a total population sample of 5-year-old children	Molecular Autism	11	Article number: 35	2020. 5	10.1186/s13229-020-00342-5	SS
									(3)	Hirota, T., Bishop, S., Adachi, M., Shui, A., Takahashi, M., Mori, H., Nakamura, K.	Utilization of the Maternal and Child Health Handbook in Early Identification of Autism Spectrum Disorder and Other Neurodevelopmental Disorders population sample of 5-year-old children	Autism Research	14	551-559	2021.3	10.1002/aur.2442	SS

○令和３年度　保健学研究科自己評価委員会

委員長	伊藤　巧一	（生体検査科学領域　教授）
副委員長	細川　洋一郎	（放射線技術科学領域　教授）
委員（学事委員長）	木立　るり子	（看護学領域　教授）
委員（学務委員長）	藤田　あけみ	（看護学領域　教授）
委員	北宮　千秋	（看護学領域　教授）
委員	則包　和也	（看護学領域　准教授）
委員	辻口　貴清	（放射線技術科学領域　助教）
委員	渡邉　純	（生体検査科学領域　教授）
委員	吉岡　治彦	（生体検査科学領域　准教授）
委員	小河　妙子	（総合リハビリテーション科学領域　教授）
委員	藤田　俊文	（総合リハビリテーション科学領域　講師）
委員	小枝　周平	（総合リハビリテーション科学領域　講師）
委員	橋本　美佐子	事務長